

やすいゆたか著作集 第二十一巻別巻下

長編哲学サスペンス 『沈みゆく列島―スーパ―ヒーロー―孫明道伝』



Copyright (C) 2012 Yutaka Yasui. All rights reserved.

長編哲学サスペンス 『沈みゆく列島―スーパーヒーロー孫明道伝』

目次

物語を始める前にー哲学とは何か？ー	3
はじめに	5
1 日本浄土教の世界	9
2 社会科準備室にて	15
3 四つの疎外	17
4 三上教起ち上げ計画	22
5 若きマルクスの実践哲学	26
6 唯物史観と科学的社会主義	32
7 労働価値説と剰余価値理論	34
8 物化・物象化・物神崇拜	38

9 孫明道のパフォーマンス	42
10 キルケゴールの絶望と信仰	47
11 鄧玉泉の登場	55
12 ニーチェ、自己の限界に挑戦する	60
13 ヤスパース、限界状況と包括者	67
14 ハイデッガー、死の先駆的決意性	73
15 孫明道はいずこへ	79
16 サルトル、実存主義とは何か？	83
17 拉致された孫明道	91
18 孫明道はいなくても	97
19 イギリス功利主義の要約	100
20 プラグマティズムの創始者パース	102
21 鄧玉泉、解放される	110

22 ジェームズのラディカル・エンピリシズム……	113
--------------------------	-----

23 デューイの道具主義的理性……	119
-------------------	-----

連作のあらすじ……	126
-----------	-----

物語を始める前に——哲学とは何か？——

ものごとの元の理つきつめてそをかみくだき説き明かしたる

「煎茶の香り」に刹那、白昼夢を見た榊周次は、それで一気に「哲学入門」のテキスト『崩れゆく学園——高校生探偵奮戦記』を書き上げた。そこではベーコン、デカルトから始まってヘーゲルまでの哲学史をカバーしている。その勢いで、「現代と哲学」のテキストにも取り掛からなければならない。

「現代と哲学」を履修する学生は、大部分「哲学入門」を履修済みであると思われるが、中には、「現代と哲学」のみ履修する学生もいるので、『鉄腕アトムは人間か？』『ヤマトタケルの大冒険』『崩れゆく学園——高校生探偵奮戦記』のあらすじを紹介しておく必要がある。とはいえ既に読んでいる読者にとつては不要なので、あらすじは本書の巻末に載せておくことにする。

各哲学は、それ以前の哲学史の流れを受け継いで、批判的に発展させるものなので、「現代と哲学」のみ履修している学生も、「哲

学入門」のテキストである長編哲学ミステリー『崩れゆく学園——高校生探偵奮戦記』を是非読んでおくことを推奨したい。

なお「現代と哲学」のテキストにするためには本書では扱えなかった現象学、精神分析、フランクフルト学派、構造主義、ポスト構造主義、現代正義論なども扱う必要がある。なにしろ物語を盛り込むと文量が二倍以上に膨らむので、もう一冊書くことにして、本年度はこれで「現代と哲学」のテキストとしたい。

ところでそもそも哲学とはどういう学問なのか、春学期の哲学入門を履修しないで、いきなり「現代と哲学」を履修した学生は戸惑っているかもしれない。大学にはたくさんさんの教科があり、その中の一つに哲学があるので、哲学も他の学問と同様に一つの特殊な学問分野であると誤解している学生も多いかもしれない。

哲学の〈哲〉は物事を深く根源的に捉えることを意味するので、「哲学」は「物事を原理的に捉え返す学問」ということになる。そもそも学問である限り、物事を原理的にとらえ返し、一貫した論理で誰もが納得できるように展開したものでなければならぬ。その意味で、哲学でない学問は真の学問ではないのである。

だから哲学は本来学問それ自体なのであって、すべての学問が学問として成立しているかどうか、吟味する営みといってよいかもしれない。大学の学科で哲学科では、哲学史とともに存在論・認識論・論理学・人間論などが講義されているが、それらは他の学科や専攻でやらないので、それが哲学科のテリトリーになった

という事情なのである。

ただしこの「哲学」という用語は幕末に西周（にしあまね）が〈フィロソフィー〉というギリシア語を翻訳したものである。フィロは愛するで、ソフィーは知という意味である。だから〈愛知〉あるいは〈愛知学〉と訳した方がいいかもしれない。

しかしそれではソクラテスがフィロソフィーに籠めた謙遜の意味が伝わらない。ソクラテスはデモクリトスから自然哲学を学んでいた。古代ギリシアの自然哲学は、世界を構成している根源的な要素は何かについて考察をめぐらしていたのだ。

根源物質つまりアルケーについてターレスは水だと言い、アナクシマンドロースはト・アペイロン（無限定なもの）、アナクシメネスは空気、ヘラクレイトスは火だとした。またエンペドクレスのように土・水・空気・火の四元論を唱えた者もいる。デモクリトスはこれ以上分割できない最小粒子であるアトム（原子）を想定したのだ。そして世界は無数のアトムがケノン（空虚）の中を落下することによって構成されているとしたのだ。

どれも一貫した論理で世界を見事に説明して見せていたが、正解は一つしかないはずなのに、どれが正解か証明しようがないわけで、結局いずれも独断論でしかないわけである。

つまり世界がどのようにできているかのアルケー（原理）は誰も知らないのである。にもかかわらず知っているかに議論してい

る、それで余計に議論がかみ合わないのである。そこでソクラテスは、フィシス（自然）がどのようにできているかという問いよりも、人間の魂（プシケ）への問いに転換したのである。

プシケは古代ギリシアでは魂と生命を意味していた。魂と生命の両方の意味を持っていたのではなく、古代ギリシア人は魂と生命を元々は区別していなかったらしい。だから魂への問いとは同時にいかに生きるかという問いでもあった。だからソクラテスは「大切なことはただ生きることではなく、善く生きることである」と語ったのである。

善く生きるとは、魂の徳（アレテー、特性）を存分に発揮して生きるということだ。そのためには魂の徳とは何か知っていないければならないが、それをまだはつきりは分らないから、対話を通してみんなが納得できるように普遍妥当な知を積み上げていくというのがソクラテスの立場なのである。

つまり対話をするのに、自分は知っていて、相手が知らないということでは論争で相手を打ち負かそうというのではだめである。まず互いに「無知であることを知ること」つまり「無知の知」を自覚しなければならぬと考えたのだ。

対話するのだから普遍妥当な知を求めて対話するのであって、互いの無知の確認が最終目的ではない、とはいえ、互いの独善や独断をまずは取り除くためには、独断的な知を暴露し、相手の無知を知らしめなければならない、さしあたっての目標になる。

プラトンはソクラテスの対話をたくさん紹介しており、その中で実際の対話がどれだけ反映されているかはわからないが、ここからみてもソクラテスの対話は、相手の無知を暴露するところ以上にはなかなか進めなかったという問題がある。でも無知の暴露のための暇つぶしが目的ではなく、あくまでも普遍妥当的な知を求める知への愛が、ソクラテスの対話である。それで彼は自分の対話をフィロソフィー（愛知）と捉えていたのである。

だからフィロソフィーには「無知の知」を自覚した上で、だれもが納得できる知を積み上げるといふ態度が含まれている。翻訳するには、この知にたいする謙遜がでなければならないが、「愛知」や「愛知学」では単なる知的好奇心と受け取られかねない。かといって「哲学」では原理を究めようとする深みは感じられるものの、知に対する謙遜はもうひとつ出ていないような気がする。

それで哲学は、〈物事を原理的にとらえ返し、一貫した論理で誰もが納得できるように展開したもの〉と了解しておくべきである。

哲学者の中には、哲学を観念的に作り上げた理念の体系で現実を捉え、それを基準に現実を裁断する形而上学として捉え、それでは駄目だと反哲学を打ち出している人もいる。そうした形の既成の哲学批判も、現実を原理的に捉え返すための準備としては積極的な意義をもっているが、物事を原理的に捉え返して、だれもが納得できるように一貫した論理で展開しなければならないことは否定できないので、反哲学に固執するのは建設的ではない。

問 哲学とは何か、要領よく説明しなさい。

長編哲学サスペンス 『沈みゆく列島―スーパーヒーロー孫

明道伝』

はじめに

孫文の血を享けたるか明道の日本の民を深く愛せり

七月一日、孫明道は、担任の化学教師真鍋郁子先生に紹介されて、教卓の前に立った。「孫明道といいます。私は中国の国父孫文の血を少しだけですすが引いていますので、大の日本びいきです。日本の青年といっしょにこれから明るい世界にしようと思って、日本にやってきました。これから中国の発展を続けようと思いますと、難しい問題がたくさんあります。その解決のためには日本から学ばなければならぬことが沢山あると思いますが、日本に來ました。最近日本は元気がないという人もいますが、こうして若者が交流して、お互いに励まし合い、支え合っていければ、きっと元

気がでて、また世界を引っ張る日本になると信じています。ライジングサンアゲインですね。どうか皆さんよろしくお願いします。」

松山弘毅が手を挙げて質問した。「日本語がどうしてそんなに上手なんですか、上海から来られたと聞いていますが、日本語学校に通っておられたのですか？」

「小学生の低学年の頃、父の貿易関係の仕事で、大阪に住んでいます。日本語は普通に話せます。忘れないためにWEBを見えています。最近、榑周次先生のウェブサイトを勉強しています。お目にかかれるのが大変楽しみです。」

これには上村陽一と三輪智子は顔を見合わせて微笑んだ。三輪智子が質問した。「榑先生のことはどういうきっかけで知られたのですか？」

孫君は少し躊躇ったが微笑んで述べた。『中国思想史講義』を榑先生は大阪熟年大学で講義されていて、そのテキストがWEBに掲載されているのです。『諸子百家編』『中国仏教思想史』『朱子学・陽明学』『近代中国思想史講義』の四巻本になっていて、三千年にわたる中国思想史を一人で概観されています。これは中国人の学者でもなかなかできません。私は日本人が中国思想をどう評価しているか知りたくて、ウェブをサーフィンしているうちに見つけました。その中に劉曉波の『零八憲章』というあのノーベル平和賞を受賞した宣言の翻訳もされています。榑先生は人権宣言としての意義を認めながら、それが中国伝統思想を否定する立場

から書かれていて、欧米や日本の受け売りでしかない点を物足りない、中国人の熱い支持は得られないだろうとされています。これはとても的を得た批評で、大いに共感しました。」

山田茂樹が起立した。「中国は共産党一党独裁が続いていますが、民主化すべきではないのですか、その点どう思われます。」

担任は慌てて制止に入った。「山田君、政治的な立場を問うのは思想調査にあたりません。孫君が当局から警戒されたりしては大変ですので、そういう質問はやめてください。」

孫は、少しも動揺した様子はなく、微笑んだ。「私はまだ高校生で、自分の考えはこうだとか、政治的立場はこうだとか自信を持って語れるほど勉強できていません。ただ中国共産党の支配体制は、紆余曲折はあったものの、中国経済をまとめ上げ、ここまで発展させてきました。取り組むべき課題は山積していますが、アメリカや日本、世界の人々と協力して一つ一つ解決していく必要があります。そのために日本から学ぶことがあるので、私が日本に留学することを国家と党が認めてくれているわけです。」

もちろん、孫の父親が民主化運動の地下活動家だとか、本人も孫文の志を引き継いで、民主化運動を継承するつもりだとかいうのは、極秘であって、御木本校長も榑先生も口外はしていないことである。

坂本加奈が手を挙げた。「じゃあ、『鉄腕アトム』は人間か？」は

読まれたのですか、この大手門高校が舞台になっているのですか？」

孫は何度も頷いた。「もちろん、読みましたとも、それで是非大手門高校に留学したいと思ったのです。上村陽一君や三輪智子さんともお友達に成れるかもしれないと思ひまして。」

上村陽一と三輪智子は孫明道の側にいつて、肩を抱き合い、堅い握手を交わした。「ようこそ大手門高校へ、大いに歓迎します。」と上村陽一は上機嫌で言った。クラス中が万雷の拍手を送ったのである。

.....

榊周次は、長編哲学ミステリーの続編に取り組まなければならない。前編の『崩れゆく学園』（二応ミステリー）になっているが、本書『沈みゆく列島』の方は謎解きにはなっておらず、せいぜいサスペンスである）は、ほんの刹那、煎茶の香りを嗅いだ時の白昼夢だったということになった。また本巻も白昼夢の類ではそれこそ二番煎じで、読者に叱られそうだ。

なにしろこれから19世紀、20世紀の哲学思想を展開しつつ、ストーリーを繰り広げていかなければならないので、スケールの大きい話にする必要がある。しかも大手門高校が舞台だということにはシリーズの性格からいつて無視するわけにもいかないだろう。

スケールを広げるためには、外からの新しいヒーローに登場し

てもらわなければならない。ちょうど倉吉良造の講演会の後から話を再開することになる。校長室で倉吉から学校改革について興味深い提言があった。

「御木本先生、大手門高校の生徒たちの学力を上げるには、やはり外から喝を入れてやる必要があるでしょう。私の上海の知人に民主化運動の地下活動家いましてね、その息子が日本に留学したがつているそうです。噂によると稀に見る優秀な成績だそうで、父親が二、三年日本で働いていたこともあり、日本語は普通に話せるそうです。なんでも日本で政治思想や経済学を学んで、民主革命に役立たいというのが願いだそうで、今十八歳になったばかりで、三年生と思いますが、直ぐにでも日本に来たいから紹介して欲しいということです。ただ経済的にはそれほど裕福ではないので、なんとか学校の後援会かなにかで寄付でも募って、奨学金を援助してあげて欲しいのですが。」

榊も口を添えた、「そりゃあいい刺激になりますよ。青雲の志を持ち憂国の精神をもった中国の青年が、日本の現在の無気力な青年にとつては救世主のような存在になるかもしれません。日本の学力低下が深刻だという声が高まっていますが、向こうの優等生が実際どの程度のものなのか、ショック療法になるかもしれません。校長改革の趣旨にピッタリではないですか」と御木本校長をヨイショまでして倉吉に加勢した。榊は、難関大学への合格率をあげるためにはなんでもよいという、いかにも銀行員あがりらしい御木本校長の改革姿勢には批判的である。

「そりゃあ話題性もあって、学校の宣伝にもなりますね。実現できるかどうか、後援会の金鶏会には関西財界の有力者もおられるので、彼の経営する企業も中国に進出されているようなので、この話に乗ってこられるかもしれません。〈善は急げ〉です。すぐにでも手を打ちましょう。」御木本校長は上機嫌で応じていた。

孫明と書いてソンミンと読む。字は明道ミントオだ。中国革命の父孫文の血を少しは引いているらしく、孫文がやり遂げられなかった、革命を引き継ぐのが、父孫周、字は智仁の願いである。

孫明道は、オリエンタル電業の山下憲明社長の骨折りで、毎月十万円を会社の基金から補助してもらえることになったのである。それでなんと7月1日から、孫明道は大手門高校の三年生として登校してきたのである。なにしろ大手門高校はトップ校であるということもあって、日本語の授業についていけるか、学科の学力は大丈夫かということで学力テストをしたところ、ほとんどの教科で日本語でテストをしても満点近くとつたので、三年生からということであつた。問題はなかった。

.....

二〇一一年7月1金曜日6限目はいよいよ榊周次先生の日本史の授業である。礼を終えてから、榊先生が「孫君いますか？」と問いかけると、孫明道は「ハイ、私が孫明道です、よろしく願います。」と元気に応えた。

「こちらこそよろしく願います。なんでも上海にいた時か

ら、私のウェブサイト『中国思想史講義』や長編哲学ファンタジーを読んでくれたとか、私は中国語は苦手なので、これくらいいろいろ教えてください。よかったら、ミクシイに入って、メルトモになっていただいて、いろいろ情報交換しましょう。」

孫は少し照れながら、「先生の『零八憲章』の翻訳は素晴らしかったですよ、法律的な堅い文章でなく、デスマス調にされていますね。なるほど哲学者ならではの発想かなと思いました。」

「おっと、ここは受験生のクラスですから、長話はできません。放課後社会科準備室に来てください。そこでゆっくりお話ししましょう。」

ところでこのお話は『現代と哲学』のテキスト用に作られた話なので、イギリス功利主義、フランス実証主義から始まって、マルクス主義、実存主義、プラグマティズム、現象学、精神分析、フランクフルト学派、フランス現代思想、最近のアメリカ正義論そして締めくくりとしてネオヒューマニズムを組み込まなくてはならない。

（そのつもりで書き始めたが、この物語ではマルクス主義・実存主義・プラグマティズムという十九世紀から二十世紀の三大思想しか盛り込めなかった。ネオヒューマニズムについては各思想と関連させて取り上げている。結局もう一冊『現代と哲学』用のテキストを書かなければならない。）

果たして日本史の授業や、孫明道がらみで中国思想や民主化問題など扱っていて大丈夫なのかと心配されている読者もおられるかもしれない。

なにしろ哲学のテキスト用にミステリーやファンタジーなどというのは、それ自体あまり例がない冒険なので、どのように哲学をうまく組み込めるのか、綱渡りのようなものかもしれない、しかし今までの流れもあり、榊先生の日本史の授業も覗いておかなくてはならない。

問 この物語の主人公孫明道が大手門高校に留学することになったいきさつを説明しなさい。

1、日本浄土教の世界

ただ弥陀の名を称えよと浄土教経も寺塔もみな無みせるや

「さて日本において阿弥陀仏信仰は何時頃から行われていたでしょう。聖徳太子の頃から、奈良時代から、平安末期からの三択の内どれでしょう。山中良太君。」

山中良太は「えーと、市の聖と呼ばれた空也上人は、行き倒れに成りかかっている人々に念仏を唱えるように教えたようですから十世紀ですね。すると平安中期ということになります。それ以前とすると奈良時代だけれど、奈良時代に阿弥陀仏信仰はあったかな？」

「中国では阿弥陀仏信仰は何世紀ですか、孫君、」孫は初めて当てられて照れ笑いした。「榊先生の『中国仏教史講義』で402年の白蓮社が阿弥陀信仰の起源だと読んだ記憶がありますが、記憶違いかもしれません。」

「すごい、よく覚えていますね。私はもう熟年なので、自分で書いていても細かい年代までは覚えていませんが、五世紀初めですね。それで六世紀になって、曇鸞・道綽・善導という浄土教の偉いお坊さんがまして、全盛時代になるのです。ですから聖徳太子の時代の仏教には阿弥陀信仰は既に含まれていました。聖徳太子が死後天寿国におられる様子を描いた『天寿国繡帳』というのがありますが、その天寿国というのは実は阿弥陀浄土のことなのです。中国でも日本でも浄土教信仰が大流行した際には末法思想が影響します。だれか末法思想について説明してください。」

「正法・像法・末法ですね」橋田譲治が説明を始めた。「釈迦没後五百年間は、正しい教えが生きていて、覚りに達する仏陀が続出し、經典が書かれ、それに基づく修行をやり遂げる人がでます。その後千年間は正しい教えは残り、その修行をやり遂げる人はい

るのですが、覺りに達して、經典を書く人は出ません。釈迦没後千五百年後には教えだけ残って、修行をやり遂げる人も、覺りに達する人も出なくなります。これが末法の時代で、末法は一万年続くとされています。中国では551年に末法に入ったとされたのですが、日本では正法の期間も千年間と考えたので、1052年が末法元年になりました。当然末法の時代には、經を読んで勉強したり、修行したりしても覺りに達することはできないので、自力の修行で覺りを開くことはあきらめて、既に覺りに達しておられる阿弥陀仏の力にすがって極樂往生させてもらおうということになります。つまり自力本願の道を捨てて、他力本願でいきましょうということですね。」

「ではどうして阿弥陀仏の慈悲にすがろうということになったのですか、釈迦如来ではなく」と榊はさらに質問した。

桜木綾香が応えた。「それは『弥陀の本願』という言葉があります。阿弥陀如来が覺りをひらかれる前の法藏菩薩の時に、『私が大変な修行をしてその結果、覺りに達したとしたら、生きとし生けるものすべてを苦しみの世界から救いとして、私の到達した極樂浄土に往生させることができるのでないと納得できない。そこまでできない覺りなら、覺らなくてもいい』と誓願されたのです。それで見事に成仏されたので、生きとし生けるものはすべて阿弥陀浄土に往生できるということなのです。末法では阿弥陀様に救っていただくしか方法がないということですね。」

「ところで釈迦如来は、ゴータマ・シッダルタですから歴史上

の人物ですね。法藏菩薩や阿弥陀如来は歴史上の人物なのですか？」榊はどんな生徒に問を發し、できるだけ生徒を主体にして授業を進めさせ、向学心を刺激しようと努めている。

桜木綾香は寂しそうな表情で言った。「残念ながら、架空の人物ですね。仏の慈悲で救って欲しいという皆の願いが、法藏菩薩や阿弥陀如来という慈悲の権化を生んだのです。」

「なんだ、架空の人物なら、そういう作り話に過ぎないから、念仏を唱えたら極樂浄土に行けるというのもただの迷信ですか？」山田茂樹が呆れたように言った。

皆残念そうに顔を見合わせた。三輪智子が言った。「それはひとつとしてファンタジーの世界のようなものじゃないかしら。人間の想念で作上げた法藏菩薩や阿弥陀如来、そして阿弥陀如来が住むという西方浄土は、たしかにフィクションかもしれませんが。しかしこのリアルだと思っている世界だって、カントによれば意識によつて構成されているということでしょう。大乘仏教の『華嚴經』では『三界は虚妄にして、皆一心の作るところ』という一節があるそうです。ですから法藏菩薩や阿弥陀如来や極樂浄土も、ただ個々人の勝手な願いで作られた想念ではなくて、生きとし生けるものつまり衆生を救いたいというのが仏の真実の想いなら、その想念が作り上げた世界は、この世界と負けないくらいリアルかもしれないってことじゃないでしょうか。」

「三輪さん、かなり覺りに近づきましたね。要するに異界や浄

土がファンタジーというけれど、この現実だってファンタジーかもしれないじゃないかというのが、『ソフィーの世界』のテーマである（ソフィーの不安）なのです。だから逆に、阿弥陀浄土に往生するには阿弥陀如来を思い浮かべたり、極端な話、〈南無阿弥陀仏〉と御名を十篇唱えるだけでいいのだということになります。」

孫が手を挙げた「先生、中国の浄土教というのはナーガールジュナの空の思想やアサンガ、バスヴァンドウの唯識論がとても難解で、こりや駄目だ、一生考え続けたって到底覚りには到達しようがない、何十回も何百回も生まれ変わらなければということ、それで当面は阿弥陀仏に救っていただこうということになったのでしよう。日本の浄土教でも事情は同じですか？」

「さすが、孫明道君核心をつきますね。空也は市の聖（ひじり）と言われまして、行き倒れの浮浪者が息を引き取る時に、これしか方法がないというので、南無阿弥陀仏と御名を称える称名念仏をすすめたのです。庶民の暮らしでは、仏道修行ができないので念仏でもいいじゃないかというのが、浄土教の念仏だったわけです。ですから一方で天台法華宗で〈法華一乗の思想〉に基づいて、法華経を学んでいても、念仏と兼ねて当然なのです。」

それが恵心僧都源信の『往生要集』では、僧侶といえども修行をやり遂げることができないので、結局阿弥陀仏の本願にすがらないという立場に成ります。『法華経』では覚れないということでしょうか、天台宗の場合、天台智顗の五時八教、一念三千、三諦円融の高度な仏教哲学が理解できないとだめですから、なか

なか難しかったのかもしれませんが。」

山田茂樹が発言した。「平安末期の法然は専修念仏を唱えましたね。それはもう末法だから、たとえ僧侶でも難しい經典の研究や、厳しい修行を行っても無駄で、ただひたすら阿弥陀仏の本願にすがって南無阿弥陀仏を称えるだけが正しい選択だということですね。これは寺や塔を建てたり、經典を書写したり、滝に打たれて精神統一したり、托鉢したりしても無駄だということですね、そうなると既成の仏教教団とその教義体系、機構や僧侶の存在自体を否定しているように受け止められますね。」

「鋭いね、山田君流石だ。」と榊は感心して言った。「まさしく既成の仏教を解体してしまうような過激な議論と受け止められかねないことになる。それが『選択本願念仏集』の本質だ、だからこれは法然のごくわずかの直弟子集団の間でしか読まれていなかった。たとえこの書物の存在は隠せてもそこに書かれてある精神に従って布教しているので、やがて大弾圧を食らったわけだ。」

「一二〇六年〈建永の法難〉ですね、」山田は続けた。「その前に延暦寺の僧侶たちが念仏をやめろと要求してきたので、弾圧を避けるために自主規制していますね。一二〇四年に『七箇条御起請文』を制定して、他宗批判を禁じています。」

「山田君よく勉強していますね。現在でも法然を教組と仰いでいる浄土宗ではこの『七箇条御起請文』を法然自身の教えとして、他宗と争いにならないようにしています。しかしこれは明らかに

天台宗や真言宗の僧侶たちに迫られて、法然とその直弟子たちが認めさせられた念書ですね。ここに禁じられているようなことをしていたので、それは既成の仏教及び仏教教団の全否定だということに騒ぎになったわけですね。」

『七箇条御起請文』

- ① 天台・真言の教説を破し諸仏菩薩をそしらぬこと、
- ② 無智の身で有智の人と諍論じようと思ふこと、
- ③ 別解(べつげ)・別行(べつぎょう)の人に対し本業(ほんごう)を棄置し嫌わぬこと、
- ④ 念仏門には戒行がなく造悪を恐れないなどと主張せぬこと
- ⑤ ことごとくに私義をとめないこと、
- ⑥ 痴鈍(ちどん)の身をもつて道俗を教化(きょうけ)しないこと
- ⑦ 仏法にあらざる邪法を説いて正法とせぬこと、

上村陽一が起ち上がった。「つまり、この起請文から、法然の弟子たちの活動を想像するとつぎのようなものだったということですか？」

南無阿弥陀仏を称えるしか救われる方法はないということは、法華経に登場する諸仏・諸菩薩など信仰しても意味がないということ、これまでのお経のありがたい言葉は末法の愚鈍な我々には迷いの因(もと)であり、一心不乱に念仏を称えるという末法における唯一正しい修行の妨げになるということですね。それでこれまでの既成仏教の教義も修行も一切要らないということになります。ですからこれまで正法とされてきたことを否定する悪を行っていいことになりましたが、戒律を守り善を行うことによつて、自力で

救われるのではなく、弥陀の本願にすがる他力によつてのみ救われるのですから、念仏門には戒行はなく、悪をなすことすなわち造悪を恐れないのです。そして既成の經典を学んだ一知半解より、ただ弥陀の本願にすがる愚鈍の方がむしろ正しいといつて、煩惱に生きる俗人たちが仏道修行をする僧侶を馬鹿にして批判するようになったということですね。」

孫明道が「へえー、それじゃあ日本浄土教というのは、既成仏教を全否定して、仏教の文化革命を起こそうとしたということですね。なんだかワクワクしてきました。」と反応した。

上村陽一が続けた。「でも疑問ですが、本来浄土教は自力で覚れないから、阿弥陀仏に救ってもらふことでした。でも覚れないまま阿弥陀浄土に行つても、そこで修行をして、今度は自力で覚らなければならぬのでしよう。そこで阿弥陀仏の慈悲に感化されて、菩薩に成り、この苦界に戻つてくるというのがあるわけですね。そしたら、自力信仰への否定は仮の否定でしかなく、だから起請文も案外本気だったのではないでしようか？」

「それは二種回向(にしゆかい)と言います」と榎が応じた。「阿弥陀浄土に招いてくださるのが往相回向、阿弥陀浄土からこの苦界に戻されるのが還相(げんそう)回向(かいこう)というのです。親鸞は『教行信証』で二種回向論こそ浄土真宗の眼目だりましたが、法然には二種回向論ほとんどみられません。」

法然の父は武士という修羅(こりや争ひの境涯)に生きなければならず、

父母は夜襲をかけられて殺されてしまったのですが、それでそういう修羅に生きなければならなかった両親が往生できる道はないかということですね、これが法然の問題意識です。ですから智慧第一と呼ばれた法然だけでも、ただひたすら称名念仏するしかなかったということです。その教えが既成の仏教に対する全否定とうけとめられたわけですね。」

山田茂樹が発言した。「法然と親鸞の区別ですが、法然は『選撰本願念仏集』で専修念仏、親鸞は『教行信証』で二種回向と悪人正機説という区別でいいのですか？」

橋田譲治がマニアックに言った。「それはちよつと違うよ。『教行信証』には悪人正機説は書かれていません。親鸞の弟子の唯円が親鸞から教わったとして『歎異抄』に書いているのです。」

榊周次は感心して言った。「橋田君、日本仏教史では免許皆伝だよ。ついでに言うと、悪人正機説はセンター試験では親鸞に入れてしまうけれど、本当は法然に入れる方がいいんだ。なぜなら実は、あれは法然から教わった話だからね。その証拠に法然の弟子の源智が『法然上人伝記』にこう述べているんだ。」

「一、善人尚ほ以て往生す、況や悪人をやの事。(口伝これあり) 私に云はく、弥陀の本願は自力を以て生死を離るべき方便ある善人のためにおこし給はず。極重悪人、無他方便の輩を哀みておこし給へり。」

桜木綾香が挙手した。「善人は自分は戒を守っているので、極楽に往生できるだと思いいこんでいる人ですね。そういう人はまさか自分が地獄に落とされるとは思っていないので、阿弥陀仏の本願にすがろうとする気持ちがうすいわけです。それに対して悪人は自分は罪が深いので、地獄で苦しむことになると思って、それで阿弥陀仏の救いを切実に求めています。阿弥陀仏は自分の救いを必死に待ち望んでいる悪人こそ、助けたいと願っているわけです。」

問題は悪人の例としてどういう人々を考えていたかですね。法然の場合は彼の父のような修羅に生きて土地を奪い合う武士ですね。それから建永の法難のきっかけになった松虫、鈴虫という女御が後鳥羽院の許から逃げてきて、尼になろうとしたのを教団の存亡をかけて命がけで守ろうとしました。女性も煩惱に身を焦がし苦しんでいる悪人なのです。それから不殺生戒を犯して、獣や魚を取っている猟師や漁師たちですね。」

榊が応えた。「女人往生は法華経にも出てきますが、女人往生のためにみんなが命がけになったのは法然たちが初めてでしょうね。女人たちがはじめて人間として尊重されたという事件でした。」

日々煩惱や葛藤に生き、生きる糧を求めて、動植物の命を奪い、富を奪い合う、これは実は人間だれでも生きている限り、避けて通れないことです。だから悪人こそ人間の生々しい姿なのです。戒を守って清く正しく生きているというのは、観念的なきれいごととにすぎず、その人がきれいごとで生きるためには、ほかの人がその人の代わりに悪人として生きているわけですね。ですから貴

族や僧侶たち特権階級に対する反発を悪人正機説は秘めていて、既成の仏教を総否定しかなない論理を含んでいたということでしょうね。」

孫明道が質問した。「中国浄土教の善導は、厭離穢土・欣求浄土ということで、早く浄土に行きたいと考え、とうとう木から飛び降りて自殺したという話がありますが、彼らは本気で浄土が実在し、そこに行けると考えていたのでしょうか？」

暫く考えてから榊は応えた。「これは根底的な疑問ですね。親鸞はこう言ったそうです、私は法然さんの教えを信じているけれど、本当は法然さんにたぶらかされている、つまり騙されているのかもしれない、でもそれでもいいんだと。実際、極楽浄土に行って戻ってきたとしても、その記憶は消されていますから、もう信じるしかないわけです。第一現在の浄土真宗のお坊さんも、極楽浄土が実体として存在し、死後そこに往生するなんて信じていない人が多いのです。」

「へー、そんな人坊さんになる資格ないわね」と桜木綾香は言った。「いや、そうではなくて、そう言われたのは本願寺の責任ある教学担当のお坊さんです。二種回向の中で往相回向というのは、阿弥陀仏の慈悲に導かれて暮らすことですね、人々の助けや自然の恵みに感謝して生きる生き方がそうだということです。還相回向は、それに感謝して、その慈悲の心を周りの人々や生き物、自然に返していくことだと説明されました。死後に極楽浄土があつてそこに生まれるなんて、だれも証明できません。それに仏教は

魂がそれ自体で存在するとは考えませんから、不滅の魂があつて、浄土に行くなんて方便だということですね」と榊は応答した。

三輪智子がフォローした。「親鸞さんは〈自然法爾〉と言われてますね。あるがままに法に包まれているという意味で、この煩惱に満ちた苦界の世界も、実は御仏の慈悲によつて生かされているわけで、南無阿弥陀仏と称えてそれに気付くと、この世界がそのまま極楽浄土だということでしょう。煩惱がそのまま覚り、つまり煩惱即菩提ということなのです。死後の世界とか、生まれ変わりとかが、地獄極楽とかもみんな人間の想念に過ぎないわけで、ファンタジーなのです。ただ仏教では根源にこのリアルな現実だつて想念で出来ていてのではないかという考えがあるようなのです。だからファンタジーだつてその中にある意識ではリアルですから、その意味では、死後の世界を信じるといふのもあながち否定できないということでしょう。」

「そうですね、全く、三輪さんの説明が一番近いでしょう。ベルが鳴ったので終わります。宗教の話は切がありませんね。」

問 日本浄土教の特色を哲学的に論じなさい。

2、社会科準備室で

中国は発展途上の国なれば成熟した後、道は見えるや

放課後、社会科準備室に孫明道が榊周次を訪ねてきた。大手門高校の三年生ともなると放課後は予備校に通っている者が多い。上村陽一と三輪智子は水曜日と金曜日の放課後は社会科準備室で榊周次と話をするのを習慣にしていた。

孫は早速口を開いた。「いやあ、日本史の授業楽しかったですよ。不思議と榊先生の授業になると皆発言したくなって、どんどん発言する、それがどれもよく考えた内容なので感動しました。既成の仏教に対する批判が、仏教そのものの否定にもつながっている、念仏を称えることも禁止されて、浄土教そのものが危機に陥っていくというのは、何か物事の根源に迫っていく哲学を感じま

した。日本の高校生、学力低下とか言われているけれど、とんでもない。本当に大手門高校に来てよかったです。」

「そうですか、そりやあ良かった。孫君が来てくれたので、みんな張り切って発言したのかもしれないよ。孫君、それにしても記憶力抜群ですね。年号なんかは一度読んだら忘れないのではないですか？」榊は孫君の記憶力の凄さに言及した。

陽一が言った。「年号だけでなく、一度読んだら文章を全部暗記しているのじゃないですか、孫君は？もっぱらの噂では、大手門高校に入る際のテストで、全教科ほとんど満点に近かったそうじゃないですか、それも日本語で受けたのでしょうか。空海が虚空蔵求聞持法（こくうぞうぐもんじほう）を会得して、超人的な記憶力を持つて、留学して真言第七祖の恵果（えか）から両部曼荼羅を伝授されたのですが、本当に記憶力のいい人というのは存在していて、クイズ番組でもいますね、何でも答えられる人って。」

「小学二年生と三年生のときに日本に居まして、友達少なかったの、トランプで神経衰弱というゲームを一人でやってまして、あれで記憶力鍛えたのかも。記憶力がいいので、テストなんかはできるのですが、その分独創的な考え方というのはできないような気がします。三輪さんのようなフアンタジーと浄土教を結びつけるというのは実に天才的です」と孫は智子に感心した。

陽一も同調して、「今日の三輪さんは冴えていましたね。というか、思索が深いし、それでいて夢がありますね、榊先生のお話だ

と、浄土教はもうだめかなと思ったけれど、三輪さんの解釈で見事に甦った気がします。」

智子は照れ笑いをして、こう語った。「ファンタジーについてはずっと中学生の頃から考えてきたし、榊先生や陽一君のお蔭で、ファンタジーの中で生きているような感覚だったので、それだけでなくファンタジーと関連させてしまうのです。今日の話はたしかに自分でも不思議な力に導かれてしゃべらせられていたような気がしますね。」

「そういう時って人生に何回かあるのです。陽一君の場合は死の宣告なので思い切り落ち込むようなことだけど、天が与えた試練で、17歳の間に何かすごい体験なり発見なり、創造的な仕事を陽一君にさせるために17歳で死ぬ運命だと警告してくれているとも考えられるね。」

孫明道も同意した。「若者は元気なので死を身近に感じないで、ついだらけてしまいがちです。しかし今だからできること、今こそやらなければならないことをやらなければ、結局何もできないうちに歳を取ってしまうのです。〈少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずへからず。〉と朱熹が言ったことになっています。私も孫文の志を継ぐ気ならいつ何時命を奪われるかもしれないという覚悟で生きていくつもりです。」

「へー孫君まだ17歳でしょう？危ないことをして若死にしたら駄目よ。あなたぐらい才能にあふれていたら、長生きすれば人類

のために大きな仕事ができるのだから、血気にはやって大切な命を粗末にしたらもったいないわ」と智子はたしなめた。

「中国も国際人権規約を批准しているし、民主化運動や人権運動に対して簡単に命を奪うようなことはできなくなっている。それにノーベル平和賞の劉曉波も言っているように、人権派も暴力革命や内戦で権力を倒すのではなくて、あくまでも非暴力運動でと言っているの、昔ほど命がけではなくなっているだろう。ただどんな激変が起こるかもしれず、共産党自体が分裂して抗争するなどすると人民解放軍を巻き込んでとなれば流血も大きくなるだろうが、まあ心構えとしては命がけということは大切だろうね。」

陽一は明道に訊ねた。「孫君は、政治家志望のようだから、大学は法学部志望なの？」

「劉曉波たちは、欧米や日本のシステムをそのまま導入すべきだという発想で、新自由主義の資本主義ですよ。現在、中国では格差が拡大しすぎて暴動が起こっています。それは欧米資本主義の導入が不徹底だから起きているのか、導入しすぎたから起きているのか、難しい問題です。中国では共産党の一方独裁からくる権力の不正腐敗ということもあって、余計に問題が複雑になっています。この問題を解決しようと思ったら経済学の知識が必要なので、経済学部にしようか法学部にしようかも迷っています。唯興味としては近代の日中交流史です。」

榊は言った。「中国共産党は、コミンテルンつまり国際共産党の

働きかけで生まれたので、中国社会主義のルーツはロシアだと思われがちだが、日本留学によってマルクス主義を知った人たちが多いんだ。初代総書記になった陳独秀や李大釗（りたいしょう）など中心メンバーも日本留学生だった。21年第一次全国代表大会に参加した李達や大会の会場に自宅を提供した李漢俊も日本留学生だった。日本留學生の党組織代表として参加したのが周仏海だった。だから中国社会主义の半分は日本經由みたいなものだ。」

孫は頷いた。「そうなんです。周恩来も日本に留学して社会主義に接して、五・四運動の後フランスに留学、そこで共産党に入っています。毛沢東も明治維新にあがれて歴史に興味を持ち、陳独秀の影響を受けて共産主義に感化されたわけです。そういう要素がコミンテルンの指導から脱却して人民中国を成立させた要因にあるのではないか、そこにも興味があります。」

陽一は明道に訊ねた。「中国共産党は、文化大革命後は改革開放路線で、きわめて資本主義的な発展を遂げてきたのに、共産党の看板を下ろしていません。それなら資本主義からどう脱却して共産主義を実現するのかの道筋を示すべきですが、それもなくてやっています。日本から見えますと大変奇妙に思えるのですが。」

「まだ一人あたりのGNPから見ると、中国は発展途上国なので、今は市場経済を發展させて資本主義的な發展によって、共産主義の物質的基礎を築いているつもりでしょうね。資本主義が成熟すれば、やがて共産主義への道筋が見えてくると言いたいのではないのでしょうか？」と孫は自信なさげにつぶやいた。

榊も頷いた。「ええ、そのつもりでしょうね。生産力が發達すれば、資本主義的に發展できなくなつて、それでやつと共産主義が採用できるということでしょうね。だから共産主義を掲げながら今は資本主義的にやっているということなのです。」

問 中国の資本主義的發展を推し進めているにもかかわらず、中国共産党が共産党の看板を外さない理由を説明しなさい。

3 「四つの疎外」

精根を傾けつくりしものなれど立ちはだかりて我をさいなむ

三輪智子が切り出した。「私たちは、マルクス主義というのがどういう理論で、どんな哲学を持っていたのか、よくは理解できていないのです。孫君は学校できちんとマルクス主義を学んだので

すか？もし学んでいるのだったら、貧富の格差が拡大し、公害だらけの中国経済に対して、疑問に感じる筈だと思いますが。」

孫明道は頸を傾げた。「中国の場合、スターリン批判は徹底しませんでしたし、毛沢東個人崇拜も払拭しきれていませんから、マルクス・レーニン主義教程の焼き直しのような感じが残っているかもしれませんね。もちろん研究者の間では欧米や日本の新しい研究動向を学んでいるようですが、学校教育ではそういう思想教育の比重は下がっていて、充実させることはできません。マルクス主義を深く研究して教育すると体制批判に跳ね返るおそれもあるでしょうし。榊先生のWEBのマルクス研究などはすごく新鮮に感じます。まだまだ理解するところまではいきませんが。」

「マルクス主義は元々は資本主義体制をひっくり返す体制批判の革命的哲学なのに、社会主義諸国では体制の御用哲学になってしまったので、マルクス主義を体制批判に使うことも、マルクス主義を批判することも国家転覆罪を適用されかねないわけで、難しいのです。」と榊は眉間にしわを寄せた。

陽一は明るく言った。「21世紀のマルクス主義が困難なのは当然です。日本でも大変難しい、でも格差拡大の矛盾や環境問題、出来上がった組織や体制や生産物が作った人々の首を絞める自己疎外の問題などに鋭い批判原理になるという意味で、マルクスの意義は大きいと思います。」

孫は言った。「自己疎外論はヘーゲルやフオイエエルバッハを踏ま

えなければならぬというので、専門的な議論と中国では見なされます。ただ官僚主義や格差拡大問題、環境問題などは自己疎外論を使って大いに批判していくべきでしょうね。」

「ヘーゲルは労働の外化が、生産物になって対象化されることを人間の事物化として捉えました。これには、人間が物となってしまう、物扱いされるというネガティブ（否定的・消極的）な意味だけでなく、物に人間の本領が発揮されるというポジティブ（肯定的・積極的）な意味もあるのです。」と榊が言った。

「その否定面が物という精神にとって疎ましいものとして外にだすという疎外、それも自己疎外ですね。」と智子は頷いた。「そして肯定面は、物を含めて人間だというネオヒューマニズムの先駆だと榊先生は注目されているのでしょうか。」

「さすが、三輪さんよく読んでくれますね」と榊は感心した。そして「フオイエエルバッハは、精神の対象化が物となって疎外されてしまい。それを精神が物質という外化された姿を揚棄して精神に取り戻すというヘーゲルの疎外論を、絶対精神の自己疎外として解釈したんだ。」と説明した。

陽一が続けた。「絶対精神というのは絶対者であり神のことですね。この絶対精神こそ、フオイエエルバッハに言わせたら人間の類の本質の自己疎外だというわけでしょう。」

孫は訊ねた。「神が人間の類的本質の自己疎外だという意味が、

よく分からないのです。上村君、説明してください」と陽一を御指名だ。これは日本の高校生の実力を試してやろうという魂胆かもしれない。陽一は少し緊張した。

「人間は道具や機械を使い、言語などのコミュニケーション能力を高めて、分業や協業を発展させ、さまざまな生産物を生み出し、高度な文明を築いてきました。そういう人間ならではの種族的な本質を類的本質というのです。でも分業なので、それぞれの個人はあてがわれた一つの作業しかできないので、自分が巨大な文明を築き上げたとは思えないわけです。それで自分の類的本質を自分の他者である神を幻想的に生み出して、それに自己疎外するのです。神は人間たちの絶対的な他者として、人間から自立し、逆に神が主体になって、自然や生産物そして人間も生み出したように、自己疎外の主体として捉え返されているのがヘーゲルの哲学体系だという批判です。」

智子が引き継いだ。「だから神は実は人間の類的本質の自己疎外に過ぎないのだから、本当に大切にしなければいけないのは人間の類的本質だということです。」

孫はまた質問した。「でも自分の本質と感じられないのにどうしてそれを人間だと感じられるのですか？」

陽一は頭をひねった。「さあ、そこですよ、問題は。そこでフオイエルバッハは、ヘーゲルは理性主義だと考えたのではないでしょう、あくまで感性的なものを思惟に還元することによって、

精神から事物が独立していることを否定して、主体に取り戻そうとしたと解釈したのです。それでそれに対抗して感性の立場をフオイエルバッハは打ち出します。自己の色や形や匂いや感触として人々や自然や生産物が捉え返されれば、人々や自然が自分自身として感じられるということでしょう。フオイエルバッハは（人間は食ふところのものである」と述べているそうです。」

榊が補足した。「それでフオイエルバッハは理性に対して感性を対置して人間身体の立場に立っていたということ、彼の唯物論を人間学的唯物論と呼ぶのです。」

孫はさらに訊ねた。「マルクスは、フオイエルバッハを一時熱狂的に支持したのに、すぐに物足りなくなつて、フオイエルバッハを批判しますが、どういう点で食い違っていたのですか？」

「マルクスはフオイエルバッハに手紙を送って、宗教の自己疎外だけでなく、悲惨な労働者の自己疎外について論じて欲しいと頼んだらしいのですが、どうも返事がなかったようです。それでフオイエルバッハは頭の中だけで疎外を問題にしている哲学者に過ぎないと考え、自分で（疎外された労働）について草稿を書いたのです。それがいわゆる『経済学・哲学手稿』と呼ばれている『一八四四年、パリ草稿』です。そこでは（四つの疎外）が展開されています」と榊は説明した。

智子がその中身を説明した。「第一の疎外が（生産物からの疎外）ですね。労働者が作り出した生産物が労働者のものにならず、労

働者から離れ、労働者から独立し、労働者に敵対して、労働者を抑圧するようになる疎外です。これは労働者が日々生産することによっておこる疎外ですから、自分で自分の首を絞める自己疎外の典型的な例です。」

孫は割って入った。「榊先生は、これを単に労働者の自己疎外に止めず、芸術家の創作した作品や、人類の文明や地球温暖化まで人間が生み出した生産物が疎遠なものとして人間を抑圧する〈生産物からの疎外〉に入れておられますね。」榊はそれに対して少し微笑んだが、敢えて説明は加えなかった。これは実は議論があるところで、榊を批判する論者もいるようだ。

智子は続けた。「第二の疎外が〈労働からの疎外〉ですね。もし労働が自由で自発的な労働なら、その生産物から疎外されることもなかったはずですね。だから労働が強制された労働になっていて、一方的に与えられた作業を繰り返すだけの労働の場合は、労働は疎外された労働であり、苦役でしかないということです。」

「労働はどの部署になるかは、自分の希望通りはいかないものだろう、だからこの労働からの疎外はむしろ当然ではないかという感想の人が多い、マルクスは労働が主体から疎外されて、苦痛でしかないことを問題にしているのだ。もちろん労働の疎外がなくなっても、どの部署で働くかは労働者が自分たちで調整し合うべきことで、厳しい労働は輪番にしたり、見返りを大きくしたりして調整することになるだろう。支配関係で一方的に決められるのと、話し合いで調整するのは大違いなんだ。」と榊は補足した。

陽一が続いて説明した。「第三の疎外が〈類的本質からの疎外〉ですね。生産物や労働からの疎外が起こるのは、〈類的本質からの疎外〉によるのです。つまり人間は労働することを本質的な特長にしています。労働によって自己の能力を発揮し、自己実現できるのです。だから労働は自己実現活動です。ところがこの本来は目的である筈の自己実現活動が自己喪失活動としてなされており、現実の目的である生活手段を獲得する為の手段でしかないのです。これが〈類的本質からの疎外〉という意味なのです。」

明道が言った。「人間の類的本質は労働に限られませんね。言語や言語を使って考える活動や社会を形成したり、他にも色々考えられるでしょう。」

榊が応えた。「人間の本質は何かという問いに対して、労働とか言語だとか社会形成だとかいろんな答が可能ですが、一つではありません。マルクスは〈労働の疎外〉を論じているので、ここでの類的本質を労働としているわけです。それ以外に人間の本質はないとか、それ以外を人間の本質と考えるのは間違いだとか言っているわけではありません。」

陽一が続けた。「第四の疎外が〈人間からの疎外〉です。人間同士が身内と見なすことができていたら、〈類的本質からの疎外〉も起こらなかつたでしょう。自分が作った物が人々の欲求を充足することに自己実現を感じ、生きがいを感じられる筈です。ところが両者は互いにできるだけ少ない労働で、他人のできるだけ多く

の労働の成果を支配しようとしていますから、相互支配であり、対立的な関係にあるのです。労働自体が類的な共同として実感できないのです。この相互支配、敵対的な人間関係が（人間からの疎外）です。」

明道はまとめるように言った。「結局、四つの疎外は、人間が私的所有の下で生産物とサービスを交換し合うところから生じているわけですね。だからマルクスは根底的に私的所有を無くしてしまわない限り自己疎外はなくならないと考え、共産主義以外に人間解放の道はないという確信にたどり着いていくわけでしょう。しかし私的所有と疎外は循環論法になっていて、どうして私的所有が生じたのかは明確ではなかった、それで唯物史観が必要になってくるわけですね。」

陽一は付け加えた。「マルクスの疎外論で忘れてはならないのが、自然観です。彼は環境的な自然を人間的な自然と捉えました。人間は自然環境の中にあり、そこで生かされているのですが、同時に主体的に自然に働きかけ作り変えて、人間の生活に適応できるようにしているわけです。その意味で自然は人間の自然であり、人間の非有機的体身なのです。これは『鉄腕アトムは人間か？』でカナダのロッキー首相に加勢してもらってゴルブツシュ国連大統領に必死で説明しました。」

「ハ、ハ、ハ、そうでしたね。でもあれは陽一君の夢の中の話だから、ロッキー首相の説明も本当はみんな陽一君が考えていたということですね。こんなレベルの高い高校生が日本には本当に

いるのかなと疑いましたよ」と正直に明道が言った。

智子が説明した。「環境的自然も社会的諸事物も含めた人間という新しい人間観をネオヒューマニズムと榊先生は呼ばれて、それを普及されているのです。それで私たちにも度々説明されるものですから、頭にこびりついていくわけです。（一同、爆笑）ヘーゲルやフォイエルバッハ、若きマルクス、パースなどにもその先駆が見られるということです。」

明道が続けた。「既に私も非有機的体の意味はだいたい分かりました。つまり有機的というのは器官的ということで、生身の身体と器官を構成しているとは有機的体身ですね、手足心臓とかのよう。それに対して非有機的ということとは生身の器官を構成しているわけではないということでしょう。だから自然は人間の非有機的体身だということは、生身の身体の器官としては人間の身体には含まれていないけれど、それと負けないぐらい、人間の生活活動の不可欠の構成要素になっているということですね。これはなかなか理解しにくかったのですが、貝の貝殻とか蜘蛛の糸、蓑虫の蓑などの生物の例で説明されているので納得できました。」

「おいおい、もう下校時間になってしまった。そうだ、次の日曜日三人とも我が家に招待するよ。そこで続きの議論をしよう。もっとも住吉区の五軒長屋のちっぽけな家だけど、孫君の歓迎会をしよう。どうかな、都合悪い？」と榊は三人に訊ねた。

陽一と智子は両手で大きく〇でサインした。明道もそれをまね

た。「陽一君と智子ちゃんを一度家に呼んで御馳走したいというのが内のワイフの夢だったんだ。だって『長編哲学ファンタジー』でお世話になっているだろう。ちよつと待って、携帯で今打ち合わせるから。」

問 若きマルクスの〈四つの疎外〉を要約しなさい。

4 三上教起ち上げ計画

人はみなそを信ぜずば生きられぬ光と命そして愛とを

7月3日、日曜日、午前11時に南住吉三丁目の榑周次の借家に集まった。築40年の古い二階建て五軒長屋で、そのうち二軒分を借りているらしい。もうすぐ建て替えてコンビニの入った大きなマンションが建つらしい。それで今年中には引越すことになるという。二軒分になったのは子供たちが成人して手狭になり、榑の蔵書の重みで危なくなってきたので、隣が空き家になったのをチャンスに隣も借りることにした。しかし今では、末娘が子連れで戻ってきたが兄と姉は、市内の福島区に結婚してマンション生活をしているという。

陽一も智子もはじめてである。『長編哲学ファンタジー 崩れゆく学園』では一度高校生探偵として二人は調査に来ているが、実はあれは、榑が煎茶のかおりにむせた刹那の白昼夢だったので、事実ではない。もつともこれも物語なのだから事実とは言えないかもしれない、でも物語の上ではあくまでもリアルなのだ。

着くと早速、お好み焼きで歓迎である。まず手を合わせて、「いただきます」と言った。その時、榑は手をパチパチと叩いた。

孫明道もそれをまねてパチパチと手をたたいた。陽一と智子がクスクス笑った。「先生、食事の時に手をたたくのが日本のマナーだと思われますよ。」と智子が注意した。

櫛はすまして言った。「いやこれが正式の食事の作法なんだよ。元々日本では命を与えてくれる食材が神様なんだ。だから神に感謝の礼拝でパチパチと手をたたくことになっている。」この話は『ヤマトタケルの大冒険』でも朝餉の儀式で紹介されているが、まだ7月3日には『ヤマトタケルの大冒険』は書き上がっていないかったので、二人は知らなかったのである。

「僕は知っていましたよ。先生のエッセイ集『宗教のときめき』に書いてありました。『いただきます』は、『命をいただきます』という意味で、その時食材は神として祀られ、神の命をいただくのは聖なる食事、聖餐に当たると言われていました。」と孫は少し自慢げに言った。

陽一は少しバツが悪そうに「こりやあ一本取られましたな、智子さん」と智子に言った。智子も頭をたたきながら、「こりやあ、参りました、参った、参った、降参です。」と言って笑った。

具にはキャベツ・卵・豚肉の他にイカや貝柱などが入っている。山芋を適当に混ぜているのでふんわりと柔らかくできている。櫛周次の妻千恵子の十八番（おはこの一つがお好み焼きということで、「奥さんのお好み焼きは絶品ですね。」と口をそろえた。孫明道も元氣よく口に入れておいしそうに食べていた。「僕は日本料理は御寿司よりお好み焼きの方が好きなんです。温かみがあつて愛情がたっぷりという感じですから」とご満悦だった。

「本当はね、牡蠣を入れると最高なの、でも夏牡蠣というのは岩牡蠣といって天然だから、手が出ないの。」と千恵子は、お好み焼きをひっくり返しながら語った。「中華料理はフランス料理と違ってグルメだけれど、日本料理の味も覚えてください。具の自然の味を生かしたのが多いですからね。まあお好み焼きは日本料理と言ってもB級ですが。」と千恵子は続けた。

「それにしても日本人は無宗教だとは言うけれど、三度三度食材になってくれた動植物を神として祀っていると最も宗教的な民族かもしれませんね。」と孫は感心して言った。

櫛は言った。「もともと大部分の人は、いただきますは食事を作ってくれた人に感謝して言う言葉だと思っっているのです。宗教性は忘れられています。でも説明しますと、あらためて命への信仰の大切さに気づきますから、『いただきます』の挨拶は大切ですね。」

陽一は孫に質問した。「孫君は宗教に対しては肯定的のですか、共産党は宗教はアヘンだとし、文革期にはかなり弾圧されたようですね、」孫は頷いた。そしてこう言った。「孫文以来、私の家系ではキリスト教会に属しています。もちろん文革期とか宗教弾圧の厳しい時期には教会にはいかなかったのですが、最近では中国のキリスト教徒の数は一億人を超えているのではないかと聞かれています。私自身はキリスト教の教義は信じられませんし、天地創造の超越的な神観念には賛成できません。それに中国の道教の神仙思想というのも全くの迷信だと思っていました。宗教がアヘ

ンだとかの決め付けはどうかと思いますが、迷信に惑わされてはならないと思いますね。だからどちらかと言いますと、否定派でした。」

智子が突っ込んできた。「否定派でしたと過去形で表現するところを見ると、肯定派に転向したのですか？」

明道は照れ笑いをしながら、「ええ、榊先生の『宗教のときめき』を読みまして、宗教にときめいたのです。そしてだれもが光と命と愛を信じないと生きられないという三L教徒である自分を発見したのです。」

千恵子が驚いて訊ねた。「何です、その三L教って、PL教みたいですね、新興宗教ですか？」明道は千恵子の言葉が意外だったようで、「奥さん、何を仰っているのですか、三L教は榊周次先生が提唱されている普遍的な宗教です。いわば奥さんは教祖の妻なのに、奥さんが知らないなんてどうなっているのですか？」

「え？あなた私に内緒で、宗教なんか始めたの？」とにらみつけた。榊はちよつと慌てて、「そりゃあちよつと誤解があるね。世界で一番信徒の多い宗教はキリスト教みたいに思われているけれど、ほんとうにイエスが復活したと信じている人はどれだけいるだろう、それに対して、光Light・命Life・愛Loveの三つのLはだれもが信じ、それに生きるしかないという意味で、世界で一番信徒の多い宗教は三L教だとエッセイに書いたんだ。何も教団を起ち上げたり、教祖に就任したわけではないし、教義を制定した

わけではないだ。」

陽一が補足した。「教団を起ち上げたり、教義や儀礼を制定すると、三L教は一つの新興教団になってしまうので、世界一の信徒数とは言えなくなると『つぶやき』に書かれていました。だから三Lの信徒は七〇億人いるけれど、同時に一人もいないともいえるのでしよう。」

孫は困った表情をし、「それじゃあここで五人で起ち上げましょう。奥さんも入ってくださいよ」と言い出した。千恵子は「んでもない、私は書道教師で手がいっぱいだし、教祖夫人なんて死んでもいやよ、あなた教祖になったら即離婚ですからね。」と宣告した。

智子は孫に質問した。「孫君は孫文の志を継いで、中国革命をやり遂げる使命があるのでしよう。宗教なんかに嵌っている場合ですか？」

「だからこそなんですよ、みんなが三L教に入って、光と命と愛の信仰を共にすることができたら、その上に立って、経済の仕組みを格差が少ないようにしようとか、人権を認め合うことだとかしやすくなるでしょう。それに政治や経済の利権で正面切って政権批判をするのは、難しいし、危険を伴いますが、三L教を布教する活動で三L教団の組織や活動を根付かせておけば、大きな改革を支える土壌ができるのではないかと考えているのです。」孫は大きな抱負を述べた。

千恵子は感心して、「孫君で、スケールが大きいのね、頭脳はまれにみる天才だというし、生まれつきそういう世界を変えるスーパースターかもしれないわ。榊のアイデアだって構わないから、孫君が教祖になってやりなさい。その教団には入らないけれど、大いに期待はするわよ。協力もするわ。」

榊はちよつと考えて口を開いた。「孫文も太平天国の洪秀全にあがれていた、洪秀全を気取って、偶像破壊事件を起こしたこともある。中国では昔から宗教団体を背景に勢力を形成して、政権を取ろうとする傾向がある。孫君は二十一世紀の洪秀全になるつもりか？どんな宗教だつてある程度大きくなったら、政権は警戒して、規制してくるだろうし、目立った才覚を発揮したりすると、危ないこともあるかもしれないね。」

智子は言った。「急に宗教活動をやってみると言われたって、新興宗教の場合は、立ち上げに参加したりすると、結局出家して、その教団の活動に全身全霊で打ち込まなければやれないでしょう。それに大学受験と二股なんて、孫君位の天才でないと無理だと思うわ。とりあえず大学に合格してからでも遅くないでしょう。」

「三年生は無理でしょうね、まあもちろん本格的には大学生になつてからです、研究サークルのようなものを一年生、二年生中心に作ってみようと思います。先生は三上教についてのエッセイや宗教論を書いてみてください。それを参考にして教義をつくっていきますから。」と孫は気を取り直して言った。

榊は自分の宗教論に乗ってきて、それで世界変革の志を遂げようする青年が現れたことに大いに感動を覚えた。しかし、宗教的な権威づけを背景にすると、その宗教の内容がいかに普遍的でもどうしても、カリスマ的な絶対権力に変質していくのではないかという危惧は拭えない。

「孫君、宗教はどうしても宗教であるという限界を持つから、宗教的な信念や心情でやっている、自分は純粋な気持ちでやっているのだから正しいと思ひ込み、政敵は私利私欲にはしっている、あくだい連中だと思ひつてしまうことになつて、独善的になるし、支持者も指導者を崇拜の対象にして、毛沢東の二の舞になりかねない、その危険性についてはしっかり自覚しておかないと駄目だよ。特に君のような天才肌だと独裁者に成りやすいかもしれない。」

智子も頷いた。「孫君のご先祖の孫文さんだつて、中華革命党や国民党の加入の際に、孫文の命令に絶対服従を誓わせたというじやない。それで黄興は中華革命党に入らなかったでしょう。自分の中に独裁者の血が流れていると思ひつて、よくよく自制しないと独裁的になつて、敵を作つたり、命を狙われたりするかもしれないわ。こんなこと高校生の孫君に言つても仕方ないか。」

「洪秀全、孫文、蔣介石、毛沢東などが独裁者足らんとしたためにどういふ問題が起こつたか、榊先生の本からも学ばせていただいていますし、よく分かっているつもりです。いまからそのことは肝に銘じておきますよ。しかしこれから孫明道の活躍がはじ

まるのですから、今から独裁者になる心配は買いかぶりすぎですよ。ところでそろそろマルクスの続きをお願いします。」と孫は殊勝に言った。

問 三上教とは何か？何故孫明道は三上教を立ち上げようとするのか説明しなさい。

5 若きマルクスの実践哲学

対象をわが事として捉えてよただよそ事のものともみなさじ

榊は思い出したように言った。「そうそうこの前は『経済学・哲

学手稿』の疎外論の話をして、続きは今日しようということだったね。若きマルクスは、疎外論をノートに書き込んでいたんだけど、発表されたのはロシア革命後の一九三二年のモスクワだ。

それが現代の巨大な国家や産業機構の中で、それを日々生み出している人々が、主体性を喪失し、無力なネジ・クギのような物として抑圧されている現代社会の批判にもってこいの理論だったので、二十世紀中ごろに一世風靡したわけだ。実存主義やフランクフルト学派、アメリカ社会学などで活用された。でもマルクス主義の後継者の人々は、〈疎外〉という用語は『ドイツ・イデオロギー』で唯物史観が確立されてからはあまり出てこないというので、それはマルクスが共産主義に達する以前の観念論の影響が残存していた未熟な理論と見なされていた。

マルクス主義者も積極的に疎外論を使って体制を批判し始めたのは、本格的には一九五〇年代からだ。それでもソ連を中心に正統派を名乗っていた人たちは、それを資本主義批判に限定して使うべきだとして、社会主義体制の官僚主義を疎外論で批判してはいけないうとしていたんだ。ソ連ではオイゼルマン、中国では周揚がそういう傾向だったと記憶している。」

陽一が発言した。「疎外を私有財産によるとしたけれど、私有財産の発生は唯物史観で説明するしかない、唯物史観で階級闘争の歴史を展開すると、疎外論の出番がなくなってしまうわけですね。唯物史観を確立したのが『ドイツ・イデオロギー』でこれは親友フリードリッヒ・エンゲルスとの共著ですね。その準備とな

った『フオイエルバッハに関するテーゼ』から疎外論を脱却したという解釈が有力だったのですね。」

智子が続けた。「この『フオイエルバッハに関するテーゼ』がマルクスの実践哲学のエッセンスみたいなもので、最もマルクス理解の鍵になっているということです。日本の近代哲学の代表者と言われる西田幾多郎もこのテーゼが大好きだったでしょう。」

陽一が言った、「ippon」で見てみましょう。第一テーゼです。

これまでであったあらゆる唯物論、それにはフオイエルバッハのものも含まれます。その主要な欠点は、対象（＝事物）や現実や感性が客体あるいは直観という形式のもとでしか捉えられていなかったことです。つまり感性的な人間の活動、すなわち実践として、主体的には捉えられていないということです。それで、活動的側面は、唯物論とは対立している観念論によって、抽象的に展開されてきたにすぎません。観念論ではもちろん現実の感性的な活動そのものを知ることができませんから。

マルクスは、対象（＝事物）や現実を自己自身の実践として主体的に捉えるべきだと言っているわけですね。つまり対象である事物や世界で起こっている出来事を、できるだけ冷静に客観視して捉えるのが科学的みたいに思われていたわけです。世界を物質の運動として捉えようとした既成の唯物論は、まさしく対象や現実を他者として観照的に捉えたり、見たままに直観的に捉えていただけだった。それではいけない、実は対象としての事物や世界の現

実は、自己自身の実践的な活動なんだということです。」

榊が具体例で補足した。「大学の教職哲学の講義ではこう説明したら納得してもらえます。教師は生徒の状態を見て、生徒が理解できなかったり、居眠りしたり、おしやべりしたりで授業が成り立たないと、つい生徒の性格だとか親の躾とかのせいにして、対象としての事物や現実を、他人事として分析し、自分自身の問題として捉えることができません。しかしそういう生徒が興味を持ち、食いついてくるような授業ができていない自分の実践の問題なのです。生徒がおしやべりしたり、遊んだりするのは自分自身の姿だというように捉え返さなければならぬということなのです。」

智子は頷を傾げた。「これはすごいことを言っているとは思いますが、やはりどこか納得できない感じがありますね。つまり対象としての事物や客観的な現実に対して、他者として関係することによって主体としての自己が成り立つわけでしょう。なのに対象を客体としてでなく、主体の実践、自己自身として捉えなさいという、一体どっちなんだという気がしますよね。」

孫明道も頷いた。「その疑問はもつともですね。ただしこれはフオイエルバッハ批判のための覚書ですから、もちろん対象としての事物を客観視して冷静に捉えることは必要なのです。唯それで終わってしまったのではダメではないか、榊先生の具体例でよく分かるのですが、対象として事物や客観的現実抜きに主体として自己が存在しているのではなく、それらとの有機的な連関の中で、

自分のなすべきことが決まってくるのだから、対象や現実をむしろ自己自身の姿として捉え返す必要があるはずだ、このことをマルクスは言いたかったわけです。」

榊はにつこりした。議論がツボにはまってくると榊はいつもうれしくなつてにつこりしてしまう。「三輪さんの疑問は重要です。だって主体は対象として事物や現実と自己を対置した時に自覚されるわけですから、それらとは別物のはずなのです。だから別物にしているはだめだというマルクスの議論には、簡単に納得してはいけないわけです。」

しかし孫君の解釈されるように、事物や現実を自己自身に包摂して捉え返さないと、現実的主体的に立ち向かうことはできないわけですね。先ほどの具体例でいうと、生徒に対峙しているところに主体としての自己を見出すけれど、それで終わってはだめですね。生徒の状態や中身を含めて自分の実践の姿として捉え、クラス全体に拡大された自己に成長しなければなりません。事物や現実に対置される自己から事物や現実を包摂する自己への自己の発展を説いていると読めば、マルクスの言いたかった思いが伝わってくるのじゃないかな。」

孫は付け加えた。「一言言わせてください。王陽明が〈万物一体の仁〉を強調しまして、『**人は天地の心であり、天地万物はもと吾と一体なるものである。生民の困苦荼毒（とくどく）、一つとして吾が身に切実な疾痛でないものがあるうか。吾が身の疾痛を知らざる者は『是非の心なき者』**』というべきである。』と言っています、まさ

にこのことですね。」

陽一が続けた。「教育と関連しているのが第三テーゼです。」

環境と教育との変化にかんする唯物論的学説がありますが、その教説は、次のことを見忘れているのです。それは、環境こそ人間によってこそ変えられること、そして教育者自身が教育されなければならないことです。

ここである唯物論的学説というのは、〈人間は環境と教育が作り出したもので、環境を変え教育を改めれば、人間を作りかえることができるという唯物論的な教説〉らしいですね。環境を整え、教育を与えれば、人間を改造できるという啓蒙的な上から目線の教育観では駄目で、人間が環境と格闘し、自己自身を作り変える実践的な存在なのであるということですね。そして教育者は教育を通して、教えられる者や環境から学んで教育され、成長していかなければならないのです。」

榊はこう言った。「孫君の先祖の孫文を批判させてもらうけれど、彼はこの観点が抜けていたと言えるかもしれません。『孫文学説』では、〈**先知先覚者は創造する人であり、後知後覚者は宣伝する人であり、不知不覚者は実行する人である。**〉としています。これでは『我孫文は先知先覚者である、後知後覚者である黨員・不知不覚者である人民は私の教えに従え』と一方的なのです。たしかに先覚者としての自覚と気概そして責任感は大切で、この言葉も間違ったことを言っているわけではありませんが、謙虚に人民から

学ぼうとする姿勢が見られません。」

孫明道は少しいつむき加減になって、「そうかもしれませんね。率直にご指摘いただいて有り難いです。独裁者のな気負いが伝わってきますね。」

智子が第六テーゼを読み上げた。

フオイエルバッハは宗教的本質を人間の本質に解消します。しかし、人間の本質は個々の個人に内住する抽象物ではないのです。現実には、それは社会的な諸関係の総和(アンサンブル)なのです。

「これが人間の本質についてのアンサンブル規定ですね。〈解消する〉という意味が分かりにくいです。それから本質が個人に〈内住する〉とはどういう意味ですか? 〈現実には〉が入っているのはなぜか? これは一つの本質規定で、人間には他の本質もあるのか、それとも他の本質は否定されているのか? そもそも本質とは何か? など疑問が沢山出てきますね、それだけに一番議論も多いようです」と榊が問題点を指摘した。

陽一が発言した。「解消というのは還元みたいな意味でしょう。人間から超越した絶対者としての神は、人間の自己疎外なんだとして人間に取り戻しているわけですから。」

孫が続けた。「人間は考える葦である」とパスカルが言い、〈われ思うゆえにわれあり〉とデカルトが言ってますね。思考能力が

それぞれの個人に備わっていて、それで人間なんだと捉えられがちです。労働能力や社会性にしても徳みたい個人に内在しているように捉えられかねません。マルクスは、そうじゃない、考えることも働くことも、関係し合うことも、コミュニケーションを交わして、互いに働きかけ合う活動であり、関係として捉えるべきだというのでしょうか。」

智子が何か納得できないという表情をして言った。「確かに能力は関係によって備わるけれど、その能力を主体が備えていることは否定できないでしょう。例えば10キロメートル走れる体力を持つているとか、フルマラソンできる体力を身体が備えているわけだから。言語にしても言語中枢が形成されていて、言語活動を蓄積することで、主体の言語能力が高まるのでしょうか。」

榊は頷いた。「物という実体が属性として能力を備えているように了解していると便利ですね。でもそれは関係においてしか発揮できないので、関係抜きでそれ自体で存在するとは言えません。実体・属性的に表現しても、関係性を踏まえているのなら間違った表現とは言えませんが、その点確認できないと、物に内住しているように捉えていると批判されるのです。ただ解釈論争としては、マルクスは人間という実体に本質が備わっているという捉え方自体を間違いだとして批判しているという解釈も成り立ちます。」

陽一が訊ねた。「それじゃあ、労働や言語や思考が人間の本質だという今までの捉え方は、実体・属性的な捉え方だから間違いで、

人間の本質は関係性の総和として捉えるべきだという解釈も成り立つわけですね。」

孫が頸を傾げながら言った。「えらく難しいですね。例えばここにホッチキスがありますが、その本質は針を出して紙を束ねるという性能です。それはホッチキスという物の属性ではなくて、針を出して紙を束ねているという関係行為だということですか。」

「そういうことです。物の本質を関係行為をする働きとして捉えないで、事物に内在した能力と見なしたら倒錯だという議論ですね。だから事物に内在しているというのは関係行為ができる可能性として事物の属性と見なしうるのではないかという議論と水掛け論になってしまいますね。」

智子は少し分かってきたという表情で語った。「本質というのは、あるものを他のものと区別する特色ですね。その意味では、労働、言語、思考、社会性でいいわけです。ですから、現実的にはそれだけでなく、社会的諸関係の総和として捉えるべきだということですね。ところが本質は関係性でしかなく、人間を実体として捉えてはならないという観点から見れば、あらかじめ労働や言語や思考といった性能が実体としての人間にあるというような捉え方は間違いだという解釈になるのですね。」

陽一は念を押した。「とはいえ、労働や言語や思考も関係行為ですから、関係性の立場に立つてもそれらが本質だというのは否定できません。そもそもマルクスが実体・属性的に捉えることを全

否定したかどうかも断定できないわけでしょう。だから論争になっているわけですね。」

「その通りです。だから関係性をしっかり踏まえていれば、事物の属性として本質を議論してもいいと思いますね。もちろん労働や言語や思考といった本質規定をどれか選んで、それをどれだけ有しているかで、人間として本質を実現していると判定していくのは、高踏的で観念的な評価ですね。それぞれの個人の社会関係の総和としてその人の人間性を理解するべきだということです。」と榊は説明した。

「ともかくマルクスは関係性抜きで個人として抽象的人間を捉え、その本質を観念的に議論しても仕方がない、社会的実践として人間を捉え、その中で人間性の解放を目指すべきだと言いたいわけですね。それはその続きを一気に引用すれば分かります。」

8 すべての社会的な生活は本質的に実践的なものなのです。理論を神秘主義に誘い込むあらゆる神秘は、人間的な実践のなかで、そしてこの実践をなんたるかをつかむことによって、合理的に解消すると分かるのです。

9 そのために観照的な唯物論、すなわち感性を実践的な活動としてつかんでいない唯物論が到達しうるのは、せいぜい個々の個人と市民社会の直観でしかありません。

10 古い唯物論の立脚点は市民社会であり、新しい唯物論の立脚

点は人間的社會あるいは社会的人類なのです。

11 哲學者たちは世界を単にさまざまに解釈しただけです。肝心のなのは世界を變革することなのです。

つまりマルクスはあくまで市民社會に固定された人間を捉えていたのではなくて、そこから解放された人間的社會を求めていたわけです。それを実現するための実践の観点から、現実の社会的諸關係の總和として現実の人間を捉えようとしたと言えますね。」

智子は頷いた、「今の説明でなんとなく解ったような気がします。テーゼ全体を捉えれば、実践的な立場で人間を理解しようということが言いたいので、決して言語や労働や社會性が本質でないなんて言いたいことではないという感触ですね。そして実体・属性的な捉え方云々をこのテーゼだけから問題にしても決着はつかないでしょう。」

孫も納得したように目を輝かした。「既成の哲學者というのは解釈ばかりしていたけれど、肝心なのは變革することだというのはどうでしょう。中国の場合、伝統思想家には実践的な人が多いですよね。西洋の哲學は解釋學に陥りがちだったということですか。」

陽一が口を挟んだ。「既成の哲學者ではなく、哲學者一般を意味していて、哲學というのは解釋學でしかない、だから哲學自体を止揚すべきだという意味に解釋する人もいるのでしょうか。」

榊は困ったような表情に成り、「そうなんです、いやあ哲學者としては実に嘆かわしいことですが、そういう解釋も有力です。ただマルクスは哲學で學位を取っているのですが、哲學の定義をして、それを克服するというような議論はしていません。哲學者のように観念的に人間のあるべき理念を定めて、それで現実の人間を裁断するようなのは駄目だと言っているわけですね。」

智子はニコツとちよつと意地悪気に笑った。「それじゃあ榊先生は、マルクスがその時哲學をどう定義していたか明確じゃないので、既成の解釋學的な哲學を批判して、実践的な哲學を説いたと解釋しておこうということですね。」

「ええ、そうです。私は哲學というのは、物事を根源的に捉え返し、一貫した原理で誰もが納得できるように展開しようとする態度ではないかと思えます。要するに學あるいは學問ということですね。ヘーゲルはあまり哲學とは言わず、學と言います。」

問 対象を主體的に實踐として捉えるとはどういう意味が分かりますか。やすく説明しなさい。

6、唯物史観と科学的社会主義

利益のみ追い求めたる世にありて共に物産む試み瘥かは

孫が議論を先に進めようとする。「マルクス主義の哲学と言えば、教科書的には弁証法的唯物論やその歴史への適用で史的唯物論というように学んだのですが、まあマルクスは哲学を脱却したという議論は棚上げにすれば、やはり『ドイツ・イデオロギー』で唯物史観に達し、マルクス主義が確立したと捉えてよいのでしょうか。」

智子は質問した。「史的唯物論と唯物史観は同じ意味ですか？」

榊が答えた。「意味は同じですが、唯物史観の定式と言えば、経済的な土台が政治や社会制度や文化やイデオロギーなどの上部構造を決定するという捉え方を意味します。史的唯物論の公式と言

えば、歴史が〈原始共同体↓古代奴隷制↓中世封建制↓近代資本制↓共産主義〉へと発展していく図式を指しています。」

陽一は溜息をついてから語った。「物質的な運動があって、その法則性を精神が認識するように、経済的な関係が土台にあって、その発展に従って社会制度や政治制度、文化やイデオロギーが決まってくるのだから何が有効な制度で、どういう考えがその時代に相応しいかは経済的土台を分析して、その矛盾を明らかにし、発展方向を見定めればいいということですね。これは科学だから、科学的にやっていれば必ず共産主義が実現するという科学的社会主義の確信につながったのでしょうか。ところが社会主義世界体制が崩壊してしまつて、何か大きな間違いだったということですね。何が間違っていたのですか？」

榊は「そうそう」とつぶやいてから発言した。「それで経済的な土台が上部構造を決定するという、経済決定論が間違いだという人がいる。そんな一方的なものではなくて、相互関係だし、具体的な事例に即して考察すべきだというんだ。それは全くその通りなんだが、それはマルクスの言っている趣旨を誤解しているのだ。」

経済的な土台の上に政治だとか文化が成り立つという事をしっかり踏まえていないと、思想や文化やイデオロギーは、その場の思いつきで勝手なものを打ち出して、悦に入ってしまうけれど、それが土台をしつかり踏まえていないと根無し草に終わってしまうという趣旨だったんだ。ドイツの若手の思想家たちをたしなめる議論だからね、『ドイツ・イデオロギー』は。その意味で土台決

定論は何も間違っていない。」

孫が続けた。「マルクスは、〈意識が社会的存在を決定するのではなく、社会的存在がその意識を決定する〉と確か『経済学批判序論』で言ってますね。これはあくまでも経済学的な認識の問題です。労働者は労働者のな意識を持ち、資本家は資本家的な意識を持つと仮定できます。実際には人によりさまざまですが、もしこれが全体として法的に成り立たなかったら、経済学は学問としては成立しないわけです。それを経済決定論は間違いだと言って批判するのは、見当はずれです。もちろん革命の場合のように意識が存在を決定することもあるし、経済決定論でいくと失敗する場合もたくさんあるのは承知の上なのです。」

うなずきながら榊は言った。「マルクス主義者が科学的社会主義を名乗ったのは、空想的社会主義を批判しているからです。つまり資本主義社会の矛盾を克服し、社会主義を実現するために協同組合をつくったり、共産村を建設しようという動きがあったのですが、なかなか成功は難しいわけです。なぜなら共産主義的な企業ですと、厳しく賃金コストを抑えるのは難しいので、資本主義企業との競争して生き残るのは困難です。」

それで失敗したら、革命を起こす前に既に社会主義の失敗は経験済みなので、なかなか社会主義の道に踏み出せなくなってしまう。そこでマルクスは、資本主義は、搾取がどんどん厳しくなつて、労働者階級は革命に起ち上がらざるを得なくなつて、必然的に科学的に革命が起こるとしたので。ですから資本主義社

会では社会主義の実験はやる必要なしということなのです。」

智子が言った。「資本主義で社会主義的な実験をしておく必要は大いにあったのですね。革命が起こってから、社会主義企業を成功させようと思っても経験がないので、なかなか意見がまとまらず、勢い革命政党が独裁的な政治体制を敷いて、上から社会主義を押し付けるので、せっかく労働者や農民は資本の支配から解放されたと思ったら、今度は社会主義を名乗る国家や共産党の奴隷的な境遇に置かれることになります。それなら革命をしない方がましだということになりますね。」

問 唯物史観についてわかりやすく説明しなさい。

7 労働価値説と剰余価値理論

ただそれは人の性から言えること、得たわけでもなし数字の裏付け

陽一が発言した。「マルクスの立場が科学的社会主義なのは、資本主義の矛盾を分析して、資本主義は内在的な矛盾が發展して、大恐慌や戦争を惹き起こし、必然的に社会主義にならざるを得ないことを資本主義の科学的な分析によって明らかにしたからですね。その代表的な著作が『資本論』です。そこにはアダム・スミスやリカードの労働価値説を踏まえ、それを批判的に継承しまして剰余価値説を打ち出しています。」

榊は『資本論』の文庫本を手にかざしながら語った。『資本論』は経済学の本だから、当時のイギリスの国民経済の資料などを駆使して、労働価値説や剰余価値説が妥当していることは実証していると思うだろう。私は大学生になってからだけれど、『資本論』を土佐中村の石見寺という親戚のお寺で夏休みの間、一月以上かけて読んだんだ。それでも第二巻の途中までしかいかなかったけれど、一番驚いたのが、そういう経済統計は一切載っていないということだった。要するに商品↓貨幣↓資本と發展していく資本の論理を展開した論理学だったんだ。でもそれはアダム・スミスの『諸国民の富』だとかJ・S・ミルの『経済学原理』でも同じ

ことだそうだ。」

「それじゃあ論理必然的に恐慌が起こって革命になるということとで、実際の統計がそれを実証していたわけではないのですね。」と智子はやや残念げに言った。

「それでは労働価値説が正しいのは、労働時間に比例した交換でない、人の何倍も働かされる労働力が、他に流れることで、労働時間に比例した価値通りの交換に近づくといういわば自明の真理として正しいということなのですね」と孫は確かめた。

榊は頷き、「だから労働価値説が間違いだとか、破綻したとかいうのはかえって、『資本論』を読んでいないからなのです。なにも『資本論』では労働時間に比例した価値通りの交換が行われているといっているわけではありません。他の条件が同じと仮定して議論しているので、労働価値説はいわば自明なのです。だから労働時間に比例していない交換の事例を出してきても、労働価値説を否定することはできないのです。」

陽一が質問した。「では同じ労働時間で人の二倍同じ製品を作る人がいたとします。労働時間で価値が決まるならばその人が作った商品には半分の価値しかふくまれていませんが、実際の交換では価値は等しいとされますね。」

「その疑問を言う人が多いですね。全く同じ種類で同品質なら価値は同じです。それは社会的に必要な労働時間で価値が生み出

されると考えるからです。個人差は解消した平均的な労働時間で作られたとして扱われるということです。平均的な労働時間を単純労働の労働時間と呼び、二倍、三倍作る人の労働は複雑労働とよびます」と榊は説明した。

「としたら労働時間というのは、実際の働いている時間というよりも物に体化した時間だということになりますね。時間を等速で動く時計の針で測るのではなく、交換を媒介にして判定していることになりますから」と智子は言った。

「ええ、だからマルクスは抽象的な人間労働自体の塊だということで、抽象的人間労働のガレレ（膠質物）として価値を定義しています。商品の有用性・使用価値とは関係なく、社会的に必要な労働時間で価値が決まるということです」と榊は答えた。

「剰余価値の搾取を鵜飼で例えて説明されたのが分かりやすかったです」と智子が言った。「腹が空いた状態にした鵜の頸にひもをつけて鵜に魚を獲らせると、鵜は頑張つてたくさん魚を獲りますが、ひもでしばつてあるので、鵜匠に吐き出されてしまいます。それで鵜はまた魚を獲ろうとする。たくさん獲つたところで、必要なのは5匹で15匹は鵜匠にとられてしまうということですがホントの搾取ですね。

賃金労働者もこれと同じで、生活に必要な最低限度の賃金しかもらえません。その分の労働時間を必要労働時間と呼び、それが過

ぎてもこんどは資本家のために剰余労働時間も働かなければならないわけです。その分の価値が剰余価値で資本家の収入としての利潤の源泉なのだということです。だから剰余労働時間分はタダ働きさせられるということです。」

「それは誤解があります」と陽一が言った。「一日8時間はたらいたら8千円という契約で働きますと、8時間の労働に対して8千円が支払われるので、ただ働きしている労働時間はないわけです。ただし、8千円分の価値しか彼が生み出さなかったのではなくて、その二倍の1万6千円分の価値を生み出しているので、8千円分の剰余価値が資本家の利潤になるのです。

タダ働きで問題になっているのは、残業して働いても、残業分が支払われない場合ですね。残業分の労働時間はタダ働きということになります。これをサービス残業というのです。」

「陽一君の理解で正解です。1万6千円分の価値を生み出す労働に、8千円分の対価しか支払わなくても契約に基づいているので合法的ですが、サービス残業に対して支払わないのは泥棒みたいなものですから、非合法です。労働基準監督署に訴えるべきです」と榊は説明した。

「ただ我が家も中小企業で、経営が大変なのですが、労働者に生み出した価値だけの賃金を支払いますと、利潤が出ないので、原材料や燃料、それに設備などが更新できません。やはり資本家の取り分というのを搾取と言つて悪いイメージで言われるのは抵

抗感がありますね」と陽一は資本家の立場を弁明した。

「陽一君、利潤がでないと原材料・燃料・設備などが更新できないというのは、誤解です。マルクスの考えでは価値を生むのは労働者の労働だけで、それ以外の物は価値を生まないのです、不変資本と呼びます。基本的にそれらは等価交換されるのです。生産に使われた不変資本の価値は、製品に減価償却された分だけ、含まれないと損失になりますので、不変資本の価値は、製品に移転したとみなされます。ですから製品が予定通り売れば、利潤が出なくても、不変資本は更新できます。唯利潤がでないと設備を拡大できないことです。単純再生産はできるけれど拡大再生産はできないわけです。」

資本家の取り分が必要というのは資本主義経営を続ける限りは必要だということですね。マルクスは、労働者が共同で経営すればいいという立場ですから、資本家の必要は認めていません。ただし企業を運営するのに、それを取り仕切るようなスタッフとして経営者は必要ですね。経営者は資本家でなくてもできるじゃないかというのがマルクスの立場です。実際株式会社では取締役会を選出して経営を任せますが、経営者は経営労働をする労働者でもないわけですね。」と孫は解説した。

「資本主義企業の経営者は、所有者である株主に雇われているので、株主に配当や株式の値上がり益をもたらすように経営しないと辞めさせられます。社会主義企業だと労働者に利益を還元すればいいということですね。」と智子は続けたが、疑問を提出した。

「しかし自由市場に商品を提供する市場経済の許では、社会主義企業も規模の利益などを求めて拡大再生産をしたり、研究投資をして最新鋭の設備を備えないと、競争に負けて倒産してしまいます。ということは、企業は労働者の賃金をできるだけ節約して、剰余価値を搾取しなければならないことになり、社会主義でも資本主義と変わらないことになりませんか？」

「だから私的所有を完全になくして市場経済をやめない限りだめだということで、マルクスは社会主義という中途半端ではだめで共産主義を目指したわけです。とはいえ一足飛びにはいきません。社会主義では働かないで利潤を手に入れる不労所得で生活する資本家や地主がいなくなるだけ、労働者にはよりましなわけです。とはいえ智子さんが言われたように、企業が独立して経営していく限り、企業は労働者を労働力商品として雇い、最低限度の生活費を賃金として支払う傾向になっていく、その意味では資本主義と同じ原理だということですね。それはマルクス主義の経済学者たちはなかなか認めませんでした。私は若い頃からそういう見解で、論じていましたが孤立無援でしたね」と榊は懐かしそうに言った。

「榊先生、中国は国営企業が株式を発行したりして、資本主義化が進んでいます。これは毛沢東が警告した資本主義化そのものですね。鄧小平は現代化して世界に追い付くためには『白猫であれ黒猫であれ、鼠を捕るのが良い猫である』と言って、資本主義化をおしすすめたわけですね。では将来、生産力が発達したら共

産主義になるのでしょうか？」と孫が疑問を提出した。

「生産力の発展が生産関係と矛盾するようになれば、やがて生産関係が変わるだろうという機械的な発想ですね。唯物史観ではそのことによって階級対立化が激しくなると、労働者階級が資本家階級を打倒する革命が起こって共産主義になるという見解でした。毛沢東はそれを機械的に階級闘争継続論として適用して、うまくいかなかったら、共産党にまぎれこんだ資本家や地主を倒そうといって、社会主義なのに旧時代同様の階級闘争をしようとしたわけで、それが文革のアナクロニズム（時代錯誤）です。」

資本主義を復活させた以上は、それを共産主義にしようというのでしたら、労働者階級の人権を確立して、労働運動や市民運動の自由を確立し、企業や国家の運営の在り方を民主化していくことが先ず必要でしょう。その上で、格差是正や市場の失敗にたいする対策を拡大し、市場原理を減少させていくしかないでしょうね。なかなか市場を急になくすというのは大混乱になるので、簡単にはできませんよ。それに近づけることが人々の幸福増進になるのなら共産主義に近づくことはあるかもしれません。」

陽一は頸を傾げて質問した。「これだけ資本主義化を進めているのに共産党の看板を掲げ続けるのは我々から見ると不思議なのですが、共産主義に対するこだわりはどこからきているのですか？」

孫明道も腕を組んで、考え込んだ。「それは日本で言えば、憲法第九条みたいなものかもしれませんね。共同体という理想をもつ

ているのです。自分のものだととして財産を奪い合う、自分の家族の利益を優先する、そういうのはあさましい、分け隔てなく愛し合う理想郷をつくりたい、それは実は『礼記』にある〈大同思想〉なのです。

儒家は御存知のように血縁の近いものほど愛すべきだという倫理ですが、それは実は大同社会が実現する以前の現実の社会での倫理でして、理想社会の倫理ではないのです。太平天国の洪秀全も大同社会を実現しようとして『天朝田畝制度』を布告し、土地を天領にしようとしてしましたが、失敗しました。康有為は変法自彊（んぼうじきやう）を唱え、資本主義を導入しようとしてましたが、それは当時の欧米列強の植民地化を防ぐためのやむを得ない措置でして、太平世である大同社会の前段階と考えていたのです。」

智子は頷いた。「文革で大混乱してしまった中国を立て直すには当面は鄧小平の改革開放路線でいくしかないけれど、共産主義の理念は捨てる必要はないということですね。でもそんなこと本気で中国の人たちは考えているのでしょうか。」

「それは何とも言えませんね。」孫も黙ってしまった。時間を置いて自信なさげに語った。

「確かに不可思議というか、なかなか割り切れない問題です。共産党が看板を民主党とか自由党に書き換えてしまうと、どうしても代議制民主主義を導入せざるを得なくなり、既成の一大独裁における利権が崩壊するので現体制に固執しているとも受け取れ

ますが、いずれにしてもここ十年内にははつきりするのではない
でしょうか？」榊も首を傾げながら言った。

問 剰余価値説について要約的に説明しなさい。

8 物化・物象化・物神崇拜

文明の発達したる極致にて未開の物神世を覆えるや

マルクスばかりで終わってしまつては、テキストとしては失敗作だ、ここで切り上げなければならないが、物化・物象化・物神崇拜に触れておかなければならない。

孫が話題を変えた。「確か榊先生のご専門は元々は経済哲学で『資本論』のフェティシズム（物神崇拜）論に対する批判でしたね。物化・物象化・物神崇拜という用語の整理がなかなかないので、噛み砕いて説明願います。」

榊がちよつとためらいながら言った。

「私の専門だけに手短に説明しにくいですね。老莊思想に『物化（ぶっげ）』という発想があります。胡蝶の夢で莊周になったのか、莊周の夢で胡蝶なのか大小や姿かたちの違いにこだわらず万物斉同だという思想です。これとマルクスのいう物化（ぶっか）は正反対ですね。それにマルクスは物化を非人間化としてヒューマニズムの立場から批判しているのです。」

人間は人格をもつ精神的存在で、単なる機械的な事物ではありません。ところが商品経済のもとでは人間は自分を商品に対象化して、商品として関係しなければなりません。何も商品を持っていなければ、労働力の使用権を商品として売ることになります。つまり労働者は労働力商品に自分を物化して関係するということ

です。

生産現場では労働者は自由な生産主体ではなく、マニュアル通りねじくぎのように非主体的に作業させられるので、機械の部品として物化されるのです。マルクスは人間を物化する資本主義を非人間的な体制として告発しているわけで、人間的な社会を実現しようとした『フオイエルバッハ・テーゼ』のヒューマニズムを引き継いでいます。

物化は物 Ding と化することですが、物象化は、物象あるいは物件 Sache と化することです。同じような意味でも使われますが、人と人の関係が物と物の関係に置き換えられ、そのために人から自立的に展開して人の手に負えなくなり、人を支配するようになることを物象化といいます。商品経済や貨幣経済は、人と人の関係なのですが、商品間関係に置き換えられたり、貨幣の論理に支配されてしまつて、人間は商品経済や貨幣経済のために身も心も捧げ尽くすことになりかねません。まさしく自己疎外ですね。」

「この、物化・物象化への批判は、労働価値説にもとづく剰余価値説や唯物史観が評判を落としたのに対して、冷戦終焉後も鋭く体制を批判していて高く評価されているようですね。」と孫は指摘した。

「そうなんです。これは初期の自己疎外論の発展として評価できると思えますね。ただ疎外論は払拭されたという立場の人は、それは認めませんが」と榊は答えた。

陽一が訊ねた。「物象化は、物件や物象などが価値や意味を表したりして人間を支配する場合に言われることでしょう。それは物が人間として機能しているわけで、そこには物を人間と倒錯する心理がはたらいているとみて、マルクスはそれをフetišズム（物神崇拜）だと言ったわけですね。」

榊は頷いた。「ええ、そういうことですね。だからマルクスの『資本論』の場合は、人間と物を峻別します。だから物が人間として振る舞うことは倒錯だということになります。それで事物が社会関係を担つて、価値関係など人間関係を表し、人間がそれに跪いて拝むようなことになるとフetišズムだということですね、商品という事物が価値を持つと見なされたり、貨幣を価値として認めたりすると、商品物神、貨幣物神を崇拜していることになります。」

「榊先生は、社会的な事物も人間に含めようという立場ですから、商品や貨幣は物神ではないという捉え方をされているのですか？」と智子は質問した。

「それはいい質問ですね。マルクスが言うような意味ではフetišシュではありません。しかし商品にはいろいろ魔力があつて、人間をひきつけ惑わします。貨幣などは人生を狂わしてしまいますね。そういう意味では大いに物神として機能していると思います。」

孫は訊ねた。「商品が価値を持つというのは当然ではないのですか、だって商品は使用価値と交換価値をもっています。この交換価値は抽象的人間労働の塊で、生産物に含まれているわけでしょう。だったら価値をもつはずですよ。」

榊は少し笑った。「私も若い頃には、『資本論』第一章の「商品」のところでああでもないこうでもない長いこと苦しんだものですよ。孫君と同じように解釈してね、でもそれなら倒錯ではないので、商品は物神ということになります。」

彼は商品の使用価値つまりパソコンなり上着なりがそのまま価値をもつとは考えないのです。それでパソコンや上着という具体性を捨象した物そのものが価値を持つと捉えてもいいと思いますね。ところが違うのです。それなら物が価値だということになってしまいます。マルクスに言わせれば、価値は労働の塊だから人間存在です。ということは抽象的な物が人間だということになってしまふ。物は人間か？物は人間ではありえない、だからマルクスによると、抽象的人間労働の塊は物としての商品には属さないのです。けれど属しているように倒錯される、それはなぜか？

だから抽象的人間労働の塊はガレレテつまり膠が融けて生産物付着している状態が価値だとマルクスは考えたのです。抽象的人間労働だから具体性を欠いて透明です。だから目に見える使用価値を見て人間は商品価値をみているつもりになるわけです。だから倒錯だということですね。まあそういう論理になっているということです。」

この問題は榊の解釈は正しいのだが、まだまだ定説にはなっていないので、テキストとして引つ張るのは遠慮しよう。

智子がまとめようとして語った。「マルクスは、文明が最高度に発達した資本制社会が、実は未開のフェティシズムという宗教が蔓延し支配している社会であることを喝破したわけですね。それで非常に批評としてするどいし、痛快だということで、フェティシズム論は未だに人気があるそうです。ただ榊先生に言わせると、社会的な諸事物も含めて人間として捉える視点が欠けているところが不十分だと致命的な欠陥を指摘されておられるわけですね。それでさぞかし、榊先生の『マルクス物神性論批判』はベストセラーになると思ったら、全く学会からも世間からもシカトされて、哀れ大量に細断されたということですね。」

「いやはや全く情けない話ですよ。」と榊はぼやいた。

陽一は確かめるように訊ねた。「それにしても若きマルクスは非有機的体という用語を使って、社会的な諸事物や環境的自然を人間の広い意味の身体つまり人間的な自然と捉えていました。『資本論』のマルクスは社会的諸事物と人間との区別をむしろ絶対的に強調し、人間に含めることをフェティシズム的倒錯だと決めつけました。どうしてそういうことになってしまったのですか？」

「それが最大のマルクス問題ですね。若きマルクスはネオヒューマンイズムの先駆と言えますが、後期のマルクスと事物と人間の

区別に固執し、物になること、物から支配されることを物化・物象化・物神崇拜として拒絶する現代ヒューマニズムの先駆になっています。

その原因は、資本家階級による労働者階級の剰余価値の搾取の問題にすべてを収斂（しゅうれん）したからではないでしょうか。つまり経済関係は人間の社会関係であり、事物の関係ではない、それが事物の関係として現れるのは、倒錯的な置き換えによるのだとしたのです。そして結局、階級関係だから、革命によって決着がつくという捉え方ですね。

もちろん生産力や使用価値などを論じたり、人間同士を媒介する事物の役割なども論じているのですが、究極のところ、価値関係を労働価値説に基づいて、剰余価値の搾取の問題として説明しようとしたのです。それはあくまで人間同士の関係だということ、事物の属性として価値を捉えてはならないことになってしまった。

しかし労働が事物の社会的属性にならなければ価値ではないのだから、価値は人間と事物の商品関係における区別の止揚なのだということですね。つまり人間を身体だけに限定し、事物は人間でないという立場からは、確かに人間ではないけれど、事物として人間関係を取り結んでいる以上、事物を含めて人間となつていることを価値関係は示しているということです。

社会的諸事物を人間の有機的体でないから人間ではないとい

う立場に固執していたら、経済という社会関係は説明できません。社会的諸事物も人間の非有機的体だという初期マルクスの自然哲学を發展させるべきだったのです。」

問 物化・物象化・物神崇拜について分かり易く説明しなさい。

9 孫明道のパフォーマンス

孫明の心あふるる歌なれどただその節は百年古いか

7月4日月曜日、朝7時半に孫明道は、大手門高校に登校してきた。そして太極拳の練習をはじめた。音質のいい携帯でバックミュージックを流しながら優雅に舞っている。次第に見物の人だかりができていった。孫が満点近い日本語での試験の成績で合格したことは既に知れ渡っていたので、元々どんな人物か興味をみんなもっていた。それがいきなり太極拳ということで、集まって当然だ。どんどん人だかりが広がってくる。

15分程してから、皆に型の指導を始めた。二十人程が見よう見まねに型をまねた。8時には終えて、今度はギターを取り出して、『禁じられた遊び』を爪弾きはじめた。年期が入っているのかみんな聞き惚れて、万雷の拍手が起こった。そして持参した楽譜を配って自作の曲を歌い始めたのである。

大手門高校賛歌

作詩・作曲 孫明道

生駒山よりかけのぼる
光のみ名はニギハヤヒ
昔ゆかしき大川の
岸辺に近くそびゆるは

秀吉公の夢のあと
掘をへだてし学び舎は
我らが母校大手門高校

命の糧を集めたる
薨競える蔵屋敷
浪速は天下の台所
東亜の扇の要なり
商人たちの実(まこと)道
先立ててこそ我も立つ
我らが母校大手門高校

はるけき昔物部の
戦士は薨れ白鳥(しらとり)に
成りて故郷の河内湖へ
そを迎えつつ妻や子は
永久(とわ)の平和を祈りたり
光と命と愛願い
我らが母校大手門高校

何を勘違いしたのか、戦前の寮歌や校歌のような歌詞であり、曲も古閑裕而が作曲したような古い曲想である。それを朗々と歌ったので、やんやの拍手が起こった。

気をよくして孫明道は「では皆さん、わたしについて歌ってくださいね。」といって歌うがだれもついて歌ってくれない。8時半

には教室に入らなければならないで、自然にみんないなくなっていく。

陽一が近づいて、「素晴らしいパフォーマンスだったよ。ギターも歌もうまいね。それに作詞作曲も見事だ。ちゃんと三上教の光と命と愛を織り込んでいるしね。」

ただあの曲想は榊先生よりももうひとつ上の世代が喜びそうな曲想だな。今の高校生にも歌わせたかったら、いくら遡っても一九七〇年代の井上陽水や小椋圭や谷村新司以降のニューミュージックの曲想にしてくれないと無理だよ。中国でも谷村新司の『昴』は流行ったらしいじゃないか。それから学校に気を遣って校歌みたいになくてもいいよ。もっと孫君の個性的な感じ方が伝わるような方が胸を打つよ」と忠告した。

孫は真剣な表情でアドバイスを聴いていた。「そうか、分かったよ。アドバイスありがとう。すごく参考になった。」

それから一週間近く、孫は授業の時以外は、携帯から何か聴いているようで、イヤホンを外さなかった。陽一だけはきつとニューミュージックを聴いているのだろうと想像していた。他の学生は英語の勉強でもしているのだろうと思っていたようだ。

7月11日月曜日、孫は太極拳からパフォーマンスをやりはじめ、歌は谷村新司の『昴』を歌い上げ、そして新しいオリジナル曲を披露した。

日本留学

孫明道

希望の光はいずくにと
東海はるか越えてきた
磐の船にのり、生駒山に舞い降りた
私は貴人か狂人か
はたまた日の神ニギハヤヒ

扶桑の樹から日が昇る
十個の天日を生みし母
羲和の女神がしろしめす
甘き水の流れたる
火の鳥の棲む夢の島

人は光をつかめるか
人は命に輝くか
人は愛に生き抜くか
砧(きぬた)打つ音聞こえるか
祖国の空にも響けるや
砧打つ音聞こえるか

『昴』のように力強く、格調高く、そして孫が留学に込めたなみなみならない思いがあふれていて、歌詞の意味は、難しくて分からない部分もあったが、メロディが切々としているので、みんな

な惹きこまれて聞き入っていた。孫は歌い終わると感極まって、号泣してしまった。予定していた歌唱指導はできなかった。

ともかく、孫の語学力や日本文化に対する理解の深さは、想像を超えていたから、彼が留学生であるということが信じられない者も多かった。その上、英語力や理数系までも高校レベルのものは既にマスターしているらしい。

オリジナル曲をたちまち五曲ほど作って、毎朝太極拳とギター演奏、歌唱指導を行ったので、一年生、二年生を中心に、五十人ほどのリピーターができた。既に夏季の補講期間に入って、午前中で講義がおわり、午後からは予備校に行く者が多いが、学校で自習する一・二年生を対象に、孫は自習学習サークルを組織した。分らないところはお互いに教え合うシステムだ。もちろん孫に質問できるのである。

孫の説明は、まず初歩的な原理を確認し、どのような原理がどう組み合わさっているかはつきりさせてから、解いていくので、つまづいていた生徒によく分かるのだ。

もちろん二時間ほどみっちり自習したら、一時間は孫の歌を一緒に歌い、その意味を解説する。昔日本が扶桑国とよばれていたことなど、高校生で知る者はいないし、大阪人でも大阪市から東大阪にかけて河内湖だったということも知らない者が多い。生駒山の山麓を中心にニギハヤヒ王国があったということ、ニギハヤヒが物部の祖先だということ、物部氏の祖先は白鳥という説話が

あること、これらの知識は榊周次のWEBから得た知識である。歌詞の解説のついでに、榊周次の講演やエッセイの内容を紹介した。

「砧」という言葉の意味も誰も知らなかったが、麻や木綿や絹を打つ丸い大きな木の槌で、その叩く音が北九州の芦屋から京の都から何年待っても帰ってこない夫に届けと祈りを込めて叩き続けたという新妻の話からきている。世阿弥の謡曲からきているのである。

日本は太陽の故里、陽の登る扶桑の樹がある光の国であり、ここに希望の光がある宝の島である。そして命を神にして命の循環を貴ぶ豊かな自然との融合に生きる命の島である。さらに和を貴び知恵を出し合い、話し合いで決めて、一緒に力を出し合う愛の島である。光 Light、命 Light、愛 Love の三つのLを信じて生きているのではないか、孫は日本の文化からそのことを学び、それを祖国に紹介して、祖国の改革と発展に尽くしたいと語った。

こうして所期の目的である三L教の教えが浸透し、なんと7月が終わる時にはメンバー30人が自分は三L教徒だという自覚を持つようになった。なぜなら三L教のうたい文句に「世界で一番信徒数が多いのは三L教である」というように、誰もが生きている限り信仰せざるを得ないのは、光・命・愛であるという単純な教義しかもっていない。至極あたりまえのことなので、だれもが自分が三L教徒と思わざるを得ないのだ。

ではどうしてそう思う事に意味があるのか？それは、みんな三
し教徒同士なのにどうして憎しみあったり、殺し合ったりするの
だ、仲よく助け合い、愛し合っていけばいいじゃないかという考
えにみんながなれば、その上にできる政治経済その他の社会機構
なども、協調しあっているのではないかということである。

陽一は、孫にいろいろアドバイスをし、大いに励ましたが、夏
季休暇中も学校で図書室で自習しているものの、孫を中心にする
学習サークルには様子うかがいに顔を出す程度だった。行く度に
孫はリーダーとしてのカリスマ性を高めているように見えた。陽
一は自分で勇気を出して行動するという事では、あるいは見ど
ころがあるかもしれないが、人を組織し、率いていく能力はあま
り備えていないと思う。組織を右肩上がりに広げていき、自分の
権威を認めさせる能力において、孫にはやはり孫文の血を引いて
いるせいか、格別の何かが備わっているように思われた。

高校の校庭でパフォーマンスをし、学習サークルを組織すると
なると、やはり学校側の了解が必要で、いろいろ面倒なことにな
るところだが、御木本校長のところへは足繁く通って、許可を直
接得るようにしていた。なんととっても稀に見る天才がわざわざ
上海から大手門高校に来てくれたのだから、それを利用しない手
はない。校長は目を細めて見ていたのである。

太極拳やギター演奏や歌などは校長もたまげたが、そこに政治
的な狙いはなかったし、三三という宗教的原理も常識の範囲内で、
問題にされるようなものでもない。彼が友人を組織し、一緒に勉

強をしようということで、校長は、ただ中国からの秀才が混じる
ことでの刺激効果しか期待していなかったのが、優秀な教員を獲
得する以上の効果があるかもしれないと手放しで歓迎していた。

8月は大抵の生徒は予備校の夏季講習に参加する。それで高校
がセットする補習授業もない。しかし、孫のグループは8月こそ
遅れを取り戻す絶好のチャンスだから参加者全員が特に欠点とか
とっていた者も遅れを取り戻すだけでなく、できるだけ上位を目
指そうということになった。

グループに加わった生徒には割と成績不振の生徒が多かった。
彼らは中学ではトップクラスだったのに、高校で急に難問攻めに
合い、三十点未満の屈辱的な欠点を取り、自信とやる気を喪失し
たまま、なかなか這い上がれなかったのである。だから孫が鮮や
かなパフォーマンスで登場し、自分たちを救ってくれる救世主に
見えたのかもしれない。

元々大手門高校というエリート校だから、生徒たちはプライド
が高く、人に頼って勉強しようとする生徒は少ない。学校でも予
備校でも自分だけで勉強しているのである。互いに教え合い、励
まし合い、助け合って勉強するというのはだから勇気がいるし、
そこに飛び込んで、たとえ当たり前でも同じ三つのしを信じ合い、
心を一つにして高め合うという経験は、大きな感動を与えて、そ
れだけに効果もみるみる上がったのである。

孫いわく「学力を高めるにはやはりやる気、士気が必要です。

士気というのは英語でモラルですが、もちろんこれにはモラルつまり道徳的自覚が必要です。自分が何のために学ぶのか、その志が高くて、しかも昔風にいえば天下国家を憂う者であればあるほど士気が高まります。天下国家は今では人類愛とか自然環境と我々の未来を切り開こうとする自覚と言っていいかもしれませんね。

いい大学に行って、いい会社に就職し、いい収入を得ようというだけでは、命がけにはなりません、自分が頑張らないと、人類未来や地球はどうなるのか心配で夜も眠れないとなれば、その人は夢中で勉強していい成績になるのです。そこで提案ですが、モラルとモラル昂揚のために榊先生の哲学の特別講座を夏季休暇中に我々のサークルで主宰します。〈倫理〉としないで〈哲学〉とするのは、今先生は本校では倫理担当でないのです、倫理なら倫理の先生に頼まないのはおかしいと思われるかもしれないでしょう。何回きていただけるか分かりませんが、全体が無理なら、近現代だけでもやっていただくというのはどうでしょう。」

既に孫からは、榊周次の三上教関連の話はかなり繰り返して聞かされているので、皆大賛成だった。しかしこんな質問が出た。「榊先生は、専任の先生ではなく非常勤の先生なので、講義時間が増えるとなったら、謝礼が必要になるのではないですか？それも高校の非常勤並みの薄給ではあまりに失礼です。せめて一時間話していただいたら一万円は必要でしょう。一日二時間ですから30人で割ると毎日七百元の負担になりますが、大丈夫ですか？」

「そうですか、私は日本に来たばかりなので、そういう謝礼慣行については明るくありません。それにこの会もそういうイベントなどを開催するとすれば、年に一定額の支出ができるように会計係りを決めて会費を徴収し、会計報告も行うようにすべきなのでしょう。そういう組織にしようか、今まで通り勉強したり、一緒に歌を歌ったりするだけにしておくのか、どちらがいいでしょう。忌憚ないご意見をください」と孫は議論を提起した。

二年生の石川拓馬が挙手した。「僕の家では夏休みに予備校に行くように強く勧められたのですが、こういう勉強会があつて、そこで勉強した方が楽しいし、能率もいいと言つて、予備校に行つていません。ですからその分家計は助かっています。だから少々の会費だったら出してもらえと思います。遠慮せずに徴収してください。ただ家計の事情などで難しい場合は、強制しないことにしたらどうでしょう。そこは正式なクラブではないので、融通はきかせられるでしょう。」

一年生の植山菜々が発言した。「私は一年生なので、この会が孫先輩が卒業されてからも続けていけたらと思っています。このままだとやはり孫先輩の個性に引つ張られてもっているのです、孫先輩が卒業されたらなくなってしまうと思います。確かに孫先輩がいなくなったら、今まで通りにはいかないにしても、こういう会は絶対になくしてはいけないと思います。ですから私は、組織としての体裁をしつかり今から固めていくことは大事なことでないかと思ひます、月千円ぐらいなら特別な事情がない限り、お小遣いから出せるでしょう」と何故か涙目になっていた。

一年生の田辺麗が「あら菜々ったら、どうして泣いてるの？何か悲しいことでもあるの」と植山に質問した。「別にないわよ、目にホコリが入っただけ、麗の意見はどうなのよ？」

「そうね、月千円なら賛成ね。むしろ安すぎるけれど、孫先輩が卒業されてからの事を考えると、高いと続かなくなる心配があるわね」と田辺も同調した。「異議なし」と口々に言って反対がなかった。

孫は微笑んで言った。「みなさんありがとう、榊先生との交渉はお任せ下さい。なんでも非常勤講師の給与は、極端に低いようですから、出せるものなら謝礼はきちんと出したいです。それにWEB時代では著作で稼ぐことも難しいようです。石田梅岩の〈先も立ち己も立つように〉という商人道徳は大切です。」

田辺は続けて言った。「代表や会計、書記も決めてしまいましたよ。それから会の名も。では代表は孫明道君、会計は石川拓馬君、書記植山菜々さんで異議ありませんか？」みんなニコニコしながら拍手した。

田辺はさらに続けて司会代わりに仕切った。「会の名前は耳にタコができて三Lにちなんで『三L学習会』でどうでしょう。」これも「異議なし」であっさり決まってしまった。これで三つのLを信じて、それを精神的基盤にして共に学び合う学習会が正式に誕生したのである。榊にとって、そういう組織を立ち上げるこ

とは夢として持っていたが、なかなか乗ってくる者はいなかった。それが孫明道は、まるで天から舞い降りたように見事にやってのけたのである。

問 孫明道が三L学習会に30人も組織できた理由を説明しなさい。

10、キルケゴールの絶望と信仰

ただ一人御前に立ちて救い乞う己が手にかけ殺せし神に

孫は、自分が卒業しても大手門高校に『三L学習会』が存続できるとするために、学習会の内容を保存し、できればソフトとして使用できるようにしようと考えた。モバイル用のノートパソコンを持参できるものには持参してもらい、各自は質問や疑問点などを予めUSBメモリチップに保存してもらい、画像を

スクリーンに映しながら応答を打ち込んだ。そうしながら議論を進めていく。もちろんそのままにしておくのではなく、教材として参照できるように、編集し直し、単元別にまとめ、基礎。応用、発展に分類していくのである。

夏休み期間ほとんど日曜日以外は『三上学習会』は開催されていたので、数Ⅰ・数Ⅱ・化学・物理・英語でそれぞれシグマベスト並みの量の参考書に相当するものができたのである。国語系や地歴・公民系は、メンバーの中に欠点を取る者はいなかったし、榊先生の哲学講座以外は、それらは当面家庭での自習でということにしていた。

メンバーはそれを自分のUSBチップに保存して、苦手な部分は繰り返し参照するようにし、それでも分かりにくいとまた学習会で説明し直してもらい、分かりやすく書き直していった。それで9月末の前期試験では全員目覚ましい向上となり、全校の注目の的となり、入会希望者が殺到することになったのである。それはさておき、夏季学習会での榊先生の哲学講座の様子を紹介しておこう、この物語はなにしろ哲学教科書を兼ねているのだから、是非覗いておかななくてはならない。

マルクスに関する講座もあり、それも紹介したいのだが、既にこの物語では、社会科学準備室と榊周次の自宅で語り合ったので、省略して、実存主義から入ろう。功利主義についてはアメリカブラグマティズムで触れる際に、一緒に触れることにする。

8月2日火曜日である。午後3時から

「さて、実存主義に入りますが、ちよつと話を戻して、復習を兼ねますが、マルクスは『経済学・哲学手稿』で「四つの疎外」の第三の疎外はなんだと言っていましたか？植山菜々さん？」と榊は急に当たった。この講座は午後3時からなので、かなり眠気がさすらしい。「菜々は急に振られてびっくりした。「ええと第三の男はハリー・ライムです」と答えた。これには榊もたまげた。「植山さん、〈タリラン、テイラリラン〉という映画音楽で有名な『第三の男』を観たのですか？あれはなかなかしぶい映画ですね。オーソン・ウェルズがハリー・ライムを怪演したので有名です。じゃなくてマルクスの「四つの疎外」があつたでしょう？」

植山はやつと眠気を覚まして「生産物からの疎外、労働からの疎外、類の本質からの疎外、人間からの疎外です」とともに答えた。「だから類の本質からの疎外でしょう。分かっていますよ」とニコツと笑った。

「類的本質は主に何を意味していたのですか？」植山は答えた。「そりゃあ労働の疎外を論じているので労働です。」榊は頷いた「労働ですね。でも『フォイエルバッハ・テーゼ』ではマルクスは人間の本質は現実には何だと言いましたか？」植山は「社会的関係だったかな？」と応答した。「惜しい、じゃあだれか？」二年生の福本良太が挙手して答えた、「社会的諸関係のアンサンブル（総和）」と規定しました。」

榊は表（ひょう）で代表的な五人の実存主義者を示した。まず神の存在を前提に成立する実存主義だ。十九世紀はデンマークのキルケゴール、二十世紀はドイツのヤスパースである。そして神の非存在を求める実存主義は、十九世紀後半はドイツのニーチェ、二十世紀はドイツのハイデッカー、フランスのサルトルである。

	19世紀	20世紀
有神論的実存主義	キルケゴール	ヤスパース
無神論的実存主義	ニーチェ	ハイデッカー サルトル

『今年二〇一一年には東日本で大地震が起きた。千年に一度というような大津波もきましたね。何もかもさらってしまっているのですから大ショックです。そういう大地震に匹敵するような精神的なショックをゼーレン・キルケゴールは受けたのです。

彼は御父さんをすごく尊敬していたのです。毛織物の商売で成功して大きな財産を築いたようです。しかも大変敬虔なクリスチャンで、教会で牧師さんに代わって説教をする役もしていたようです。

この『三上学習会』のメンバーはまた一つ新たな社会的関係を重

「この二つの本質規定が矛盾しているのでマルクスの人間本質に対する捉え方が、コロツと変わったと解釈する人もいたようです。予め人間の本質を思考だとか、言語だとか、労働だとか、社会性だというように抽象的に規定して、それで現実の人間を捉えても仕方がない。現実の人間は具体的な社会的な諸関係をいろいろ取り結んで生きているわけですね。

ね着しているわけですね。その総和として現実的な諸個人は捉えるべきだということです。

実存主義は理念として人間を何々だと規定してしまうことがいやなのです。それぞれの生（なま）の人間が先ず今ここに現存するというありのままを捉えるべきだということです。だから規定される前の生の現存が実存です。生の今を生きる単独者のあり方が実存なのです。その立場に立ち切るのが実存主義です。」

ところが息子に自分の罪を告白したのです。それは父が幼い頃十歳ぐらいだったでしょうか、貧しい羊飼いだっただけです。北欧のデンマークですから昼間でも雲が厚くなるとすごく暗くなり、雷鳴がとどろいて雹が降ってきたりします。凍え死にしそうなくらい寒いのです。そんな時、恐ろしい目に遭わせる神を呪ったものだと言ったのです。

普通の息子ならそんなみじめな境遇を克服して立派に成功したお父さんの苦労話として、とても感動するものでしょう。ところが違うのです。彼は敬虔なクリスチャンなら神様が試練を与えて下さったのだから、神に感謝すべきなのに、神を呪ったなんて、お父さんは悪魔ではないかと感じたのです。

それからもう一つ、彼の父は成功してから奥さんに先立たれました。それで淋しかったからでしょう、つい女中さんに手が出てしまったのです。それで生まれたのがゼーレン・キルケゴールです。迫り方にもよりますが、これもなれ初めのほほえましい、人

間的な話だと思えますね。先妻は既に亡くなっていたので浮気ではありません。責任を取って妻にしているわけです。それでもゼーレンは自分は罪によって生まれた罪の子だと感じたのです。

悪魔の血を引く罪の子だと精神的な大地震を受けたゼーレンは、絶望のあまり自暴自棄になって放蕩します。そんな彼を救ったのは清純な少女レギーネでした。彼はレギーネとの愛に生きることによって救われようとし、彼女と婚約しました。ところが彼は、自分は悪魔の血を引く罪の子だから、自分が彼女を幸せにできるはずがない、結婚は相手を幸せにするためにするものだから、この婚約は間違いだと気付くのです。それでも愛していますから結婚したいですね、それでへあれか、これかの選択で苦しみます。かれは断腸の思いで、突然婚約を破棄したのです。

事情を話して、自分は悪魔の血を引く罪の子だからと言えば、彼女は笑ったかもしれませんが、彼はどうもとてつもなく恐ろしいことだと思っていたので、理由は死んでも言えなかったようです。彼女にしたらさんざん乙女心を弄んでとひどいと思ったかもしれません。

大衆新聞の『コルサール』がキルケゴールの婚約破棄事件を悪い男みたいに興味本位に報道しました。元々軽薄な『コルサール』に対して厳しい批評をキルケゴールはしていたようで、それで恨まれていたようです。キルケゴールにすれば、自分は愛すればこそ、断腸の思いで、主体的決断で婚約破棄したのに、主体的決断などしたことがなく、唯興味本位に大衆迎合的な記事を書いてき

た『コルサール』に対して強い反感を覚えました。

このように精神的な大地震から主体的決断をして生きていくところに実存的生き方の特色があります。このキルケゴールの大地震の例はあまりにも受け止め方が極端な気がしますが、彼なりの主体的真実ですね。」

二年生の淀川雅巳が挙手した。「榊先生にも精神的な大地震の経験はおありなんですか？」と突っ込みが入った。「へ、へ、へ」と榊は照れ笑いをした。「ええ、あります。それで私は哲学の道に進むことになったのです。実は私の父は小学校の教員でした。母は中学校の教員だったのです。両親とも仕事に誇りを持っていて、教育を神から与えられて使命のように思っていたようでした。こういう職業観を何というか分かりますか？」淀川は答えた。「職業召命観です。」榊は感心した、「よく知っていましたね。ですから教師の仕事は、あくまで教育によって健全で教養ある市民を育てるためにしているというのが、私の捉え方だったのです。つまり私利私欲で教育の仕事をしているのではないと思っていました。もちろんその対価で給与を支給されていますが、それは教師を続けていき、子孫を残すためであって、その給与のために教育をしているのではないと考えていたのです。」

ところが父が『子供を育てるためでなかったら、仕事なんかできるはずがない』といったのです。これはマルクスの疎外論で言えば類的本質からの疎外にあたります。労働という自己実現のために生活しているのではなく、生活のために労働しているという

本末転倒の疎外です。私は教師の仕事はそういう疎外がないと勝手に思っていたのですが、そうじゃなかった。これが大地震です。

精神的に深く疵つきましたね。つまり父は子供である私を育てるために犠牲として働いているということですからね、教育という仕事が最大の自己実現であり、喜びであるのではないのか、それを自分の仕事として選んだのなら、私のための犠牲だなんて思っただけではないわけですね。

まあ自分が実際に教育の仕事をすれば分かるのですが、そりゃあ疎外がないなんてことはまったくないわけで、なかなか思うような仕事はできませんし、屈辱的なことがたくさんあるわけですね。父のいうことに無理はなかったのですが。それで人間がどうしても労働力商品としての賃金を得て、消費生活を営む限り、持たなければならぬ価値観の限界みたいなものですね、人間の商品性というのはなかなか克服できない、その〈人間＝商品〉としての構造を明らかにしようというので経済哲学の道を選んだのです。」

「あの話が前に進めなくて済みませんが質問していいですか？」二年生の三宮春彦が訊ねた。榊が頷くと「先ほどのキルケゴールの大地震ですが、父はゼーレンに若い時の苦労話を聞かせたわけですが、それを悪魔や罪みたくに受け取られた、すごく心外だったのですか、それとも父親自身が、善人面ばかりしているのを偽善だと思っただけ、自分の罪業を打ち明けたのですか？そのどちらかで随分違った話になりますね。」

「その突っ込みは深いですね」と榊は感心した。「私も前者だと思っただけでゼーレンをひねくれていると思っただけですが、実は後者が正解です。キリスト教徒の中には、イエス・キリストを殺したのは我々だということを強調する人々がいます。ゼーレンの父もその宗派だったようです。」

神が人間イエスに身を貶（おとし）して人類の罪を贖う十字架につかれたのですが、それはイエスを神の子と信仰することができなかった人々のせいです。偽預言者ということでイエスを十字架にかけたわけでしょう。つまりイエスを殺したのは、人々の不信仰であり、それは私たち自身の不信仰と同じなのです。イエスは二千年前に十字架にかけられたけれど、その罪を犯しているのは我々なんだということです。そういう自分たちの罪を自覚してこそはじめて真剣に神と向かい合うことができるということです。」

三宮は愕然とした。「それってすごく恐ろしいことですね。だったら自分たちは神の子の殺害者だから、神の裁きで滅ぼされる、あるいは地獄行きですね。そう分かっている、神に救いを求めるなんて図々しいから絶望しかないでしょう。」

「だからキルケゴールのキーワードは〈絶望〉です。彼は神に救われると思っただけで信仰しているのではないのです。近代人は己の欲望を充足させ、私利私欲に生きることによって、資本主義社会に適応できるのです。ですから実際には貨幣の論理に従って生き

ているわけですね。マルクスは商品物神、貨幣物神の支配として喝破しました。ですから愛の神や命の神光の神の原理などどうでもいいわけだし、ましてやキリスト教の二つの愛、神への愛と隣人への愛になど生きていないわけですね。神に背き、神から離れて生きているくせに、シャーシャーと神に罪の許しを求め、神の国に入れてもらおうなんてあつかましいわけです。

ですからいくら神を強調していても、近代人の行動が不信仰を証明しているわけですね。常にイエスを十字架に掛けて殺しているわけです。だからその現実を見据え、その罪の重さを自覚して、神の御前に立って裁きを求めるとというのが、キルケゴールの宗教的実存です。」

三宮は難しそうな顔をした。「その不信仰というのは、もし本当に不信仰だったら、神の御前に立つなんてこともないし、神を殺していることも別に平気な筈ですし、元々神は存在しないのなら、神の罰なんて妄想です。だから神から離れ、信じていなくせに神を捨てきれない、神の救いを求める気持ちも絶つこともできないということでしょう。だから絶望だけれど神を求める、その不条理こそが信仰の根拠ですね。」

「ええそう言えますね。」と応答した。「私の家系は実は明治時代からのクリスチャンの家系で、私で四代目なのです。父から教会に通うように言われていましたが、神様なんて見たことないし、今時非科学的な天国・地獄なんて信じられません。それでみんな信じているフリをするのが教会だと思っています。高校生の

時に、牧師さんに、『先生も本当は神なんて信じられないのでしょう、信じているフリをされているのでしょうか？』と尋ねてみたのです。するとその牧師さんは、『私は牧師を数十年していますし、死ぬまでするつもりです。そのフリのために一生すごすなんて考えられますか、本当に信じているからこそ牧師をしているのです。』と答えられました。立派なお答で納得しました。その方は関西地区の大主教にまでなされました。

大学生の時に同じ質問を若い牧師さんにしますと、『本当ですね、なかなか神を信じるのは難しいことです。私も疑っています。でもどこかに神に居て欲しい、神にすがりたいという気持ちがあり、教会に居てお祈りすると心が休まるので、教会から離れられないのです』と正直に話されました。その方はやがて左遷されたようですが、現代人の信仰はこの若い牧師さんの方が典型ですね。」

三宮はさらに質問した。「それじゃあ、榊先生は三上教を提唱されながら神を信じていないのですか？」榊は微笑んだ。榊が微笑む時は実は緊張しているのである。緊張に堪えられなくなつて頬の筋肉が弛緩するのだ、それを誤解して余裕のように見えることがあるらしい。

「デカルトだって方法的懐疑で、神は疑えるとなりました。考える我は、考えている以上疑えないから絶対確実で、そこから神を演繹したのです。つまり神ですら考える我に由来するので、近代的自我の自我中心主義は神を冒瀆しているという批判もあります。信じるというのは疑っているからでしょう、疑いの余地のないも

のは信じる必要すらありません。

近代科学は自明の真理からの演繹と実験観察の結果確かめられたことからの帰納を総合したものですから、定説化しているものは疑う余地がないと捉えられ、信仰すらされていません。しかしあれも一定の条件のなかで、今までと同様の事が、これまでの経験から分かっている法則が将来も妥当するとしたらという仮定に立っています。つまりこれまで通りことが起こることを信仰しているわけですね。その意味では科学も宗教です。

三L教はだれもが信仰している光・命・愛を原理にする宗教です。光がなければ何も見えず生きていけません。また希望の光と言いますが、希望を持って生きなければ生きていけません。今日巨大な隕石が落下して地上の生物が絶滅しないとは限りませんが、明日が存在することを希望し、信じているから生きられるのです。

命があるから生きられるので、だれもが命を信じ、大いなる生命の循環に守られて生きていること、その命の現れであり、その命に還ることを信じています。そして個体としての有限な命を生きている限り精一杯輝かせるといことが、それぞれの使命ですね、そういうことは程度の差、自覚できているかどうかの差はあるにしても、だれもが分かっていることですね、それを「本覚（ほんかく）」というのです。

愛についてもそうでしょう。喧嘩ばかりしては楽しくないし、憎しみ合うことほどつらいことはありません。互いに愛し合

っているということを信じて行動するということが大切です。自分を愛してくれている人を憎むのは難しいので、愛を信じ行動すること、話し合いもまとまり、世界が平和になります。もちろん実際には愛が支配しているだけでなく、憎しみや裏切りに満ち満ちていて、哀しみや絶望も経験しますが、それでも愛を信じないと幸せはつかめません。

このように誰もが光・命・愛を信じて生きている。そのことを強調して、自覚的に三つのLを掲げて生きようというのが三L教です。それで神を信じるということですが、キリスト教的な超越神ではありませんね、そういう意味では神を信じていないわけです。でも『バイブル』でも三つのLを掲げています。仏教の阿弥陀如来も無量光、無量寿という意味の仏であり、慈悲の権化ですから三L信仰なのです。三つのLこそが原理だということで、この原理を神として神を再定義しますと私もそしてみんなも神を信じていることになりますね。

キリスト教も仏教も神道もあるいは無神論でも三つのLを信じている限りは三L教なので、三L教徒は最大の信徒数を誇っているということですよ。」

三宮は納得したような穏やかな表情になったので、さらに榊は続けた。「キルケゴールは実存の三段階を説きました。第一段階は美的実存、第二段階は倫理的実存、第三段階が宗教的実存です。

若者は美的享樂を求めて、『あれも、これも』といろいろやって

みるものです。芸術やスポーツに挑戦したり、フオーリンラブして恋愛に夢中になったり、酒やギャンブルに溺れると身を持ち崩しますが、まあいろんな快楽に酔いしれるわけです。実存というのは、現に今ここにあるということを実感することですから、過去や未来など考えずに、今生きている実感を得ようとするのですね。それは大なり小なり美的な生活です。しかしこの美的実存には〈絶望を知らない絶望〉が潜んでいるということです。

キルケゴールによると絶望とは神から離れていることです。もし神から離れていなければ、『あれも、これも』と次々と飽きて移っていくということはないはずです。美的なものというのは慣れてしまうと感動が希薄になってしまうのでしょうか、それに挑戦しても限界があつて、挫折しますからね。キルケゴールはそこに神からの乖離を感じまして、美的実存では満足できず、挫折に陥り絶望を自覚すると言います。

絶望によって質的飛躍が起こります。そして次の倫理の実存に移ります。これは何か責任を果たすことで生きていることの手ごたえというか充実感を感じる実存です。何かミッション（使命）を果たせたと思うとすごく満足感が起こりますし、自信にもなりますね。会社で役職を与えられて責任を果たせたり、主婦が家事や育児を立派にこなせたりしますと幸福を感じるものらしいですよ。

ところがこれも四十歳を過ぎますと、時代の変化に対応できなくなつて挫折したり、子育てを終わつた主婦が充実感を失つて孤

独に陥り、キッチン・ドリンカーになったりします。ええ、昼間から台所で料理酒でアル中になるという話です。キルケゴールがそう言っているのではなくて例えばの話ですよ。だから倫理の実存も結局絶望して、職場から家庭からも精神的に疎外されて、ただ一人の孤独な単独者になつて、神の御前に立つ宗教的実存に飛躍することなのです、

やつと神に向かうことによって宗教的に絶望から救済されるのではありません。それはむしろ絶望に向き合うことなのです。なぜなら自分たちは、神から離れ、イエス・キリストを殺害してきた罪人なのですから。単独者になり、神に向き合うしなくなつたのに、そこにいる神は自分から断絶した神であり、裁きの神なのです。

『死に至る病』で〈ラザロの死〉が出てきます。ラザロの病が重いので、イエスに来てほしいというのですが、イエスが居るのはガリラヤ湖畔です。ラザロはエルサレムの郊外のバタニアに居まして百キロ以上離れています。着いた時には死後二・三日経っていたのです。イエスは棺に向かつて、『この病は死に至る病ではない』と言いました。もう死んでる！のにね、おかしいことを言いますね。おそらく肉体は滅んでも、彼は神という大きな命につながれているので、彼の精神は死なないという意味でしょうね。」

三宮はさらに訊ねた。「精神は死なないという意味が分かりません。精神は肉体の働きではないのですか、肉体が滅んだら精神もないんでしょう。」

「それがデカルトのように精神を物質と二元的に存在する実体として捉える考えると、唯物論のように、精神を肉体の働きとして説明する見方が対立します。イギリス経験論などでもホッブズの場合は、意識を薄れゆくメモリーとして感覚が無数の微粒子になって、動き回っていると考えました。まあ物質的に精神を説明しているのです。」

イエスの場合は、聖霊や悪霊がつきものとして肉体に入ったり、出たりしていますね。精神が実体として捉えられていたかどうか、そこまでは分かりません。キリスト教会でもカトリックでは肉体が復活しない限り、精神の復活はないと考え、復活は肉体ごとの復活を考えています。プロテスタントには不滅の靈魂を信仰する人もいますよね。それならイエスの肉体的な復活というのは、作り話でいいことになります。

初期キリスト教でもグノーシス派は二元論の立場から、イエスの靈魂の不滅を唱えて、復活を精神的な出来事と解釈しようとしていました。でもまだイエスの復活を見たという人が幹部としていたわけですから、当然破門されたわけです。

ただキルケゴール自身は精神として生きるということを言っていますが、二元論的に捉えて言っているのか、個体的には有限で一回限りの人生だけれど、主体的な決断に生きること、大いなる生命としての神の不可欠な要素になるので、その意味で精神として不滅だということなのか、それは我々が主体的にどう受け止

めるかということでしょうね。」

問 キルケゴールの実存哲学の特色を〈主体的決断〉と〈絶望〉をキーワードに説明しなさい。

11、鄧玉泉の登場

根性は一度なくすと戻らぬか身焼かるほど地獄観るまで

孫明道はJR野田駅近くのアパートを間借りしていた。そのアパートは華商王法燈が経営していて、中国人留学生が数多く間借りしているとところである。その華商も極秘で民主化活動をしていて、明道の父孫周、字は智仁の親友らしい。孫明道が稀にみる天才だということは幼い頃からよく知っていて、日本にいた時はよ

く世話を焼いていた。大手門高校に留学すると聞いて、是非自分のアパートを使って欲しいと特別に無料で提供してくれている。将来は中国民主化運動のリーダーになってくれるのを期待しているようだ。

8月2日明道は、近くのスーパーに午後8時から半額に値下がりした惣菜を買いに行った。高校生なので食べ盛りだから通常価格で買っていると栄養が不足する。自分で調理するのがいいのだが、勉強や活動に追われているので、寸秒を惜しむ毎日である。野田駅前のスーパーは品質にこだわり味がいい、売れ残りを半額で買うとたっぷり満腹できるのである。

隣室には孫より2週間後に越してきた鄧玉泉という女子大生がいる。彼女の父は中国領事館に勤務しているらしい。9月から大阪市立大学の経営学部三回生に編入学の予定である。上海大学で経営学を専攻していたが、日本式経営と日本の観光業経営に興味があったので、日本語専門学校にも通っていて、日本語会話には不自由しなかった。

鄧玉泉は、孫明道が気に入ったらしく、すっかり打ち解けて、食糧などを少し多めに買ってきては、食べきれないからと差し入れに来ては話し込んでいくのであった。孫は鄧が領事館務めの父を持っているということで、警戒していた。王法燈からも領事館館員の娘には警戒するように釘を刺されていたのである。

領事館としては、孫智仁が民主化運動の地下活動家ではないか

という容疑は抱いていて、王法燈とのつながりや在日の民主活動家の動静を探っていた。孫明道の留学を許可したのも明道を使って在日活動家と連携しようとするのではないかと考え、泳がせてみようということになったらしい。王法燈が玉泉がちょうどたま空いていた隣室に領事館員の娘を入れたのは、断ったら怪しまれると思ったからで、苦汁の選択だった。

明道自身は、人権の確立には大いに賛成で、孫文の〈軍政→訓政→憲政〉の訓政から憲政への移行が必要であるということは、はっきり認めていた。軍政とは軍事力や警察力で統治することであり、訓政は、革命を指導する政党が国民を教化し、指導して統治することである。そして憲政は、人権を尊重し、民主的に〈法の支配〉を実現することである。

しかし劉曉波の『零八宣言』の背後にある全盤西化論には批判的で、中国や日本の伝統思想を踏まえた民主化でないと、本当に国民的な合意形成は難しいのではないかと考えていた。

だから当面は、父の民主化運動に加わるつもりもなければ、ましてや危険な連絡係などする気はなかったし、そのことは父も王にも了解を取っていた。二人とも明道の素質を知っていたので、下手に運動に使って危険に晒すよりも、日本の自由な環境でのびのびと学問をさせることが、将来の中国を背負う人材に育てる近道だと覚っていたのである。

その夜も九時頃玉泉がやってきた。明道はもう食べ終わってい

たのでおかずは断ったが、ケーキも持ってきていて、明道も甘党だし、日本のケーキのうまさは格別なので、その誘惑には勝てず、レモンティーを御馳走して、少し話し込んだ。

話は中国語だが、作者も読者は日本人なので日本語で表記していくことにしよう。「明道君、夏休みなのに毎日学校でお勉強なの？」と玉泉が訊ねた。明道は頷いて「早く友達作って、高校生生活をエンジョイしないとね。いっしょに学習サークルを作って、教え合いながら勉強しているんだ」と返答した。

玉泉は少し驚いて、「あら、明道君ぐらい頭がいいと、高校レベルのこと教え合う意味ないのじゃない？とつくにマスターしているでしょう。」明道は手を左右に振って否定した。「そんなことないよ、教えたり、教えられたりしているとその都度新しい発見があるものなんだ。同じ問題についても一人一人捉え方が違うし、納得の仕方が違う、分かりやすく噛み砕いて説明することによって、認識は深まっていくものだよ。学習会をやっていると、人の教え方から発想の違いを学べるし、教えることによって教えられる楽しさを体験できる。互いに親身になって教え合うので、友情を育むこともでき、充実感がある、すごくハッピーな気持ちに成れるんだ。」

「なるほど、明道君は教師の仕事が向いているのかもしれないね。大学は教育学部にした方がいいかもしれないわ。」と玉泉はアドバイスした。「そうだね、最近、結句教育が国造りの基本だという気がしてきているんだ。自分の頭で考え、互いに高め合い、教

え合うことができるような人材を社会に輩出しないと、その社会は発展しないのだからね。日本は今深刻な学力低下で苦しんでいるけれど、それが技術の遅れを生み、国際競争力の低下の原因になっている。だから学習サークルでは学力向上のノウハウも研究して、具体的に成果を上げて日本の沈没を防ごうと意気込んでいるんだ。」と孫は抱負を語った。

玉泉は感心した。「へエーすごいわね。でも中国にとったら日本は競争相手だから、日本に停滞を打破されてしまうとまずくないかしら？」

「そんなケチな発想では駄目だよ」と孫は情けなそうに言った。「日本が落ち込んでしまうと、中国にとっても打撃なんだ。元々中国の改革開放路線が順調にいったのは、日本の資本が中国の臨海工業地帯の形成に投資してくれたからだろう。日本の資本と技術が中国の低賃金労働力と結合した結果だ。」

「それはそうだけど、今は中国だって世界の工場になり、先端技術を持つようになつたし、資本も蓄積してきているので、もう日本を頼らなくても発展していけるでしょう。そうすると日本の労働力は国内産業が空洞化するので、仕事がなくなり、賃金も低下して中国並みになれば、世界の工場である中国に働きに来ればいいのよ。そして日本は環境保護に力を入れて、中国人の観光地になったらしいのよ。きれいな水と空気、豊かな緑、よく保存された伝統文化、山や温泉も多いし、観光地としては抜群よ。そしてたら一人あたりのG N Pはトップレベルになり、日本と中国は共

存共栄できるわ。」やっと中国人は自信を取り戻しはじめたと思つたら、今度は中華意識丸出しになる。まあ観光産業の振興は目の付け所がいいし、日本再生に大いに貢献することは確かだが、日本人を見くびってかかっている。

しかし玉泉にそう感じさせている日本人にも情けないところがある。重厚長大から軽薄短小へという形で、高度経済成長を終え、オイルショックを経過して安定成長路線に踏み出したところから、日本経済はいわゆる構造改革を推し進め、高級で高品質の製品を作り出し、低価格の商品生産は低賃金の中国・韓国や東南アジア諸国に任せてすみわけていくことになった。だから今頃は、最先端の高品質商品に関しては、日本は他国の追隨をゆるさないぐらいになっていなければならないところだ。ところがどうもそうなっていないらしい。

日本の技術が最先端ということが必ずしも言えないことは、福島原発が重大事故を起こしてしまったことで劇的に露見したが、ソニーやパナソニックがサムソン電氣に後れをとるし、日本の技術の立ち遅れが問題になり始めている。行政もスムーズに機能していないことは、年金の事務が全く杜撰だったことで大騒動に成り、東日本大震災の復旧予算を予定の三割も執行できていないという機能マヒで露呈している。

それでも学校教育が充実していて、健全で質の高い社会人が輩出されれば回復の見込みも立つだろうが、「学校に通えば馬鹿になる」というイリイチの言葉が今や現実に対する厳しい批評として

受け止めざるを得なくなってきた。それほど学力低下は深刻である。なにより問題なのは学問や教養に対するモラル(士氣)の低下であろう。中国では教師が一番心配するのは学生・生徒が勉強しすぎて病氣にならないかということらしい。日本ではどうしたら学問や教養に興味を抱かせることができるかである。授業中の私語や居眠りをやめさせることに腐心しているのである。

玉泉はさらに続けた。「なかなか一度自信ややる気をなくすと取り戻すのは至難の業だわ。ほら日清戦争の時は、清国の方が北方艦隊とかあつて装備はよかつたけれど、いざ戦争となると逃げまわつたというじゃない。たしかに韃靼人の支配する清国に対して愛国心が抱けなかつたということもあるけれど、日本軍の方が根性ができていたのよ。だから国民党軍だつて済南事件で屈辱を味わつたのがトラウマになつて、日本軍とはまともに戦いたくなかつた、日中戦争になつても自分で街を焼いて逃げ回つたじゃない。

蒋介石が国民党内で怖がられ、上海マフィアの青幫(チンパン)でさえ震え上がったのは、彼が日本陸軍で根性を叩き込まれた兵隊やくざだつたからというじゃない。

ところが日本は戦争に負けてもう戦はコリゴリということで、憲法第九条で戦う氣力は失くしてしまった。でも戦後食べるために必死に勉強し、働いて高度経済成長を成し遂げたわけよ。でも豊かになつてしまうと、その息子たちはハングリー精神を喪失して、せっかく築きあげた科学技術大国の地位も色あせさせ、行政も水ぶくれで機能せず、重税で人民を苦しめるだけよ。そして教

育も深刻な学力低下に落ち込んでしまっているの。

中国人は戦争に勝って、革命にも成功したけれど、まだまだ腹は据わってなかったのね。だから大躍進に振り回され、大飢饉で人を食らいあい、文革で狂気に陥り、さんざん地獄を見たので、やっと腹が据わった。それで改革開放を一心不乱に取り組むことができたわけ、日本も落ちるところまで落ちて地獄を観なければ、『陽はまた昇る』ことはないでしょうよ」と言い放った。

「日本人も福島原発事故で相当堪えた筈だ」孫明道は弁解した。「日本の技術が最先端でなくなってきたことは否定できなくなったし、行政もしっかり機能していないことも年金の記帳漏れの大規模な発覚以来明らかになってきている。我々が始めた学習会だって、これまで一番校の生徒というのはエリート意識が強くプライドが高すぎで、謙虚に学び合ったり、教え合ったりはなかなかできなかったらしい。それが基礎から再確認して、手順を踏んで学ぼうとしている。この学習会で日本の教育の再建のあり方につかめたら、それは中国でも大いに参考になると確信しているんだ」とつい見栄をきってしまった。

「へエーそうなの、それってすごいことじゃない？ぜひ参加させてもらえない、私は夏休みで九月編入なので時間があるのよ、日中友好にもなるでしょう」と頼み込んできた。孫は、鄧玉泉の父が領事館員なので、権力の監視かもしれないという疑念をもっていた。「学習会なので、部外者がいると気が散るので嫌がると思いますよ。」と応答した。「だから部外者として観察するのではな

く、一緒に勉強させてもらいたい。英語や数学だとそこそこできたから、お役にたてると思うけどどうでしょう。」

孫は内心では迷惑だと思っていたが、無碍に断ると痛くない腹を探られることになりかねないと考えていたのだ。「それじゃあ朝ミーティングでみんなに計っておきます。OKだったら携帯で連絡しますよ。」ということにした。

問 日本人は地獄を見るまで立ち直れないという鄧玉泉の意見に関して、あなたの見解をまとめなさい。

12、ニーチェ、自己の限界に挑戦する

没落のリスク恐れて怯むまじ己を超えて命輝け

8月3日水曜日、朝のミーティングで、鄧玉泉から参加させて欲しいとの要望があったことを伝えた。一緒に勉強するのなら日中友好にもなっているのではという反応だったが、実は領事館員の娘なので、当局の監視かもしれないと言った。それなら断つたらということだが、孫は断るとない腹を探られるかもしれないとして、一応警戒しつつ参加は認めたらということになった。結局鄧玉泉には携帯で連絡するとその日の午後から参加してきたのである。

午後3時から、榊先生の現代哲学講座である。「今日は今も若者に強い人気があるフリードリッヒ・ニーチェ（一八四四～一九〇〇年）についてお話します。

彼の主著は『ツアラトゥストラはかく語りき』です。この本は是非読んでください。落ち込んでいるときに読むと、だんだん体が熱くなつてきます。メラメラと闘志が湧いてくる本です。

まず試に『第一章 ツアラトゥストラの序説』をWEBで読まれるといいですね。10頁ほどの対訳ですが、エッセンスが入っています。

http://www.42.tok2.com/home/yasuiyutaka/yasuiyutaka/zaratustra_vorrede.htm

分かりやすく訳すことに心がけたので、格調がそれほど高くな

いですが、格調が高く訳しますと、どうしても分かりにくくなりますので、入門にはこれが最適でしょう。

ニーチェが言いたいのは人間の偉大さは己の限界に挑戦するところにあるということです。自分で自分の限界はこの辺だろうと安易に見限って、己の限界を超えて、より上を目指そうとしない人が多いですね。それでささやかな幸せを求めて、蚤のように膚で暖め合う末人ラーストマンが多いのです。それでは人間として生まれてきた甲斐がないじゃないかということです。

人生はたった一度で死んだらおしまいです。やり直しなんてきません。ニーチェは神も信じていませんし、輪廻転生も信じていません。『永劫回帰』という独特の発想がありますが、それはかなり輪廻転生とは違います。死んだらおしまいなのに中途半端な生き方でいいのかということですね。

それに限界に挑戦しないで、中途半端に生きていたのなら、限界に挑戦して命がけで生きている人には叶いません。競争の激しい時代だと、限界に挑戦して生きないと生き残れないということもありますね。中国の大学の先生の一番の心配は学生が勉強しすぎて病気に成ることですが、日本の大学の先生は、そんな心配は全くしません。どうしたら学問に興味を持たせ、講義を聴かせることができるかが頭痛の種なのです。私語や居眠りをやめさせるのが大変です。油断するとトラップを始めるものもいる始末です。もちろん大学にもよるでしょうが。大学教育がそんな体たらくで、日本が国際競争で生き残り、いつまでも最先端技術を誇っていら

れるわけがありませんね。

実際、日本は付加価値の高い軽薄短小の商品に特化して、低賃金のアジア諸国に標準的な商品は作ってもらい、最先端技術では常に他国の追隨を許さない予定だったはずですね。そうでないと国内産業は空洞化してしまい、労働力は過剰になって失業者がふれ、賃金は下落していきます。実際そうなっていますね。賃金が平準化していきますと、産業は労働力の質の高いところへ集中するようになります。

最近の日本企業の技術水準の相対的な低下が、目立ち始めています。ソニーやパナソニックがサムスンに後れをとったというのはショックでしたが、福島原発で絶対安全という安全神話が崩れたのはもっとショックでした。あれこそ停滞の象徴です。だってチェルノブイリ原発で爆発事故が起こったとき、あれはソ連の技術が停滞しているからで、日本ではそれはあり得ないと言ったのです。なぜなら日本は常に最先端を走り続けるからという根拠のない思い上がった幻想があったのです。でも停滞すると大事故を起こすというのは当たっていて、安全神話は本当に幻想でしたね。

企業だけでなく行政の能力低下もひどいですね、国民年金では大量の記帳漏れが発覚しましたし、震災復旧予算も予定の三割も執行できないのです。行政が機能マヒを起こしています。機構が膨張しすぎ、無駄な外郭団体を作りすぎて、予算が膨らみ過ぎて、税や社会保険の負担が国民の能力を超えています。未納が膨らん

でいるのに消費税を増税するという、これでは駄目です。これは国家の自己疎外なのです。

財政はもはや市場の失敗を調整する機能を失い、国民経済のお荷物になっている。だから役人を大胆に縮小すべきところですが、それではかえって失業者が増えます。解決策としては、行政の仕事は公務員の半分で作って、あと半分は実業に回せということですね。休耕地を耕して農業すれば、現物支給で役人の給与を減らせます。これは一例ですが、生産やサービスで給与分を稼がせるということですね、それぐらいしないと、国家破産危機は脱出できません。しかしそれも役人たちの能力が問われますが、全く駄目でしょうね。

だから結局末人つまりラストマンの国になってしまっているということなのです。己の限界に挑戦しようとしないう、そんなことでは日本列島は本当に沈没するということですね。実際、沈んで行っているのです。」

「先生、そのことについて昨夜、鄧玉泉先輩と語り合っていたところです。」孫明道が起ち上がって発言した。「この秋から大阪市大に編入される留学生の鄧先輩によると、中国は大躍進の失敗と文革の狂気できっと地獄を見たというのです。それで腹が据わったんだというのです。改革開放の中で一心不乱に頑張れたのは、それがあつたからです。だから日本も落ちるとこまで落ちて地獄を見なければ、サンライズアゲインとはいかないんじゃないかと言いました。それでいや、東日本大震災と福島原発事

故で相当堪えたんだ、なんとか這い上がるために、謙虚になり始めているところだ。だからこの学習会だって、エリート意識の強い一箱校の生徒たちが、プライドで自分の殻に閉じこもりがちなのに、基礎から学び合い教え合っている、それで学力問題を克服しようとしているんだと言ったら、半信半疑でそれなら是非参加させてくれて言うので連れてきたのです。」

鄧玉泉は挨拶せざるをえなくなった。「あれは中国人同士の話で、オフレコでしょう。そんなこと日本人にばらしたら、私日本人に嫌われてしまうじゃないの。決して悪意で言ったのじゃありませんよ、愛すればこそ言ったのです。三Lの一つはLoveですよ。確かにこういう学習会が広がって行けば、サンライズアゲインですね。でもこれは奇跡に近いです。奇跡が沢山起こることは難しいのじゃないでしょうか？」

それに何も科学技術の最先端に固執することはありません。日本は水も空気もおいしい緑豊かな森の国です、温泉もたくさんあります。伝統文化もよく保存されていて、高級食材が豊富です。人々のファッションセンスも抜群で、そういう観光や文化の面では十分競争力があります。これからは観光及び文化立国を目指すべきでしょう。それで十分豊かな国を保てるはずですよ。それで私の夢は、日本を落ち込ませないためにも日本観光ビジネスのマネイジメントで成功することなのです」とうまく締めたので、その機転の良さに思わず拍手が起こった。

やっと榊は講義に戻ることができた。「もちろんそういう観光や

文化で世界の人々を惹きつけるには。それこそ末人では駄目で、己の限界に挑戦する相当の心構えが必要です。ニーチェは自己の限界に挑戦することに人間の偉大さの根拠を見出しました。

彼は人間を過渡と捉えるのです。動物と超人との過渡が人間だということですよ。この発想には進化論の影響があります。進化論だと進化すると種が変化しますね、人間も進化すると人間を超えるのだから超人になるのです。神ではありませんよ、神は欧米では超越神だから自然の動植物と同様の存在ではありません、それにニーチェは無神論ですからね。それで人間は己の限界を超えていくところに偉大さがあるので、人間は動物と超人との間に掛けられた橋梁ですよ。

しかし人間は人間を超えられない限界内の存在です。だからまだ超人ではなく、人間なのです。この橋梁は狭くて危険です、むしろ綱ですね、だからその過渡である人間は綱渡りなのです。〈進むに危うく、退くに危うい、立ち止まっているとなお危うい〉のです。だったらどうせ危ういのですから、開き直って、危ういのに挑戦して己を超えようとすることに最大の意義を認めることが大切なのです。つまり危険を賭して生きたことに誇りを持つことですね。

どんな仕事でも真剣に取り組んでみると、様々な困難や障害が押し寄せてきます。利害対立や敵意にも取り囲まれ、命がけのところまで行くことだってあるのです。だから没落を恐れては何もできません、むしろ開き直って、己の限界を乗り越えるため

に精一杯頑張った結果なら、没落しても本望だと思ふべきだと思います。それをニーチェは「没落を願う」と表現したのです。

でもニーチェにはそう表現するあるわけがあったのです。それは若い頃のイタリア旅行が原因らしいのですが、イタリアで不治の病の原因をもらってしまったのです。彼は長く生きられません。大学の仕事も続けられなくなりました。果たして何の病気でしょう？」榊は一人づつ訊ねてみたが、解答がない。

「それはね、南国の暖かい国で開放的になるので、梅毒という伝染性の性病に罹っていたと言われています。自分の寿命見限ったら、神に救いを求めたりしただけで彼はそうしなかったのです。彼の父はスイスでキリスト教会の牧師でした。それでかえって神が信じられなかったのでしょう。だって日頃散々私利私欲で行動し、神への愛や、隣人への愛のかけらもない行動をしている、日曜日には神に懺悔し、二つの愛に生きることが誓うのです。でもあくる日からはまた罪深い生活に戻ります。神を本当に信じているのなら、こんな神への背信は到底恐ろしくてできないはずですね。」

『神は死んだ、神を殺したのは人間である』とニーチェは記しました。懺悔と背信の繰り返しで神はとくに死んでいるのです。それならどうして神に執着するのか、どうして自分が殺害した神に救いを求めようとするのか、むしろ開き直って、神なき世界を新しい価値を創造して生きるべきではないかというのです。」

三宮春彦が質問した。「欧米人はキリスト教に基づく価値観が普遍的な価値観だと思ひ込んでいて、それを世界中に広げようとした。そこで異文化と接して、キリスト教的価値観を相対化せざるをえなくなってくるのでしょうか。そこでそれぞれの文化にはそれぞれ固有の価値観があつて、共通の価値尺度などないということになるのでしょうか。これが価値相対主義ですね。ただそこから神の死までいくところがニーチェの過激なところですね。」

「無神論は18世紀からフランス啓蒙思想の中で盛んになってきます。それと既成の価値観への反発を結合して、神の死を普遍的価値の崩壊という議論に発展させたのです」と榊は応答した。

「宗教や文化が違ふと価値観が違ふということはあると思いますが、そういう違いを超えて価値観は共通する面もあるのじゃないでしょうか？たとえば人にしてほしくないことを人にしてはならないということは共通していますよね」と田辺麗が質問した。

「全くその通りです」と榊は頷いた。「でもね、人は皆同じだということと、人は一人づつ違ふということは、どちらもある意味で正しいのだけれど、その時代の問題意識で、共通性を強調した時代と、違いを強く打ち出したい時代があります。」

ニーチェは、キリスト教や社会主義が平等を強く打ち出し、個性を伸ばして己の可能性の限界に挑戦しようとするのを、普遍的価値観で道徳的に非難しているように感じたのでしょうか。それで普遍的価値観など古代ギリシア人のデッチ上げだという議

論を展開したのです。」

上村陽一が発言した。陽一も智子も榊先生の現代哲学の講演があるというので、その時だけ参加していた。「古代ギリシアといえどストア派では神も人も同じ理性を共有していて、それは自然法則として自然の中にも貫徹していると考えていたのでしょうか。だから共通の理性なので同じ価値観になるということですね。」

「ストア派から自然法思想が始まります。それに基づいて共通の理性で判断したら、人間である限りこういう権利が認められて当然だというのが自然権ということになります。こういう古代の自然法思想・自然権思想を社会契約論では継承しているので、近代的な人権思想ができたのです」と榊は説明した。

智子が質問した。「ニーチェは普遍妥当的価値を否定したのですから、自然法思想や自然権思想も否定したということですね。とすると人権意識が希薄になるでしょうね。」

榊は頷いて言った。「そうなんです、そこが問題点ですね。理性を魂みたいな形で実体化してみんなが同じ理性を持つているとすると、人格の平等や尊厳を説きやすいですね。ニーチェのようにそれを幻想だとしてしまうと、人格の平等や生まれつきの権利も成り立たなくなってしまう。力による支配が正当化されてしまいます。それで強者が弱者を支配するのは当然で、弱者は弱者らしく強者の支配を支えればよいことになります。その代り強者は己の力を存分に発揮して、素晴らしい文化を栄えさせ、弱者を守り、

幸福をもたらせばよいということですね。」

「女性は超人のために子供を生み、農民は超人に食糧を提供すればいい、ところがルサンチマンつまり弱者の妬みからくる憎悪の感情が強者の支配を覆し、強い者がより強くなろうとすること、美しい者がより美しくなろうとすることに反発し、己の限界を超えてより高まろうとする者の足を引っ張ろうとするわけですね。そのために平等の理念や隣人愛の道徳などが使われて、縛り付けようとするのでしよう。」と智子が続けた。

孫明道が発言した。「中国や日本では近代キリスト教はむしろ大家族制度のしがらみから直接神にむすびつくことで、個人の解放をもたらしただけではないでしょうか。欧米では隣人愛が己の限界を超えていこうとするのに対して束縛になったということですね。」

「家族のため、親族のため、友人のため、世間のためなどと考えていますと、自分が人間としての限界を超えていくという本来の使命が果たせなくなりますし、果たせないことの格好の言い訳になります。中国では親孝行第一だから、『年老いた母に孝養を尽くさないといけないので』といって命がけの仕事を回避するわけですね。前線から逃亡した兵士を親孝行が理由だと分かって、孔子は表彰したそうです。」

みんなも学問や仕事に打ち込み、自分の限界に挑戦しようとしたら、家族のためとか、だれだれのためとかという雑念やいいわ

けは一切捨てて、己の可能性の限界を打破して超人を目指すよう
なつもりで一心不乱に頑張ったら、あるいはものになるかもしれ
ません。そういう意味ではニーチェの超人論は元氣のもとになり
ますね」と榊は推奨した。

三宮が質問した。「能動的ニヒリズムという言葉をニーチェはつ
かっていますね、ニヒリズムは虚無主義なので能動的じゃないと
思うのですがどういうことですか？」

うんうんと頷きながら榊は応答した。「普遍的価値がなくな
ってしまいますと、既成の価値には普遍的な根拠がないというこ
とです。誰でも何時でも何処でも通用するものじゃない。だから
もう価値なんて何も信用できないとペシミズムに陥り、モラル
つまり士気がなくなってしまうですね。そういうペシミズムの時
代が到来するということです。そこでは末人たちが肌を寄せ合い温
めあって小さな幸せしか求めないわけですね。それでは駄目だと
ニーチェは考えて、既成の価値をすべて否定したら、次は新しい
価値の表を自分でつくって、それを広げていけばいいというので
す。価値否定から価値転換、新しい価値の創造ですね。そうして
新しい時代や文化を引っ張っていきましょうということです。それが能
動的ニヒリズムということです。」

三宮はさらに質問した。「そんな自分勝手な価値を作ってもだれ
もついてこないじゃないですか？」

孫が発言した。「自分勝手かどうか、それは自分でその価値に基

づく文化を創造してみんなに提示し、それを大いに宣伝したりし
て、みんなに受容してもらえばいいわけです。うまくいく場合も
あれば、大いにインパクトがあつてブームになるかもしれない、
何もやらないで、最初からあきらめていたら何もできずに一生は
あつという間に過ぎて、すっかり白髪になってしまいます。」

「孫君、こつちに振ってきたな、ハ、ハ、ハ、」と榊は笑ったら、
みんな爆笑した。

孫は慌てて否定した。「とんでもない、それは考えすぎです。榊
先生はたくさん素晴らしい著作を残されていて、それに感銘して
こうして上海からやってきたのですから」と言い訳した。

「いや、ほんとうにあつという間に歳をとりましたね。」榊は、
ため息をつきながら言った。「中学三年生の時に一九六〇年の日米
安保条約をめぐって安保闘争がありました、中学生だから行動
できなかった。高校生は生徒自治会が学校ぐるみでデモをやった
そうです。それで七十年の改定の時を目指して大いに頑張ろうと
思っていたのですが、結局、何もできなかった。それからあつと
いう間に四十年以上すぎてしまいましたね。その間に人間の限界
に挑戦するようなことが果たしてできたか疑問です。それでいい
世の中になったのかというと、青年が未来に夢を持てるような社
会になっていないし、老人が安心できるような社会にもなってい
ない、これというの自分がいっしょにできなかったからだとし訳
なく思っています。」と榊は反省を述べた。

孫が立ち上がった、「先生の語ってきた思想は決して先生一人のできるようなことではないので、先生の著作で学んだ私たちがそれをどう実践し、実現するかということでもあるのです。私たちがそれを実践し、実現できなければ、先生のお仕事も埋もれてしまうということでしょう。ニーチェだって生きている間はシカトされていたことでしょう。ところでもう時間がないので、死後の世界を否定しているはずのニーチェがどうして〈永劫回帰〉を唱えたのかを説明していただいてまとめてください。」

「ニーチェの〈永劫回帰〉という発想は、よく理解できませんね。永劫回帰は輪廻転生とどう違うのかよく質問されます。」と答えて、榊はしばらく考えてから話し始めた。「永劫回帰で回帰する主体は時です。円環的に時が流れて、同じ時刻になるということです。それで同じことの繰り返しになるということです。それに対して輪廻転生の場合は、その主体は不滅の靈魂が輪廻転生するのです。」

「永劫回帰はギリシア的な時間観念で時というのは大きな周期で円環をなしていて元の時刻に戻るということは、結局死んでもまたよみがえることであって、輪廻転生と同じように感じますね、だってニーチェも同じ人生を無限に繰り返すことに耐えられる運命愛に生きてこそ超人の資格があるというでしょう。」と三宮は迫った。

「ええ、そこが納得できませんね。『ツァラトゥストラの序説』の中で、綱渡り人がピエロのような姿の男に綱渡りしている最中

に頭上を飛び越されて墜落する話があります。

ツァラトゥストラの足許に落ちてきた綱渡り人は『助けてくれ、悪魔が俺を地獄に引いていく』と懇願しますが、ツァラトゥストラは『悪魔もいないし地獄もない、汝の肉体が滅びる前に汝の精神は滅びるのだ。汝は危険を職業にして生きたから、それだけでも誇りに思え』と語ります。つまりニーチェは霊を肉体とは別の実体とは認めていません。死後の世界や異界などは信じていないわけです。そんなものに期待を寄せてはだめで、一度きりの有限な人生をいかに燃えつくして生き抜くか、そこで自己の可能性の限界にいかにかに挑戦するかが、人間の尊厳なんだということなのです。

神の存在を否定しますと、神の意志によって宇宙全体の運動が影響されないの、存在の全体が機械的必然性に支配されるということですね。それで存在全体が巨大な関数だとすると、同じことの繰り返しになるはずだということです。

ただ人間が自由意思をもっているの、それで永劫回帰にならないはずだともいえますが、人間の意志というのはそれ自身、環境に規定されるから、自由に考えているというのは主観的なとらえ方で、何をどう感じ、どう考えるかは機械的必然的に決まっているのだということです。この発想はスピノザから来ていますね。ただニーチェは叙事詩の中で展開しているので、永劫回帰の論理は明確とは言えません。」

問 ニーチェの思想の意義を自分自身の生き方の問題と結びつけて論じなさい。

13、ヤスパース、限界状況と包括者

絶対の他者なる神も吾なりと包括者説くそは痴人か

8月3日水曜日夜、その日孫明道は、鄧玉泉と一緒に帰宅した。

玉泉は明道と一緒にいられるのを楽しんでいるようだが、明道は

やはり警戒心が解けないので、心から楽しむ気にはなれなかった。ただやはり若者だから、玉泉という若い娘と一緒にいればどうしても精神的よりも先に肉体的に惹かれるものを感じてしまうそれが相手は領事館員の娘である。付け込まれては大変だと自制しなければならぬ。これは困ったことになったと思いながら一緒に帰宅した。

さてこの物語、サスペンスにするのなら、このあたりで何かどでかい事件が勃発しないといけないところだ。その事件に孫明道が巻き込まれ、陽一君や智子ちゃんが冒険を開始するという具合にいかないものか。

J R野田駅前の行きつけの中華料理屋で二人は一緒に夕食を食べた。玉泉は明道に自分の部屋に来てケーキとお茶にしようと誘ったが、明道は自分が自制が効かなくなるのを恐れたので、もう満腹だし、勉強に追われていてもそんな気になれないと断った。

その夜、夜中の二時ごろに隣の玉泉の部屋でドタバタと物音がした。でもそれだけだったので気にはなつたが、放置して明道は三時ごろ就寝した。4日朝7時には目を覚ました。夜中の物音が気になっていたのも、隣の様子をうかがったがなんと、ドアが少し開いていたのである。そして玉泉の名を呼んだが返事がない。中に入ってみると部屋が荒らされていて、玉泉は失踪していた。

早速、管理人の法燈に知らせ、警察を呼んでもらった。ゆっくり

りしていると事情を聴かれて学校に行けなくなると思い、法燈に知っていることは言って、学校へ直行した。学校で太極拳をしていると警察が事情聴取にきた。結局、二時間ほど警察で事情聴取された。

8月4日木曜日午後3時からの榊先生の現代哲学講座は予定通り開講された。

「なんと鄧玉泉さんが失踪されたというか拉致されたようでありつくりしています。まあ無事を祈るしかありません。今日は実存主義の続き、ヤスパース（二八八三―一九六九年）とハイデッガー（一八八九―一九七六年）ですね。

本当に突然どんな事件に巻き込まれるかもしれませんね。突然誰かに寝ているところを踏み込まれ、声も上げる間もなく、気絶させられたか何かで拉致されたのでしょうか。一寸先は闇といつか、次の瞬間、何が起こるかわかりません。予め自分の本質など決めていても、事件や事故に巻き込まれたら本質なんか吹っ飛びますね。まさしく、現に今ここにある実存です。

ヤスパースは精神科の医者だったのです。精神病理学を研究していたようです。それで『現代の精神的状況』で現代は機械と大衆の時代であり、精神分裂病（統合失調症）の時代であるとしています。大工場による大量生産体制の下で、個性や主体性を喪失した大衆が、広告によって操作され、同じような品物を買わされるわけです。しかもいつまでも同じ商品なら売れ行きが悪くなつ

ていくので、流行によって好みが変わり、新しい商品を買うようになります。ですから自我の統一性がなくなり、いわゆる〈精神分裂病〉になるのです。

また独占資本主義が発達してきますと、資本主義も世界的な規模で市場の奪い合いが起こり、植民地争奪の戦争がおこります。恐慌も世界的な規模になり、階級矛盾も激しくなつて、革命や反革命の動きも起こります。イデオロギー対立も激化して、どちらが正しいかわからなくなつたりして、ここでも精神分裂になりかねませんね。

とはいえ、平和なときには流行に合わせて、惰性的に生きていくと楽なのですが、恐慌や戦争がありますね。革命とかファシズムの台頭とかが起こります。そうなるといやでも限界状況に立ち向かわなくてはならなくなります。

限界状況というのは人間である限り、だれもが直面せざるえない状況です。しかも限界状況を克服したり、乗り越えたりはできないのです。それは乗り越え不能な巨大な壁でして、それと格闘して、結局は力尽きて斃れるしかありません。さてそれはなんでしょう。植山奈々さん」とまた居眠りしかかっていた植山に尋ねた。

「それはもちろん眠気です。これにはとてもかかないません」と植山は明るく言った。「そのほかにもありますよ、空腹ですね、これにも結局勝てません。それからいい男に言い寄られたら、限界

状況です」と照れ笑いした。これには全員大爆笑で盛り上がった。

「惜しい、なかなかウィットの効いた解答でしたね。ヤスパースの考えでは〈死、苦しみ、罪責、争い〉の四つです」と榊は言った。植山は「惜しくないじゃん」と反応した。

孫は言った。「仏教の生まれる苦しみ、老いる苦しみ、病む苦しみ、死ぬ苦しみというのと似てますね。」榊は「もちろんその影響は受けているでしょうね」と応えた。

「ですから限界状況を乗り越えなさいとか、克服しなければいけないと言っているのではないですよ。」榊は念を押した。「よく誤解する人がいるので注意してください。乗り越え不能なのです。それで、乗り越えられないけれど、真摯に立ち向かわなければならぬと言っているのです。人生は常に死に付きまとわれ、苦しみの連続であり、生きている限り罪を犯さざるを得ないし、争いに巻き込まれます。それは避けて通れないのです。」

「あの私は今まで犯罪を犯したことはないですよ。」と植山が言った。三宮が立ち上って言った。「それは法律上のことでしょう。ヤスパースの言うのはもつと広い意味です。」

『バイブル』では人の悪口を言ったりするのも罪だし、女性を見て興奮したら、心の中で姦淫しているので罪だと言います。宇佐八幡宮では魚を放す放生会というのをしますが、あれは漁師は魚を獲って殺生という罪を犯しているので、年に一度は魚を逃が

すのです。殺生は罪なのだけれど、そうしないと生きてゆけない、せめて年に一度は罪滅ぼしに魚を逃がしてやろうということです、だから植山さんもいっぱい罪を犯していますよ。

インドのジャイナ教徒は殺生の罪を少しでも減らそうと、口にマスクをしてできるだけ微生物を飲み込まないようにし、箒で掃きながら歩くのです。虫などを踏み殺さないようにね」と解説した。

植山は驚いたふりをして「わあー私絶対に地獄に落ちるわ」と叫んだ。

「でも限界状況のことばかり考えていたら神経が持ちませんね、それで気晴らしに娯楽や流行に身を任せて、忘れようとしています。しかし忘れてしまったら、本当に生きていくことはできません。限界状況を意識し、それと立ち向かってこそ、充実した人生を送ることができのです。たとえば死という有限性を意識するから、今日を大切に生きることができ、自分を輝かせることができるということですよ。」

「なるほど、ではヤスパースは神を信じているようですが、それはどういう意味をもつのですか？」田辺麗が訊ねた。

「限界状況から逃げているということは自分の命や使命や運命から逃げていることですね。それは結局自分を運命づけている神から離れているということですね。逆に限界状況に真摯に立ち向

かっているということは、神の方を向いているということになるでしょう。限界状況の壁の向こうから超越者である神の存在を感じる事ができるということです。」

「キリスト教の神は超越者だから目には見えないし、感覚では感じられないのではないのですか？」と田辺は疑問を投げかけた。

「そうですが、神自身は姿を現しませんが、限界状況との格闘を通して、我々は神の暗号を見れるようになるのです。本当に真剣に農作業に打ち込んでいたら、土の香りや空気の匂いすら素晴らしいものに感じられますし、葉についた雨のしずくがキラリと輝くと生きていることがなんと素晴らしいことかと感動することができます。それらはみんな神そのものではないけれど、そこから神を感じられる神の暗号だということです。」

淀川雅巳が質問した。「あの超越者は神のことですね。包括者は神のことではないのですか？」

「それはなかなか深い質問ですね。実存主義の理論の中で、一番難解なのが包括者でしょう。これは主観・客観の合一論の実存主義版ですね。彼は見るものと見られるものの対立を包括し、全意識や全存在を包み込む「包括者」を捉えようとしていました。

存在そのものである包括者は世界・超越者であり、われわれがそれである包括者は現存在・意識一般・精神・実存です。

マルクスにも「意識は意識された存在である」という言葉がありますが、意識一般は感覚器官の作用であると共に意識対象が感覚に自己を対象化している営みでもあります。その意味で見ると見られるものは包括されて、包括者の両面として把握されるのです。

「現に・今・ここに有る」のが全ての意識や存在の有り方です。その他の有り方は「現に・今・ここに有る」の意識の反省や推論の中にしかありません。その意味で現存在は包括者です。

また意識は常に統合された意識として、その時代や社会に特有の精神としての有り方を示します。あらゆる意識や存在はその時代の精神的な課題を背負った、精神的な存在なのです。その意味で精神も包括者です。

しかし意識や存在が精神を帯びるのは、限界状況に真摯に立ち向かっている実存の意識や存在である限りですから、実存こそが包括者なのです。

とはいえヘーゲルの『精神の現象学』にあります、『意識は何ものかについての意識』なのです。つまり意識は常に事象として現れ、〈世界〉の姿をとって現れます。つまり世界は全ての意識や存在を包括しています。そして真に実存する意識にとつては、世界は精神であると共に、超越者（＝神）が示されている暗号だとヤスパースは捉えています。人間にとっての超越者はそういう形でしか存在しません。

つまり限界状況に立ち向かう実存の苦悩と救済として超越者を感得することが、それ自体最も深い実存なのです。」

上村陽一が質問した。「榊先生のネオヒューマニズムは包括的ヒューマニズムという言い方もされますが、その場合の包括とこの包括者とは関連しているのですか？」

「それは大いに関係しているでしょう。私はヤスパースの『歴史の起源と目標』という歴史哲学の本を研究しまして、歴史を包括的に捉える観点からフランシス・フクヤマの『歴史の終わり』を批判する『クライシス・オブ・ヒストリー（歴史の危機）』という著作を出版したことがあります。だからヤスパースの影響はおおいにあるでしょう。つまり包括者の諸相というのは、世界であったり神であったり、精神、意識一般、現存在、実存とか様々な姿をとりますが、それらは決して別々のものではありません。現存在である人間なのです。だから社会的諸事物や環境的自然も含めて人間というネオヒューマニズムは包括的ヒューマニズムとも言えるわけです。」

淀川雅巳が起ち上がった。「すみません、レベルが高すぎるのか、さっぱり分かりません。だって神は超越神で自然や人間と断絶している筈であるのに、包括者で神も人間に包括されているというお話でしょう。全く矛盾しているというか、支離滅裂ですね」ちよつと悔しそうな、腹立たしいというような口調で、抗議するように言った。

「それは正直な感想だと思いますね。神を絶対の他者だとか、超

越者だと認識するのは、そのように神から断絶した存在として人間を認識するためですね。それは神と対極に人間存在を無力化すること、神を絶対化しているわけです。それで絶対的になった神は全知全能なので、人間を救うことができます。だから全くの他者として規定するのも、人間存在を宗教的に救済するためなのです。神だって人間の意識としてしか人間には存在していないわけです。物というのも人間の他者ですが、しかし物を規定するのは大小にしても形にしても色や音や匂いや様々な感覚的意識でしかなく、物の内容も意識なのです。つまり意識としてはそれが主体の状態だと言えます。

つまり淀川君は、自分の事を自分の体とそこに宿る人格でしかないと思っているかもしれないけれど、今の淀川君はそれだけでは規定できません。なぜなら、今君は榊周次という哲学者の話を聴きながら疑問で頭がパンクしそうだとか悩んでいるところに特色があるわけですね。だから私がしゃべっている言葉や榊周次という存在を、君から差し引くことはできないのです。

もちろん自分を身体とそこに宿る人格だという捉え方での限りは、世界も、榊周次もその言葉も淀川君ではないのですが、実存的に今現にここにあるという現存在を捉えようとしたら、この足元の石ころが自分の運命だったり、誰かの言葉が人生を決めます。だから我と汝、人間と神、人間と物、男と女とか断絶している全くの他者が、実は自分自身を構成しているということにも気づかないといけないのです。」

「自分ではないものを自分だと思えというのは、随分乱暴な話ではないのですか？」淀川は悔しそうに言った。まるで泣き出しそうだった。榊はそこまで純粋に苦悩している姿に感動した。

「淀川君、この問題が一番納得いかないですよ。私もそうでした。何年も何十年も、おそらく死ぬまでこの疑問は解けないし、苦しむ問題です。でも自分を身体とそこに宿る人格に固執していたら、やがてそういう身体的自己というのは有限ですから死んだらおしまいですね。だから世界や他者や事物などに自分を見出し、おおいなる命に還るように覚っておかなくてはならないということなのです。その際、意識を自分だと考えたなら、意識は意識された事物や世界として展開するので、そこに自分を見出すこともできるのです。」

孫明道も共感した。「淀川君と同じ悩みや疑問はありますね。私も我が強いので、自分以外の存在に自分を見出すのは、矛盾していて、納得できないことがよくあります。でも生きていこうとすれば、食べなければならぬ、その時その命が自分の命なので、食えることが生きることであり、世界と一つに成り、自分が世界に成ることだということですね。勉強だつてそれで、食べて自分の消化し、自分の身につけて、世界を獲得していくことだと考えています。」

淀川は何故か嗚咽してしまった。彼は中学まではいつもトップの成績だったが、大手門高校では屈辱の欠点を重ねていた、でも自尊心が強く、いつかは追いつけると思っていたのだが、頭が固

いのか、理窟が錯綜してくるとイライラして勉強が進まなくなってしまうのである。それで哲学で矛盾したことを言われたので苛立ったのだった。孫の説明でやっと何か掴めそうな気がした。それで救われた気がして、幼児帰りのようにわけもなく泣き出したのだ。

榊は、孫には宗教的カリスマがあるのかもしれないと感じた。主・客合一というのは、ある意味覚りのなところがある。だから理窟的に説明しても暖簾に腕押しという感じになる、なかなか通じないものなのだ。孫の説明で、淀川にブレイクスルーが起こったのかもしれない。

問 ヤスパースの哲学を〈限界状況〉と〈包括者〉をキーワードに特色をまとめなさい。

14、ハイデッガー、死の先駆的決意性

限りある命ならこそ今日の日の葉の一滴が燦ときらめく

8月4日木曜日午後4時のことである。榊が講義中の教室に中国の領事館員と名乗る者が血相を変えて入ってきて、中国語でまくしたてた。「孫明君、君に事情を聴きたいので、今すぐ中国領事館に一緒に行ってほしい。鄧玉泉失踪について日本の警察に話したことを話してほしい」と言った。そしてこうも言った。「実は私は玉泉の父で鄧玉林だが、玉泉の手記を調べていると、君のことがたくさん書いてあったのだ、だから一応事情を聞かせてほしい。」と説明した。こうなれば孫としては中国の公民として領事館の調べを受けざるを得ない。

このやりとりは中国語だったので、みんなには何を言っているのか分からなかった。孫は説明した。「彼は玉泉さんのお父さんだ

そうです。中国領事館でも鄧玉泉失踪について詳しく話をしなければならぬようなので、今から行ってきます。あと1時間ありますから、このままハイデッガーまでやってください。ボイスレコーダーで聴かせてもらいます。」

「玉泉さんのお父さんですか、この度は大変ですね、ご心配でしよう、ご無事を祈っています。孫君えらい事件に巻き込まれたね。君に何か疑いとかかかっているのじゃないだろうね？」と榊は念のため確かめた。

「そりやあないでしょう。今日中には帰してもらえとおもいますよ」と言った。孫はここでジタバタしても仕方ないと思ったので、おとなしくついていった。

榊はこれがとんでもない謀略とは気づかなかったので、心配しながらもハイデッガーに入った。

「ではハイデッガーに入ります。彼はヤスパースと同じドイツ人です。ただヤスパースは有神論ですが、ハイデッガーは無神論ということです。でも詳しく観てみますと、ハイデッガーの無神論というのも存在の論理を追及しますので、存在というのが実は神に近いのではないかという気がしないでもないのです。」

ハイデッガーの代表作は『存在と時間』です。彼は、フッサールの「現象学」の影響を受け、現に今ここにある「現存在」として先ず人間を捉えます。人間以外の存在でも現に今ここにあるわけ

ですが、そのことを意識し、問題にするわけではありません。人間だけが現に今ここにあることを対象化し、自らの有り方を常に問い返し、主体的に決断するわけです。

現存在はまず「世界・内・存在 (In - der - Welt - Sein)」という在り方をしています。ここに先ず教室という世界があつて、そこにドアを開けて、外から中に入つて来て、それから世界の内に存在するというのはありません。われわれが存在する仕方が「世界・内・存在」だということです。例えば教室内、道路上、家庭内、職場内、公園内というような世界内という有り方、つまり常に世界と共に世界内でのつながりの中で存在するという有り方をしてゐるのです。

世界内に存在する限り、あらゆる物も人も互いに「用在」として役割をこなす存在です。そしてその連関で互いに配慮しあいながら生きています。役割を何とかこなしていればよく、流行に合わせ、他人と協調していればよいわけです。しかしそれでは主体性を喪失した世人(das Mann)としての生き方に頹落してしまいます。

そこで「時間」意識が重要な役目を担います。人間は有限者であり、死すべき運命にあります。死から逃避しようとしても、死は必ずやって来ます。むしろ死を予め決意しておく「死の先駆的決意性」によつて自己の真の存在に目覚めることが大切なのです。

ところでアポロン神殿の標語は何と書いてありましたか？これ

は二年生ならもう倫理で習ったかな？」

三宮春彦が答えた「(汝自身を知れ)ですね。ソクラテスが自然への問いから人間への問いに移ったきっかけですね。」

「そうです。(汝自身を知れ)は不死なる神から死すべきモイラ(運命)の人間に投げ掛けられた言葉ですから、人間よ！自らの人生の有限性を自覚し、一回限りのかけがえのない人生を、自らの主体性で決断をもつて選び取りなさいと諭しているのです。

死というものがなければ、また人生が一回きりでなければ、人間はなにも無理に仕事をしたり、勉強したりはしないでしょう。どうせ不死なのなら、食べたりすることも面倒くさいに違いありません。価値を求め、美を追求し、家族を大切に思うのも、fall in loveして命を燃やすのも、一回限りで、有限な人生であればこそ、そこに意義を見出し、納得したくなるからです。つまり真に生きるとは、死を予め主体的に決断して始めて可能になるのです。」

「私たちはまだ若いので、死をあまり意識していませんから、それが生きていく動機になつていると言われてもピンときませんが」と植山菜々が疑問を投げかけた。

「個人差はあるかもしれませんがね。私なんかは小学生のころから死を意識して震えが止まらなくなることがありました。だれでも遅かれ早かれ死は来るということは知っています。それに植山さんは一年生ですから、中学校の三年間というのはあつという間

に過ぎたでしょう。その時はもう帰ってきません。過去はもうなくなっている、その意味では死んでいるのです。」と榊は言った。

植山は言い返した。「でも思い出がいっぱい残っていますよ。」

榊は応えた。「思い出すのは現在です。過去の思い出も現在の意識ではないのです。しかもほんの断片でほとんどは消去されていますね。若い人は未来はたっぷりあると思っっているでしょうが、そんなものすぐに過ぎ去っていきます。だって私は高校生の頃が充実していたので、まるで昨日のことのように思い出すことがあります。つまりその間はあつという間に過ぎたということですね。たくさんいろんなことがあつたけれど、過ぎてしまえば一瞬のようなものですよ。」

上村陽一が発言した。「僕も死については幼いころから恐怖を感じていまして、医学部に進学したいと思ったのも、生命科学を研究して寿命を延ばそうと考えたからです。ただ死について考えると恐ろしくて精神が崩壊しそうになるので、考えないように無意識に抑圧しているといわれています。」

死がどれだけ生きることについての動機になっているのか、計算するのは無理があります。もっと直接的な動機は、興味、関心とか利害打算とかがあって、人から認められたいとかいろいろあげられるかもしれません。でもそれらも、もし死がなかったら成り立つだろうかと考えますと、どうでしょう。

例えばラーメンが大好きという場合、ラーメンの味に惹かれていたけのように思いますが、そのように食べることに執着するというのは、そうしなければ生きていけないということが根底にあるわけですね。

勉強するのもいろいろな動機があるのですが、もしも死がなければ進学や就職をしなくても死にはしないということで、無理に頑張つて進学や就職するために勉強しようとはしないでしょうし、知的好奇心を抱いて学問に励むこともないでしょうね。まあ学問自体の喜びというのはあるのですが、それも死があるから生きているうちに学問なり何なり、自分の使命や生きがいというものに打ち込むわけです。死がなければ方程式を解けるようになるのに、何百年かかったっていいわけですね。結局方程式を解けるようにいつまでたつてもなりません。」

植山は首を傾げた。「そうとも言えるでしょうが、死ぬとわかっていれば、逆にどうせ死んだらおしまいでも何もなくなくなるのだから、何をやっても無意味だということになりませんか？」

智子が言った。「そうですね。そういうことも言えるので、ペシミズムつまり虚無主義がはびこるわけです。それも死を覚った結果ですね。どちらにしても死に向かつて生きている、それで何をなすべきかが問われるということでしょう。つまり時間は有限なので、その間に何かしなければ何もできなくなるのですから。」

榊は言った。「ただ存在しているだけで、死を意識することがな

ければ、存在の意味を問うことはないだろうというのです。人間だけが死を強く意識しますので、人間はどうせ滅び去ってしまうのにどうして、生じたのか、何のために生きればいいのかを自己に問いかけるわけですね。現に今ここにあるということの意味を問う現存在として人間をハイデッガーは捉えます。

彼は〈存在者と存在の区別〉にこだわります。現存在である人間は単なる存在者ではなく、存在の開示なのです。〈死の先駆的決意性〉を契機にした歴史的運命の自覚が存在の明るみに立つ実存をもたらすのです。

全てのものは存在者であるので、今まで哲学は存在者について語ってきただけだった、とハイデガーは指摘しています。しかし全てはパンタ・レイ(万物は流転する)、生成したものは必ず滅び去るのです。〈何処より来たりて、何処に去るのか〉〈何故、はかなく滅び去るしかないのに、生じなければならぬのか〉これらの根源的な問いに現存在である人間は苦悩せざるを得ません。

この実存の苦悩の中で自らの存在の意味を求めて、人間は歴史的運命へと自己を投げ出していきます。二十世紀は戦争と革命の時代です。〈第三帝国の栄光〉を掲げたナチスに共鳴して、その為に自らの生命を捧げることこそが存在の意味を明らかにする行為だとハイデガーは決断して、ナチスに入党していたのです。実存とは語源的に〈存在の明るみに立つ〉という意味であり、それは存在者と存在を区別して、現存在の存在を開明することだとしています。」

植山も少しイラついてきた。「あのね、さっぱり分かりません。存在者と存在が違うということはどういうことか、それがどういう意味があるのかですね。存在者の存在の意味を問うというのはどうして自分は生きているのか、生きているということにどういう意味があるかを考えることですか？

植山菜々という存在者について考えるということは、植山菜々という個性がどんな関係や行動をすればかっこいいとか、楽しいとか、うまくやれるとかか考えることだけど、存在を考えるとなると、そういう具体性は抜きに、生きるこの実感を求めるということですか？でも戦争や革命という具体的なものにつっこんでいく、あえて生きる意味を求めて死ぬということでしょう。矛盾していて全く分かりません。」

三宮春彦が立ち上がった。「植山さん、分からない、分からないと言ってる割には分かっているように見えますね。実存主義は自分分はだれか、どんな存在者かを問う前に、そういう規定されたあり方の前に、現に今ここにあること、つまり生^{なま}きのあることの意味を問うわけですね。ところがじゃあ自分の生の生きている意味はなんだろうと分析する際に、また具体的な存在者としての考察に入ってしまうと、存在者しかわからない、存在の意味は出てこない、これまでの哲学は結局、本質を追及したり、社会関係から存在を規定しようとしたり、存在者を扱ってきただけじゃないかというわけです。」

「そしたら生の存在というのは全く規定も関係も関係ないわけだから、哲学しようがないのではないですか？」と植山はさえぎって言った。

「だから本質や関係からだけでは解けない存在の意味は、その有限性の自覚によって見えてくるということではないでしょうか。つまり有限な命をささげつくす気持ちで何かに打ち込むことによって、達成感や充実感、命の実感が生まれるということです。つまり死はある意味平等にすべての人に訪れる、だから死をどう受け止め、死に向かって生きたかということで、存在者としての具体性を離れ、存在の明るみに立つのではないのでしょうか？」と三宮は語った。

「そんな死ぬために生きているみたいなのは嫌ですよ、死ななために生きているのですから」と植山は反論した。三宮は落ち着いて言った。「もちろん死ぬためではなく、死を意識しているから、命が大切になり、自分の存在がいとおしくなるということですよ。それで何をするにしても有限な命を削ってすることであり、命を物や仕事に結晶することになるのです。死を覚悟しないで、いつまでも生きているつもりでやってもその人が作り出した物ややり遂げた仕事には命の輝きがみられないということですよ。」

「じゃあどうしてハイデッガーは、そんなに大切な命を戦争や革命や第三帝国の栄光なんかには捧げてしまうのですか？」と植山は切り返した。

「世界一おいしいお好み焼きを焼くお好み焼き屋さんは、お好み焼くのが一番輝いているし、一番大切なことですね。主婦だったら家族にだれにも負けないおふくろの味の食事を作り、愛情いっぱい子供を育てる、それに自分の命を燃やせばいいわけです。植山さんの言いたいのはそういうことでしょう」と三宮は確かめた。植山が頷いたので、続けた。「それはその通りなのだけれど、世の中が危機になって、命がけで革命に立ち上がらなくてはならない、戦争しか国を救う道はないなんてなったら、その時には、自分の好きなことばかりやっていられません。元々自分がお好みを焼いたり、家事をしたり、勉強したりできるのも、社会や国家のおかげであり、自分ひとりで生きているのではないから、その時代の課題をみんなと共有し、その解決のために命がけで戦うのも気高いことなのです。」

「だってナチスはユダヤ人を数百万人も殺したし、侵略戦争をしたわけでしょう。それを気高いだなんて、おかしいと思いませんか？」

「一般論と具体論には矛盾がつきものだ」と榊が助け舟を出した。「ハイデッガーはナチスの第三帝国の建設というのが、素晴らしい世界を生み出す大事業として、命がけでみんなを取り組む価値があると確信したのでしょう。命が有限だということは生まれてくる時代や地域や民族も限られるということですから、自分の命はその時代の歴史的使命を果たす形でしか輝かすことはできないわけです。もちろんそれはナチスに反対して自由や民主主義の為に命がけ戦うことでもいいわけですね。自分が正しいと確信し

たものに自分を投げ出すしかないのです。」

「そうすれば存在の明るみに立つことになるというのはどういうニュアンスなのですか？」と上村陽一は尋ねた。

「戦争や革命の時には命がけというのは切迫しているので、恐怖も感動も激烈です。平和な時でも自分の命を削って、全身全霊を捧げて仕事をしますと、自己の身体やそこに宿る人格としての自己への執着は捨て去って、存在に投げ出されているわけです。それは言い換えれば脱自状態つまりエクスタシーなのです。その時に生々しく生きていることの充実感が、官能的に実感できるということでしょう。君達でもスポーツなんかで夢中で体力の限界までやっている、そういう体験があるでしょう。もちろん学問に打ち込んでいても、乗りに乗った感じで、エクスタシーを感じることがあると思います。そうなるエクスタシーもひらめきやすいのです。〈嵌った〉ということです。」

三宮は首を傾げた。「先生、エクスタシーと言ったら、セックスの用語で〈イク〉というやつでしょう。」皆爆笑した。「実存主義というのはキルケゴールがいうような主体的決断の論理みたいに思っていました、エクスタシーを求める官能的なところもあるのですか？ちよつと信じられないなあ。先生は哲学をやっている、エクスタシーを感じられたことはあるのですか？」

「哲学的なインスピレーションがあったときなんか、やはりエクスタシー状態だったと思います。セックスの〈イク〉という

のとはだいぶ違います。とはいえ実存の境地にはエクスタシーが伴うというだけです。決してエクスタシーを得たかったら実存的に生きなさいということではありません」と榊は弁明した。

問 ハイデッガーの哲学を〈現存在〉、〈世界・内・存在〉、〈ダスマン〉、〈死の先駆的決意性〉、〈存在者と存在の区別〉などをキーワードに分かり易く説明しなさい。

15、孫明道はいずこへ

いずこへと連れ去られしか孫明道あなたなしではいられぬものを

本当は孫明道君のことが心配で、ハイデッガーの死の先駆的決意性の話どころではない読者もおられるだろう。榊周次は講義を終えてすぐに携帯に電話したが、携帯は電源切れという状態だった。何かあったかもしれないと胸騒ぎがして、地下鉄阿波座の近く靱本町にある中国総領事館を訪ねてみることにした。

三上学習会のメンバーは既に孫明道に対して、特別の感情を抱いていた。孫との出会いが自分の運命で、救われたような感情である。だから孫の身が危ういということで、泣き出す者もいた。それでみんな三十名ほどが自分の家に連絡した上で、榊について総領事館にいったのである。上村陽一と三輪智子もついていくと言ったが、榊はそれならJR野田駅近くの法燈館に二人が戻って

ないか確かめてきてくれるように頼んだ。

「大阪市大にこの秋から編入予定の鄧玉泉さんのお父さんの鄧玉林さんが大手門高校に来られまして、昨夜玉泉さんが何者かに拉致され失踪した事件について、事情聴取をするからとこちらに大手門高校生の孫明道君を連れて行かれたのですが、孫君の携帯に電話しても通じないものですから心配できたのですが？」榊は事情を話した。

「分かりました。しばらくお待ちください。」と無愛想に言っただけで、30分ほど経過した。「鄧玉泉さんのお父さん鄧玉林さんは、こちら勤務ではないですね、この四月から転勤になりまして、名古屋総領事館に勤務しています。早速名古屋に連絡取りましたがご本人が出られまして、大阪へは行っていないということなんです。ですから偽領事館員による拉致事件ということになると思います。早速大阪府警にも連絡いたしまして、捜査していただいています。もちろん孫明道君はこちらには見えていません。」と担当の李翔吉が応対した。

なんと、孫君が拉致されたということだ。いったい何が起こったのか、榊は驚いて尋ねた。「何か重要な動きでもあるのですか？」

李はこう言った。「次期の共産党主席と目されている崔一平さんが明日来日される予定なのです。それで日本の警察も中国領事館も神経をとがらせているところです」

榊は陰しい顔になった。「じゃあ崔一平さんを襲う計画がもれて、その一味と疑われた玉泉さんや知り合いの明道君を予防拘禁しているのじゃないですか、どこかに。」と詰め寄ったが、李翔吉は少しニヤリとして「そんな権限は領事館にはありませんよ。それに玉泉さんは領事館員の娘ですから、テロリストの一味のはずはないでしょう。中国の民主活動家はご存知かと思いますが、ビロード革命とか言って、非暴力主義でテロリズムは採用していません。私たちが心配しているのは、交通渋滞とか会談の会場確保とかそういうものですよ」と否定した。

「そうですか、それなら余計に心配です。チャイナマフィアが麻薬などの密貿易がらみで、玉泉さんをだれかと間違えて拉致したとか、ところで玉泉さんの方の消息は掴めたのですか？」と尋ねた。「いいえ、連絡が取れず、消息不明のままです」と応答した。「それならお父さんがどうして名古屋から駆け付けてこられないのですか？娘さんが誘拐されたというのに」と納得できないぞと榊は、何か聞き出そうと頑張った。

「それを私に聞かれても分かるはずはないでしょう。名古屋の方に犯人から要求をつきつけられているかもしれないじゃないですか？」と反発した。

「じゃあ犯人から何か要求が出ているわけですね」と確かめた。

李翔吉は首を振った。「それは分かりませんね、詳しいことは大阪府警にお聴きください。とにかくここには鄧玉泉も孫明道もき

ていません。お引き取りください。」

榊は何か言わなければと思い、「総領事館としては拉致された二人の生命を守るために全力で救出活動をしてくださいますね」と念を押した。

「もちろん全力で搜索しています。ふたりとも大切な中国公民ですから。」とお決まりの回答だった。榊は学習会のメンバーに明日も午前からいつも通り登校するようにいった、学習会をするか、何か救出運動のようなものができるかその時に考えようと言って、帰宅させた。

上村陽一と三輪智子は、王法燈の法燈館を訪ねた。警察や報道関係者で法燈館は騒然としていた。たったいま総領事館からの連絡で、孫明道まで拉致されているということで、警察や報道関係者が何倍にも増えていた。二人は学校から事情を調査してくるように言われたといって、法燈に会うことができた。彼も心配でイライラしている様子だった。

「本当に、二人の家族には申し訳ないです。私は孫君のお父さんとは親友でして、確かに預かったので安心してくれと言っていたのに、なんとお詫びしていいか、頓首、頓首です。」頓首とは死刑にしてくださいという、謝るときの常套句である。

「なにをおっしゃいますか、私たちも鄧玉泉さんのお父さんということで、つい信用してしまったのが間違いでした。本当は本

人かどうか確かめないといけなかったのです」と陽一は言った。

「孫君は大手門高校に来られたばかりなのに、一・二年生を学習会に組織して、画期的な学習方法で、落ちこぼれかけていた生徒たちを見事に立ち直らせるという奇跡をやつてのけていたところですよ。それが得体のしれない人たちに拉致されて行方不明だなんて、どうすればいいのですね。」と智子も途方に暮れていた。

「ええ、何か一生懸命歌の練習とかやっていましたね。あの子は本当に素晴らしい運動家としての素質があります。頭脳が天才的だというのなら、そういう人はざらとは言わなくても何人もいるでしょうが、彼は自分のことだけ考えるような人間じゃない、みんなを幸せにしないとおれない根っからの運動家、革命児です。ひよっとして国父孫文にも優る人材かもしれないと期待しているのです。」と法燈は言った。

陽一も頷いた。「ええ、その点私もこのひと月ほどですが、近くで彼を見ていて、初めて歴史に名を残しそうな、それも孫文や毛沢東も凌駕しそうな大人物に遭遇したのではないかというような胸の興奮を覚えましたね。絶対に彼を救出しなければなりません、そうしないと、これは中国人民全体のいや人類全体の大きな損失ですよ。」

法燈は言った。「それにしても明日崔一平が来日するという矢先、こういう事件が起こるといふのは偶然ではない気がしますね。いったい犯人たちは何が狙いなのでしょう。そんなことをしても崔

一平の来日は止められませんか」と腕組みをして考えた。

智子は尋ねた。「崔さんは今後とも中国を共産党一党の独裁制を堅持されるつもりですか、それとも欧米式の議会制民主主義に徐々にでも移行されるつもりなのでしょう。そここの本音をどう読んでいるのですか？」

「それがやはり読み切れていないというのが実情でしょうね。」法燈も頭を抱えた。

「今度の拉致事件がその問題と絡んでいるとしたら、崔が民主化に踏み切りそうなのを止めようとして、党内保守派が、暗殺指令を出したのか、その実行役の人が玉泉とからんでいて、連絡係の玉泉さんと何かトラぶったのかもしれない。その書類が玉泉さんは、明道君の部屋に隠していたのでは。明道君はそういうのとは全く異次元でやっていたので、気づかなかったのだけれど、明道君の部屋から何か見つかったので、明道も関係者として拉致されたのかも、そうすると拉致犯は総領事館にいるのかも」と陽一は言った。

法燈はニタツと笑った。「おやおやこんがらがっちゃいますね。明道が保守派だとはだれも思わないでしょう。彼の手法は宗教で勢力を作つて、民主化の土壌にするというやり方です。これは民衆運動の伝統的なやり方だ。いわゆる権力を握って離さない連中のやり方とはまるで違いますよ。だからあなたの言い方だと党内保守派の指令で暗殺をやるのだから、それを防ぐために予防拘禁

したのは、党内民主派あるいは中道派ということですね、彼らが明道君を予防拘禁するのはおかしいでしょう。」

「拉致犯人を党内保守派と考えればどうでしょう」と智子は言った。「党内保守派で崔の台頭をどうしても阻止しなければ、民主化の津波がやってくると危惧している人たちがいるとしますね。彼らは崔暗殺が日本国内で起きると思わせようとして、暗殺指令を国内に出した。その連絡役が鄧玉泉だとします。暗号だから玉泉さんは父親から頼まれただけで内容は知りません。その暗号文を見つけて自分を連絡役に行っているのに気付いた玉泉は、不安になって、それを明道君の部屋にこっそり隠したわけですね。それを玉泉のところに来て受け取ろうとしたけれど、玉泉の部屋の家具が何かに隠してあったはずの書類が見つからず、玉泉に訊ねても〈知らない〉の一点張りだったので、拉致したのではないでしょう。うか、それで玉泉から明道の部屋に隠したという話で、明道の部屋を調べたけれどでてこない、だから明道さんも拉致したということでは。」

「それなら明道は拉致しなくてもいいでしょう。明道君は暗号は読めません、だからほっとけばいいのでは。無理に拉致したら後が大変でしょう」と法燈が言った。

「明道さんが領事館に届けないとも限らないでしょう。あるいは日本の警察に届けるかもしれない。いずれにしても何か恐ろしいことが起こりそうだと感じて、それを止めようとするかもしれないので、事が済むまで拉致しておこうとしたかもしれません」

と智子は言った。

「すると、日本国内で暗号文なんかで拉致事件が起こったと感じさせることで、暗殺は日本国内で起きると思わせといて、中国国内で実行するということでしょうか。そんな陽動作戦のためにわざわざ拉致事件みたいな危ないことをするのでしょうかね？」と法燈が言った。

「そうですね、拉致事件を起こして尻尾をつかまれたら、日本国内の組織が大打撃を受けるでしょうね、それはだれが犯人でも同じだけれど」と陽一が言った。「ただ危機意識の大きさによって、ついとんでもない行動に出てしまうことがあるので、体制保守派がどこまで危機意識をもっているかということですね。」

「民主派が崔を暗殺ということは絶対じゃないの？民主派の一部が焦って、権力内部の抗争と偽装してショッキングな事件を惹き起こして、その機会に民主化の大集会を各都市で開いて政変に追い込むこともありえないかしら」と智子は言った。

法燈は言った。「民主派の中では劉曉波のように徹底した非暴力主義が多いのですが、中には格差拡大に対する民衆の不満を爆発させない限り、共産党政権は倒れないと思っている人もいます。よう。崔暗殺を保守派内部の権力闘争と見せかけて、共産党に対する離反を誘おうとする謀略的な人々もいるかもしれません。」

でもそうだとすると、もう犯人を推測することなど不可能だと

いうことにならないか？ともかく明日は学習会を中止すべきなのか、それとも孫がいなくてもやるべきなのか、陽一と智子は相談したが結論が出ない。榊先生がやってきた。

手の出しようのない状況なので、学習会は続けようということになった。朝から陽一も智子も参加して孫の欠けた分を補おうということだ。明日崔一平の来日があるので、必ず動きがあるだろう。二人の安全をただ祈るばかりである。

問 鄧玉泉と孫明道が拉致されたいきさつを説明しなさい。

16、サルトル、実存主義とは何か？

実存が本質よりも先立てりペーパーナイフにあらざるゆえに

8月5日金曜日、予定通り孫欠席のまま学習会は朝から始まった。皆勉強なんかしている場合ではないと思いつながら、今打つ手はないので、きょう一日は学習会をいっもおおりし、習来日の動きで何か変化が起ころるので、明日以降救出活動を本格化しようということになった。

崔来日は午前の予定だったが、日本で留学生拉致事件が勃発したので、その対応を協議していて、出発が遅れているらしい。どうも来日は夜にずれ込みそうである。

陽一も智子も教え合って勉強するタイプではなかったので、三上学習会には孫君拉致事件がなかったら参加していなかったところである。でも実際、自分の弱いところを教えてもらい、自分の得意なところを苦手な相手に噛み砕いて基本から整理し直して説明するというやり方は大変効果的で、学力を固め、つまづきを克服し、伸長させるのである。もちろんじっくり自習することも大切だが、こういう機会をつくるということは、学力問題解決に大いに役立つことである。

特に陽一は数学や物理でどうしても分からなかった問題をいくつか持ってきてそれをスクリーンに映し、だれか解説してくれと言ったら、争って解説してくれた、その説明は孫君から影響を受

けたこともあるだろうが、まず基礎の原理を確認し、どういう類型の問題かをはっきりさせ、その類型にはどのような考え方をあてはめ、どういう原理や定理を使うものかを確認する。そしてその問題の特徴をはっきりさせて、そこから解き方考えると、難問に思えたものが、不思議と難問ではなくなってくるのだった。

陽一はみんなと群れてやる学習会というのには抵抗があったが、それは自意識過剰の見栄っ張りな性格からきていたと気づき、今からでも三上学習会に参加させてもおうと思ったのである。

午後3時から予定通り榊周次の哲学講座が始まった。

「こんなこととしていいのかという気もあるのですが、どうも崔一平さんの出発は先ほどのニュースでは午後5時頃になるようです。かなり厳重な警戒で関西空港にくるようです。私は先ほど総領事館に行ってきたとして、明日にでも崔さんに直接面会して、孫君と鄧さんの救出を訴えたいとかけあつてきました。もちろん崔さんの予定は日程的に詰まってまして、そんなことはなかなかできませんが、事態が事態だけにご本人には伝わるように努力しますということでした。その時はみんなで総領事館に行きましょう。それまでに二人が戻るというのですが。」

なんとかさういうことで生徒たちを納得させて、サルトルの講義に入った。「サルトルは一九〇五年生まれで一九八〇年没なのです。私は一九四五年生まれですからかなりかぶつていて同時代人ですね。彼は文学者としても有名で『嘔吐』とか『自由への道』

というのも小説です。戯曲では『悪魔と神』というのがありましてこれは迫力があつたのを覚えています。中身はほとんど忘れましたが。

実は実存主義という用語を流行らせたのはサルトルの貢献が大ですね。彼は『実存主義とは何か？—それはヒューマニズムである—』というベストセラーを書いています。これは分かりやすい本なので入門には最適です。ちゃんと副題が答えになっている、親切な本です。じやもう読まなくてもいい、(笑い)そうはいきませんが。

ヒューマニズムとは何かということですが、最近ヒューマニズムは人間中心主義で、人間は自然を破壊してきた利己的な存在なので、ヒューマニズムは克服すべきだという議論が有力になってきましたね。

元々はヒューマニズムというのは人道主義とも訳されまして、人間性を尊重し、良心的に生きようとすることを意味していました。残酷なことをしたり、いわれなき差別をしたり、心を傷つけたりするとヒューマニズムに反すると非難されていたわけです。第一次世界大戦後、平和と協調の時代になり世界的にヒューマニズムが流行しました。日本では白樺派ですね。白樺派のヒューマニズムは中国では魯迅たちに強い影響を与えたようです。

ただサルトルのヒューマニズムは人道的なヒューマニズムとは違って、現存在としての人間の在り方を問うヒューマニズムなの

です。」

田辺麗が尋ねた。「あの榊先生はネオヒューマニズムを唱えておられるようですが、それは白樺派の人道主義やサルトルの実存的なヒューマニズムとも違うのですか？」

「ええ、違うからネオを頭にくつつけているのです。後期マルクスは人と物との区別を強調することによって、労働価値説で労働者の労働だけが価値を生むという立場に固執しましたね。つまり機械や原材料などの働きは価値を生まないことにしたわけです。そして人を物として捉える物化や物を人として捉える物神化を批判しました。それが現代ヒューマニズムの原理になったのです。」

特に実存主義は人間の物化に対してもっとも反発します。実存主義は、主体性をもっとも大切にしますから、物という主体性がないように捉えられる存在に頹落するのをもっとも嫌ったのです。

物と人間の区別にあくまで固執して、物化した物質文明や物象化した社会機構や人間関係から疎外され、人間性を喪失させられたのに抗議するのが現代ヒューマニズムです。マルクス主義の中のヒューマニズム派、実存主義、フランクフルト学派やアメリカ社会学などには現代ヒューマニズムの傾向が強いのです。

もちろん人間が主体性のない物体のように扱われることは人間性の根本である自由に反することであり、主体性を取り戻そうとする現代ヒューマニズムも有効な面はありますが、人間は経済的

な関係や社会的関係の中で、物を媒介にしたり、物に自己の能力を対象化して、物として自己を実現することも大切です。

ですから物と人間を抽象的に区別しているだけではだめでして、物を包括した人間の立場、物に自己を見出し、物として自己を表現し、実現することも大切なのです。それで物と人の抽象的区別に固執する現代ヒューマニズムを克服して、社会的諸事物や環境的自然も必要に応じて人間に包括する包括的なヒューマニズムすなわちネオヒューマニズムを打ち出しているのです。最後のまとめでネオヒューマニズムをしますのでお楽しみにということでサルトルに戻っていいですか？」田辺は少し不安げな顔をしたが、了解した。

「サルトルの人間というのは『存在と無』という大作でテーマになっているのです。表題の『存在と無』は事物存在と意識存在を意味しています。ハイデッガーでは、存在者と存在を区別したので、存在はいかなる事物でもあり得ないわけで、かえってその意味では存在は存在できなかったのですが、サルトルでは意識に対して、意識の対象としてあるものなので事物なのです。それに対して、意識の方は、意識される対象ではないので、いかなる意識でもなくてかえって無ですね」と言いかけたところで、ストップが入った。

「〈存在は存在できない〉とか、〈意識は意識されないで無だ〉とか、支離滅裂で矛盾の塊みたいなこと言わないでください。」と植山が腹を立てた。

「植山さん、それはいい突込みです。全く矛盾の塊ですね。それで哲学なんて矛盾の塊だと言って、投げ出してしまおうか、その矛盾と格闘してもがき苦しむかということです。」

難しいのは哲学だけではありません、料理だってそうでしょう、素材の甘みを引き出そうとしたら、砂糖を加えたらだめで、ちょっと爪先ほどの塩を加えてみる、すると不思議に甘くなったりする。いい具合にそれができるようになるまで、すごく苦しむのです。

哲学は根源的に物事を考え直す営みです。それをするのは誰ですか？だれかヘーゲルとかサルトルとかソクラテスとかという哲学者がいて、彼らが哲学ををすると思っていませんか、他人がした哲学の内容を哲学教師が生徒に分かりやすく説明してみんなに分かるようにすべきだと思っているでしょう。まあ私もできるだけそうしようとは思っていますが、限界があります。

つまり哲学は他人に代わってやってもらえない、主体的な営みなのです。つまり一人ひとりが自分で主体的に哲学をしなければならぬのです。自分で壁にぶつかってもがき苦しみ考え抜かなければ、哲学できるようになりません。たとえ哲学書を丸暗記できて、どんな哲学的な問いにも百点満点で答えられるようになって、そんなの本物の哲学ではないのです。

と突き放すのが本物の哲学ですが、だれか植山さんの問いに答

えてください」と榊は生徒たちに振ってみた。

三宮春彦がおそろのおそろ手を挙げた。「今の先生の主体的に考えなければならぬというお話、胸にドーンと来ましたね。あの例えになってないかもしれないが、PLの花火を見に行った時、花火の音が胸にドーンとぶつかってきてそれですごく堪えたというか、感動したことがあります、そういう感動を覚えました。受け身で勉強していますと、分からないと情けなくなつて、どんな落ち込んでいきます。それが主体的に勉強しますと、分からないと確かに苦しいのですが、もがき苦しむのですが、受け身の苦しいのとはまた違う、生きている実感が迫ってくるのです。」

植山さんが分からない、矛盾だというのは、前後の文章の連関を捉えきれないからではないでしょうか。三Lでは現代文とかまだしていませんが、現代文では文脈を捉えないと正解できません。(ハイデッガーでは、存在者と存在を区別したので、存在はいかなる事物でもあり得ないわけで、かえってその意味では存在は存在できないかった)というコンテキスト(文脈)です。つまり存在者と区別されてしまいますと、存在は事物として存在できません。だって事物は存在者なのですから、だから存在は事物として存在できないわけですね。ところが存在するものは事物としてしか認知できないので、存在は存在できないことになります。」

植山は少し苛立つて言った。「それは分かっています。だから存在が存在できないことになるというのは矛盾だと言いたいのです。だって存在は存在だから存在でないとは言えない筈でしょう。」

三宮が応えた。「それじゃあ、ハイデッガーの存在者と存在の区別という問題の立て方に問題があるのじゃないですか？」

榊は収拾に入った。「存在者の場合は規定や関係が問われるのですが、存在となると実存的にあることの意味や実感が問われたのでしたね。その意味で存在は存在者としては存在できなかったというところかもしれません。」

意識は対象として意識されないのだから意識でもなくかえって無だというのは、意識はいつも対象のつまり何かについての意識なので、主体としての意識は対象でない以上いかなる意識でもないのだから無だということです。つまり主体は具体的に対象として意識できないので、空っぽな無ではないわけです。」

植山はちよつと遠慮がちに「質問続けてもいいですか？」とつぶやいた。「プリーズ、プリーズ」と榊はわざと英語で言って緊張を解こうとした。「たとえ無でも主体は無じゃない、存在するのでしょう。だって〈吾思う故に吾有り〉ですから絶対確実に存在するはずですね」と植山が確認した。

「またいい突っ込みですね、サルトルはデカルトを意識しています。だから主観の意識主体は〈考える我〓コギト〉なのです。これは絶対確実なのに客観化できないので、何々であると事物として規定できないので無なのです。混乱しないように言いますと、規定は無いのです。この主体としての意識存在こそが人間存在だ

というのです。だから『存在と無』の存在は事物存在で無は意識存在だということになります」と榊は説明した。

「それで無である意識存在が人間存在だということなのでしょう。サルトルは徹底して意識存在の側に立ったということですね。」と三宮は確認した。「これは身体的存在として感性として捉えようとしたフオイエルバッハや若きマルクスとは正反対なのでしょうか。」

「ええ、ある意味そうですね。人間は身体的存在であると同時に意識的存在ですからどちらでもあるわけですが、人間が人間であるのは理性的な意識的存在であることによってでしょう。動物だって身体的存在であり得るのですから。その意味で意識存在の方に人間性を求めたということです。」

淀川は質問した。「事物は即自存在で人間は対自存在だというのはどういう意味ですか？」

「サルトルは、事物は〈それがあるところのものであり、あらぬところのものであらぬもの〉だと言っています。つまりはさみははさみでしかないということですね。」と榊は言った。「それに對して、人間は〈それがあるところのものであらず、それがあらぬところのものであるもの〉だということです。つまり人間は、今の自分を対象化して、それに満足できないものなのです。周囲や世間から型にはめられ、規定されて決め付けられるとき、本当の自分を見失ったような気になるのです。自己に對して有るという自覺的なあり方が対自ということです。その場合、意識は事物と

は違つて本質のない自由な意識なので、それ自体〈無〉なのです。だから自分を対自化して、常に自由に自分を選択し、創造しようとしています。サルトルは〈人間とは、彼が自ら創りあげるものに他ならない〉と主張しました。」

「ところで〈実存は本質に先立つ〉というサルトルの名文句はいつ出てくるのですか」待ちかねたように淀川が尋ねた。

「どうもお待たせしました。」と榊は一礼した。「事物存在は予め本質が決まっています。それに対して人間は事物である前に、意識だということですから、まだ何も規定されておらず、したがって〈実存が本質に先立つ〉のです。それで人間は自分がいかなる存在であるか自分自身で決定し、選択しなければなりません。」

15世紀後半のイタリアのピコ・デラ・ミランドラの言うように、一定の住所も顔かたちも特性も与えられていません。自由意志に任されています。ピコは自由意志で自分を選択するところに人間の尊厳を認めたのです。そこはサルトルとピコは共通しています。ピコはイエスが十字架にかかつて人類の罪を贖ったので人間は自由に何にでもなれるのだけれど、サルトルの場合は神が存在したら、人間は自由でなくなるので、神の非存在が自由の条件になります、そこが大違いです。」

「そんな自分の自由意志で成りたい者に成れたら苦労しませんよ、自由意志通りにいかないから、みんな苦しんでいるのでしょう」石川拓馬が反発した。

「ええ、その通りですが、でも何になるかは先ず以つて、自分で決めなければなりませんよ。偏差値任せではいけません。自分の人生なのだから、人のせい、世の中のせいにしてしまわずに、自分自身で自分の人生を選択して主体的に生き抜かないとだめです。自由意志で主体的に決定したら、それを実現するための条件を見定めて、努力を積み重ねていけば、特別の才能が必要な者でない限り、何にでも成れるということはできます。もちろん相当覚悟が必要ですが。」

石川拓馬は残酷な質問をした。「先生は成りたい者に成れたのですか、相当努力されたのでしょうか。」

榊は苦笑いをした。「情けないですが、とても成れたとは言えません。努力も足らなかつたかもしれません。でも成りたい者に成れたと思つたら、進歩はなくなるので、まだまだと思つている方がいいでしょう。まあこれからですよ。え、もう66歳か、まいったなあ。ただポストということになると限られてくるので、私のように異端的だつたり、なかなか専門が需要がなかつたり、世間の評価が冷たかつたりしますと思うようにいきません。哲学者になるということでいけば端くれぐらいには成つたでしょうね。」

淀川雅巳が言った。「でも先生の場合、上村陽一君、三輪智子さん、孫明道君という存在があるので、努力は十分報われているし、成りたい存在に成れていると言えらると思います。」それでパラパラと拍手する音が鳴った。あわてて榊は「止めてください、講義が

できなくなりますから」と制止した。まさかそれはフィクションだよとは言えない。

「とはいえ人間は〈存在被拘束的〉につまり存在の在り方で周囲から限定され、本質を規定されそうになります。つまり事物化されるということです。でもサルトルに言わせると、人間は事物のように限定されることに耐えられない自由な意識存在なのです。

自分の置かれている現状や自分の知的技能的な能力を越えて、自分のイメージーションが飛翔して作り上げた「ありたい、あるべき、本当の」自分を求めてしまえます。いわば人間は〈自由の刑に処せられている〉のです。そこで人間は自分を規定する状況に『Not』という否定の叫びをあげて、事物化しつつある自己に『嘔吐』し、状況変革に取り組みざるを得ません。

石川君は自分の姿を鏡に写して、なかなかいい男だとにやけているのじゃないだろうね？」

石川は急に振られて、ちよつとびっくりしたが、すぐ笑い出した。「いえ、嘔吐ですよ、嘔吐です。鏡に現れている一見イケメンだけどこか根性のねじ曲がっている自分が滲み出ているのを見て、ウェーて戻しています。」

榊は続けた。「状況変革と言いますと、主体が客体である自分の外部の状況に主観・客観的に立ち向かって変革しようとするように理解されがちですが、サルトルも現象学的に状況を捉えますか

ら、状況は主体自身の置かれている状態です。つまり自分自身の置かれている状況の変革であり、自己変革に他ならないのです。だから現状の自己を否定する自己否定なのです。

しかしそれは同時に世界の変革でもありますから、この状況変革への自己投企は社会的な参与（アンガージュマン―拘束され巻き込まれて社会に主体的に関与すること）として行われます。だから他者を人類を巻き込む形で展開されます。自由を求める行為は常に人類に対する責任を負っているのです。」

「アンガージュマンは震災の時のボランティアへの参加なら分かるのですが、社会変革に起ち上がるというのはイメージがつかめません。昔、学生運動が盛んだったそうですが、現在ではどういう形で可能なのですか？」

「サルトルが盛んに状況変革を叫んで、その影響もあり一九六〇年代末に世界的な学生叛乱が起こります。校舎をバリケード封鎖して、大学解体を叫んだ運動で、ゲバ棒という角棒を持ちたりしましたが、結局機動隊が学内に入って押さえられました。彼らにはよく『自己否定！』を叫んでいました。自己否定してどうするんだ、状況の方を否定し、変革すべきじゃないのかと疑問に感じましたが、自己を取り巻く状況こそが自己の状況であり、それを否定するのが自己否定＝状況変革だという意味だったのです。

この三上学習会こそアンガージュマンの典型だと思えますね。だって今日の日本の社会は停滞・衰退しつつあるわけです。日本列島

陽一が説明した。「革命にはそういう階級關係をひっくりかえすという意味の革命と、飛躍的に發展するという意味の革命があります。前者はフランス革命やロシア革命ですね。後者は産業革命とかです。この学習会が教育に飛躍的な前進をもたらすなら後者の意味で教育革命を担っていると言えるでしょうね。」

「それではそろそろ時間なので、締めに入ります。〈ペーパー・ナイフの比喩〉です。ペーパー・ナイフはペーパー・ナイフとして作られます。作った人間によってペーパー・ナイフとして本質付けられています。もしも人間が神の被造物であるのなら、〈ペーパー・ナイフの比喩〉のように人間も本質が実存に先立つことになります。サルトルはそれでは人間は自由な意識として、自分を主体的に選ぶことが出来ないと考えました。

だから神が存在すればルターの場合ように人間は神の奴隷でしかありません。それでサルトルにとつては、神の非存在は人間が人間である為の、つまり自由である為の存在の条件なのです。このように神の非存在を求める無神論を要請的無神論と言います。」

田辺麗が質問した。「三上教では、光・命・愛が神のようなものでしょう。別に神と捉えなくてもかまなく信仰の対象ですね。そういう原理を信仰するということは、サルトルの場合に原理にとられて自由をなくするのでよくないということになるのですか？」

ら邪魔になるようなことは、おそらくあまり良いことではないのではないだろうか。いくら自由が大切だと言っても、決してそれは自分勝手に他人はどうなってもいいということではないでしょう。自分が自由を追求することが、他人の自由や人権を著しく損なうような結果になるのだったら、それはいけないことです。三つのLを信仰して、それらを尊重していけば他人を不幸にしたり、自然を破壊したりすることはないはずです。

サルトルも人類への責任を強調していますから、自由を全く縛りのないものとは考えていないでしょう。」

問 サルトルの実存哲学を次の用語を使ってまとめなさい。

ヒューマニズム、存在と無、即自存在と対自存在、存在被拘束性、嘔吐、自己否定、状況変革、自由と責任、ペーパーナイフの比喩、アンガージュマン、

17、拉致された孫明道

明道が吾等の道を照らしたり光なくして生きれぬものを

総領事館に向かうはずの車は、どうも違う方向に向かっているようだ。孫は「これは方向が違う、あなたたちは何者だ！」と叫ぼうとしたがたつぷり薬品を込みこませた大きなハンカチで口と鼻を塞がれて、孫は意識を失ってしまった。

大阪市内か郊外か分からない誘拐犯のアジトで孫は目覚めた。翌朝8月5日金曜日朝6時になっていた。「孫君、お目覚めのようですね」一見紳士的な語調でリーダー格の50歳ぐらいの陳孟利が言った。後の二人はまだ二十歳代に見える。

「あなたは鄧玉泉のお父さんではないでしょう。玉泉さんはどこですか？」と孫はたずねた。

「もうすぐ来るでしょう。じっくり時間をかけて、あなたを仲間に取り入れようと考えていたのですが、崔一平の来日が迫っているので、急遽お連れしたような次第です。」と陳が応えた。

「目的は崔一平の暗殺ですか？私は暴力は大嫌いで、テロは絶対にはいけないと確信しています。私は憎しみの感情ではなく、あくまでも愛の感情で動きたいと思いますから、テロに誘うのは辞めてください。」

「孫君、君のお父さんは、確か孫周、字は智仁と言ったね。君は実子として育てられているが、実の父親は彼の兄の孫龍、字は龍口だろう。」陳は突然、孫の出生問題を持ち出してきた。「孫龍という伯父さんがいたとは聞いていますが、まさか、彼が実父だなんて知りません。嘘でしょう。」と明道は否定した。

「実母である陸水仙さんは、孫龍さんの妻だったが、孫龍さんが亡くなったので、弟の周と結婚した。その時には君を身籠っていたんだ。君が否定しても調べればわかることだ。龍さんがどうして死んだのかもどうやら君は知らないらしいな。」

「なんでも彼は民主化運動の地下活動が露見して、厳しい取り調べで内臓がおかしくなり、病院で治療した後、家に戻されたけれど、衰弱して死んでしまったとか、それで弟である父智仁は、兄の志を継ぐと心に誓ったということです。」と語った。

「そこまで知っているのなら話は早い。君の実の父である孫龍さんこそ89年6月5日に天安門広場で戦車の前にたった一人で立ちのびたあの有名な報道写真の人物なのだ。そのため五年間収容所で強制労働させられていた。94年に放免され、婚約者だった陸水仙さんと結婚した。そして結婚して間もなく、民主化のための地下活動が露見して逮捕された。その時取り調べに当たったのが、崔一平なんだ。」

「崔さんは公安関係者だったのですか？そんな話聞いたことないな」孫はどうせ仲間に引き入れるためのいい加減なデマだろうと思っていた。

「どうせ口で何を言っても信じてもらえないでしょう。当時の取り調べ現場を記録したCDがあるのでお見せします。これは当局が自分で記録したものです。当局の中に我々に内通してくれるものがいまして入手できました。」陳孟利はノートパソコンで見せた。崔一平らしい男が、孫龍らしい男を責めつけている動画が出ていた。

暴行自体ははつきりとは写されていないが、痛みを堪えている表情からそれとなく拷問と分かるのだ。あれが崔であれが龍と言われれば確かにそのように見えてくる。それに崔自身は父が副首相の時に紅衛兵に痛い目に遭わされていたし、その時にその息子というだけで反動分子とされて糾弾されたことがある。今度は自分が責める番だとばかりにやっていたのかもしれない。

孫龍は頑固に供述を拒否していて、それで体が大分痛みつけられたみたいである、そうと伝わってくる画像を見せられているのは辛いものだ。

「明道君、分かっていただけでしたか、崔はこういう拷問をたくさん民主活動家に加えましたので、自殺もふくめ多くの死者、精神障碍者、不具者がでています。それで私たちは当局に崔の処罰を要求していますが、全く相手にされません。そればかりか我々の組織のメンバーは次々と逮捕されて、収容所に送られています。それで地下活動に入り、処罰要求から自分たちで処罰する方針に転換せざるをえなくなったのです。」

「この画像が本物だとしたら、ゆゆしき問題ですから、画像をネット配信して世界中の人々に見てもらったら効果的ですよ、テロなどしなくても、崔を失脚させることができるでしょう」と明道は助言した。

「もちろんやりましたが、当局は偽者を使った創作だと決めつけて相手にしません。その悪辣極まりない男が国家や党の最高権力を握るのを放っておけますか？」と陳が言った。孫は黙った。

陳はさらに続けた。「我が組織憲政革命党は決して暴力的報復のためだけの組織ではありません。あくまでも三民主義の実現を目指す革命団体なのです。孫明道君のような孫文の血を享けている若者を核にしてあくまで憲政の確立を要求する団体なのです。それで憲政革命党を名乗っています。」

「憲政を確立しようという政党が、陰で暗殺などしているとしたら、国民はそんな党を信用しませんし、支持しないでしょう。劉曉波たちのように徹底した非暴力路線を採用してください」と明道は要求した。

「共産党の方は一党独裁の恐怖政治を強めているのですから、それに対抗するのに御淑やかにとばかりではやってられません。彼らの方はさんざん人権を蹂躪し、拷問や強制労働で弾圧しているのですから、そういうことをすれば処罰されるということを示さなければならぬのです」と陳は力強く言い切った。

孫は大きく首を振った。「いやそれは間違った路線です。暴力に對して暴力で對抗すれば、その党が政權を握った時に、今度は民衆に暴力を向けるようになります。結局人権は蹂躪されたままになってしまいます。」

「もちろん権力者をテロで裁く場合は、党独裁が続いている時期に限定しますし、我々の政府の憲法では人権を保障し、テロは禁止、いかなる拷問も禁止します。むしろ弾圧で人権蹂躪があるのにそれを裁かないと、ますます酷いことになります。彼らに裁きがあるという恐怖心を抱かせて初めて、人権蹂躪が防げるのです。これは全く正当防衛なのですよ」と陳は巧みに説得した。「あなたのお父さんを廃人のごとくして殺した崔を憎くはないのですか？仇を取らないでも気が済むのですか？」

「私、孫明道は、政治や革命の事を語る時には、既に一個人としての感情で語るべきではないと考えています。確かに肉親の情としては忍び難いものです。でもそれでは血を血で洗う権力闘争そのものを克服することはできません。憎しみではなく愛で、暴力ではなく話し合いで平和的に問題を解決していくべきだということですよ。」と孫は自分の信念を語った。そしてついだにこう質問した。「もし私があなたたちのテロ活動に参加を拒否したら、私は生きて帰れないのですか？たとえ殺されたって人を殺すことは断固できませんよ。」

陳は感心して言った。「なかなかしっかりしていますね。ますます気に入った。いや私たちはあなたが復讐を遂げるのを助けしなかっただけです。非暴力主義を貫きたいと私たちも考えていました。残念ながら現実はその甘くない、だから孫君もいずれ私たち路線の正しさに気付かれる時が来ると確信しています。その時までお待ちしています。」

今後とも協力し合えることもあるでしょう。非合法活動では協力していただけないまでも、合法的な活動では手を取り合っていきましょう。私たちはあなたに暴力を強制しようという気はありませんし、危害を加えるつもりも全くありません。ただ二・三日はここに居ていただくことになるかもしれません。」

「それでは学習会に出れないということ、心配しなくてもいいということを持帯で仲間知らせなければならぬのですが、よろしいでしょうか？」と孫は許可を求めた。

「それは困ります。電話から足がつく場合が多いので。それではこちらの方から榊周次先生にメールを送っておきます。東京の仲間からメールで知らせることにしたいと思います。」

その日は、鄧玉泉は現れなかった。崔一平が関西国際空港に降り立ったのは午後10時を過ぎていた。榊はその日は、サルトルについて話終わると、即刻総領事館に向かった。もちろん学習会のメンバーもついて行った。総領事館のメンバーは多くは関空に向かつていて閑散としていたが、女性の彭開慧が応対した。

「中国政府としては、留学生拉致に心を痛めています。崔副主席の来日に変更はありません。引き続き留学生の捜索に日本政府の協力を仰いで全力を尽くし、必ず救出する所存です。本日のところは崔副主席の到着が遅くなりますので、お会いいただけないかと思ひます。崔副主席へのご伝言は必ずお伝えします。」と応対した。

日本のマスコミ関係者が詰めかけていて、拉致された孫明道がどういふ人物かに興味を示した。何といつても孫文の五世の孫にあたるということ、稀に見る天才的な学力であるということ、日本に居たこともあり、日本語ができるだけでなく、日本文化に深い造詣があること、そして太極拳とオリジナル曲で沸かせた人気者だということ、さらに「三上学習会」を作って落ちこぼれかけていた生徒たちの学力を飛躍的に伸ばす奇跡を演じつつあることなど、盛りだくさんの話題があつたからである。

榊はそうした取材を歓迎した。何故なら、拉致犯人たちに孫明道が大物だとアピールすることで、孫を殺したら日中両国民から強い反発を受けて、活動ができにくくなると考えたからである。いかにテロリストの団体でも、民衆から反感を買ってばかりではやっていけないはずである。

そのことは「三上学習会」の生徒たちも分かっていたようで、マスコミの取材を進んで受けて王明道の人となりの素晴らしさ、学力、学習方法およびその指導法が適格なこと、落ちこぼれにとってはまさしく救世主のようであるということなどを訴えた。そして感極まって、大声で泣き続ける生徒も十人近くいたのである。

榊たちは午後7時頃までマスコミ取材に応じた後、総領事館の一室に生徒たちを集め、取材拒否して相談した。

上村陽一が発言した。「今やマスコミに取り上げられ、大々的に報道されれば、むしろ街頭などで救出の宣伝活動をするより、三上学習会を続けて、その意義をアピールする方が、もともと孫君たちを救出する近道かもしれません。心配のあまり勉強どころではないという皆の正直な気持も分かりますが、これは戦いだと思って下さい。我々が動揺したらそれだけ孫君たちは危なくなる。」

淀川雅巳は言った。「でも実際にマスコミが殺到する中で学習会ができますか？それに校長先生が許可しないでしょう。」

榊が言った。「校長先生も気が気でないようで、今日も登校されて常に私と連絡を取り合っています。取材を受けてもいいことになったのも、私が必死でお願いしたからです。ことが人命がかかっていますし、孫君受け入れには校長先生のご尽力が大きかったのも、責任を感じておられます。取材攻勢はもちろん校長先生にも向けられていまして、その中で校長先生も三上学習会の意義を強調され、日中友好にも貢献していると讃えられています。」

三宮春彦が挙手した。「中国の複雑な政治状況と絡んでいて、その中で我々の学習会が政治的に利用されるとしたら、我々が困ります。我々は決して中国の内政に干渉したりするつもりはないわけですが、そのあたりの配慮はどうなのですか？」

三輪智子が発言した。「私たちは孫君と鄧さんの救出が第一で、この点はだれも異議ないでしょう。そのために何が今できるか、最大限有効な方法を取るべきです。事が人命がかかっているだけに、政治に利用されないかどうかとそういうことは、後から考えるしかないのです。今一番効果的なのは、孫明道君をアピールする、その人命がいかに大切なか、孫君を失ったら人類の大損失だぞと必死でアピールすることだと思います。」

それは何も意識的にしなくても、今夜のみなさんが自然に真情から涙を流して訴えた自然体が一番いいのです。変にこさえないでいいのです。今、孫君は、三上学習会に成っているのではなくていいでしょうか、つまり私たちの三上学習会が素晴らしいものだということを見てもらえば、それが孫君の姿だということですね。

これもネオヒューマニズムですね。」

「それでは明日も敢えて三上学習会をしましょう。ただ取材については、私が窓口になって制限します。人数は三名まで、休憩時間以外はインタビュールしないこと、など一切雰囲気をつぶさないようにしてもらいます。皆さんはいつも通り自然体でやってください。三時からの哲学講演はプラグマティズムに入ります。異議ある人は言って下さい。」拍手が起こって、それを柵は制止した。

マスコミとの打ち合わせをし、学校に詰めていた御木本校長の了解を電話で取り付けて帰宅したのが午後10時を過ぎていた。テレビの報道番組は崔副主席の関空到着と、総領事館に三上学習会の生徒たちが嘆願に訪れている様子が大きく報道され、孫明道の安否が憂慮されていることと共に、孫明道の活躍が三上学習会の生徒たちの声を通して紹介されていた。

ニュースキャスターはこう語った。「見ましたか、日本の高校生たちが中国人留学生のことを心配してあんなに泣いているのを。孫明道君が来日してまだ一月とちよつとです。その彼が30人もの落ちこぼれかけていた高校生たちを学習会に組織して、一緒に教え合うという教育の原点に還った学習法で、メキメキと学力を向上させてくれたというじゃないですか。それで彼は救世主のように慕われていた。こんな感動的な話が現実には起こるとはまさしく奇跡ではないでしょうか。ここに教育再生の希望がある。沈みかけた日本列島を再び隆起させる鍵があります。」

どうか拉致した方をお願いしたい、政治的な事情はいろいろあるかもしれませんが、それより孫明道君の命を守ることの方が人類にとつて何千倍も何万倍も大切ではないでしょうか、あなた方が間違った選択をされたら、きっと日本と中国の全ての人から見放されることになるでしょう。」

午後11時にやっと柵はパソコンに向かうことができた。すると差出人の名前が〈孫明道からの伝言〉になっているメールがあった。「孫明道さんからの伝言をお伝えします。『柵先生、御心配かけております。私は無事です。鄧玉泉さんの安否は確認できました。私が、おそらく殺されてはいないと思います。拉致された事情については今は語れませんが、二・三日で解放されるのではないかとこの感触です。それまでどうか心配なさらないように、学習会の皆さんにもご心配をかけ申し訳ないと伝えてください。救済活動などしなくてもいいから、どうか学習会の方に集中してください。さるようお伝えねがいます。孫明道より』この内容については信用してください結構です。」

もちろんどこの誰だかわからないメールなので、信用はできないが、孫明道を拉致したのがどういう団体だったにしろ、ここまでする有名になった孫を殺すメリットのある団体は考えられないので、少し胸をなでおろした。

問 孫明道を拉致した憲政革命党の狙いを説明しなさい。

18、孫明道はいなくても

囚われの君はいずこにいますとも我に寄り添い離れまじきを

8月6日土曜日午前7時半には三上学習会のメンバーは、校庭に集合していた。榊は領事館の彭開慧に孫の代わりに朝の太極拳の指導をできる人をよこしてくれるように頼んだ、何しろマスコミから注目されているので、朝の太極拳もきちんとやらせたいの思ったからである。彭は努力してみますと応えたが、翌朝彭開慧自身が太極拳の出で立ちで現れた、彼女自身が太極拳の心得があるらしい。しかも最初の太極剣の剣の舞を優雅に見せて盛り上げ

てから、太極拳の指導をした。

植山菜々がギターを持参していて、孫明道のオリジナル曲をみんなで歌った。

明るい道を進め

孫明道作詩作曲

息子よ、お前は明るい道を歩むのだ。
光の道を、エーイエーイ、光の道を
ものみなすべては光の子
理性の光で照り輝くのだ
光の道を、エーイエーイ、光の道を

息子よ、お前は明るい道を進むのだ。
命の道を、エーイエーイ、命の道を
命の星に生まれ来て
命燃やして生きている
命の道を、エーイエーイ、命の道を

息子よ、お前は明るい道を進むのだ
愛の道を、エーイエーイ、愛の道を
何時までも罵り合う、
そんな時代は終わりにしよう。
愛の道を、エーイエーイ、愛の道を

朝9時から学習会が開始される前に、上村陽一から報告があつ

た。「榊先生は午前中は領事館に詰めておられます、何か二人に関する情報がないか、できることがないかと考えまして、できたら崔副主席にお会いしてお願いできないかどうかと考えておられるようです。それからこれは確かな情報ではないがということなので、でもみんなにも伝えるようにという内容なので公表します。実は〈孫君からの伝言〉というメールが榊先生宛に送信されているようです。」と言ってメールの内容を紹介した。

思わず拍手が起りかけたが、上村は制止した。「これは拉致犯からかどうか分かりませんし、内容の真偽やどんな思惑が隠れているかも分かりませんので、ぬか喜びはやめましょう。」取材中の記者は、慌てて内容を確認めて編集部と連絡をとっていた。ちょうど朝9時から崔副主席が拉致事件が発生したことを受け、予定を変更して総領事館での記者会見がテレビ中継された。校長室に集まってその様子を見てから学習会を開始することになった。

崔副主席は、拉致犯罪を非難し、直ぐに留学生を放免するように犯人に呼び掛け、遺憾の意をしめして、心配をかけた日本人々に感謝と謝罪をした。特に大手門高校には、出かけて言って、直接孫君の友人たちに感謝と励ましの言葉をかけたいと挨拶した。

ちょうど総領事館に居合わせた榊周次も紹介され、総領事と握手し、記者団からの質問を受けた。「毎朝新聞の前園百合です。たった今、デスクから連絡がありまして、榊先生に孫君からの伝言のメールがあったそうですね。その内容を先ず紹介してください。」と言われたので、そのまま紹介した。

すると前園は少し咎めるように、「そのメールは昨夜入っていたのでしよう、どうして今まで公表されなかったのですか？」と言った。「いや捜査当局には何かあったら電話するように言われていましたので、連絡しました。真偽のほどもはっきりしないメールを公表するのはどうかと思い、報道陣には連絡は控えました。でも学習会の皆に伝えてくれという内容なので、上村君から学習会の皆には報告してもらいました。ですから報道陣の方もその点ご留意いただいて慎重に報道してください。犯人側のなんらかの思惑があつてのことでしょうから」と榊は釘を刺した。

「時事通信の山辺亮介です。孫君の始めた三L学習会についてですが、三Lというのはなんでも三L教という宗教から由来しているそうですね、その三L教は榊先生が提唱されたということですね。榊先生は公立学校で禁止されている宗教活動をなさっておられるのですか？」と三L教や榊周次を非難するとも受け止められるような質問だった。

榊は緊張をほぐすために、自分の顔を両手で叩いた。「あ、すみません、夕べは心配のあまり興奮してほとんど眠れなかったものですから、三L教ね、それは私の『榊周次の部屋』に『宗教のときめき』というエッセイ集がありまして、それを読んでいただければわかると思います。

別に教団も教祖も教義体系も宗教施設もありません。だから宗教活動はしていません。ただ宗教やイデオロギーでいがみ合った

り、戦争になったりすることがありますね。それは困ったことですから、本当はみんな三つのL、Light、Life、Loveの三つのLを信じないと生きていけない三L教徒じゃないか、同じ三L教徒同士いがみ合ってはいけないよ、その三つを大切にし、心を合わせ力を合わせて、平和で豊かなみんな仲良しの世界を作っていきましようということを倫理の授業で言っています。特定の宗教団体の活動ではないですから問題ないでしょう。三L学習会もですから特定の宗教団体を支持するような活動ではありません。」

「日刊ニュースの東海林斗真です。孫君は三L教を広げてそれを地盤にして中国の民主化を促進しようとされているようなニュアンスが三L学習会の生徒さんからのインタビューから窺がえるのですが、三L学習会は政治的に利用される恐れはないのですか。」

「昨夜のテレビのニュースショーだとみなさん好意的に三L学習会や孫君の活動を取り上げていただき、大変感謝しております。深刻な学力低下に陥っている日本の教育の現状を見ると、孫君の存在は救世主のようだと言っていました。それが一晩あけたらどうですか、まだ孫君は無事かどうか分かっていないのですよ。今から孫君の活動を宗教活動だとか、政治活動だとか言って問題視される神経を疑いますね。高校生の純粋な教え合いの学習会じゃないですか、それ以上でも以下でもありません。」

孫君は、謙虚に自分はまだ高校生だから政治的な信念も固まっていますし、特定の立場に立って、運動するようなつもりはないと言っています。日本に勉強に来たのも、日本から中国の将来

の政治的な安定や経済的發展に役立つ知識を得るためとはつきり語っていますし、現政権と対決するようなことは一切言っていない。彼の活動を民主化運動と結びつけて中国当局と対立した立場のように報道されるのはいかがなものかと思います」と孫君の立場を擁護した。それにしてもマスコミというのは、呆れたもので、夕べまでヒーロー視していたのに、かつこ良過ぎると反発して、すぐに荒さがしや批判に様変わりするのだなと思った。ニーチェのいうルサンチマンである。

問 三L学習会の活動が憲法で禁じられた宗教活動にあたるのか、また政治活動に利用される恐れについてはどうとらえるべきでしょう。あなたの意見を論述しなさい。

19、イギリス功利主義の要約

欲望を原理に立てたる功利主義己ひとりの欲にはあらざり

8月6日土曜日午後3時である。榊先生の哲学講義でいよいよプラグマティズムである。「予定ではイギリス功利主義にふれてからアメリカプラグマティズムの説明をするつもりだったのですが、時間の関係上、功利主義は要約だけにして、アメリカプラグマティズムに入っていきます。

イギリス功利主義は18世紀から19世紀にかけて、イギリスの産業革命の発展、資本主義の確立とともに盛んになった思想です。代表的な人物としてアダム・スミス、ベンサム、J. S. ミルの三人があげられます。

アダム・スミスは『諸国民の富』を著した経済学の父と呼ばれています。彼は一国の経済が発展して国民が豊かになるためには、市場を完全自由競争にすれば、神のみえざる手である価格の自動調節作用が働いて、需要と供給が一致する均衡価格ができていつて、売れ残りも、品不足もなくなり、最も効率的に行くと考えたのです。

その前提になっているのが、だれもが最小限の費用や努力で最大限の富を得ようとする云う事実です。彼は商品の価値はその商品やサービスに費やされた労働時間によって決まると考えました。これを労働価値説といいます。何故なら自分の二時間分の労働生

産物が他人の一時間分の労働生産物と交換されるとすると、結局その人は人の二倍も働かなくてはなりませんので、そういう労働生産物を作るために働く人は少なくなり、品不足に成るので交換比率は有利になります。

もし人の何倍も働くのが好きで、それほど欲しがらない人が多いですと、この法則は成り立たないのですが、そういう人は例外的なので、大数の法則によって市場全体では無視できるわけです。結局アダム・スミスの考えでは人間は私利私欲のために行動し、できるだけ少ない労力で多くの富を手に入れようとするホモ・エコノミクス（経済人）であるということです。そういう人間観に立脚すれば、政府は経済には直接介入しないで、完全自由競争市場に成るように環境を整えればいいということになります。

ベンサムは功利主義思想を大成した人です。彼の功利の原理は、人間は二つの主権者に支配されているとします。一つは快樂であり、もう一つは苦痛です。人間はだれもが快樂を求め、苦痛を避けようとして行動するわけです。それも少しでも多くの快樂、少しでも少ない苦痛を求めます。そこで彼は快樂や苦痛を量的に計算する理論を作りました。そして快樂が多ければ多い程幸福で、少なければ少ない程不幸だとしたのです。そして快樂をもたらす物を善だとし、苦痛を与えるものを悪だとしました。

こうしてベンサムは社会全体の幸福量が最大で、苦痛量が最小の状態を「最大多数の最大幸福」だとし、これを法や道徳のための基準だとしたのです。ですから彼の代表作は『法および道徳の

諸原理序説』です。

ただし問題は自分の個人的な幸福追求が、他人や社会全体の不幸をもたらす場合もよくあるということです。そうなれば、社会全体の幸福量は減少しますから、そういう場合はサンクシヨン（制裁）が必要だと考えました。サンクシヨンには物理的・道徳的・法的・宗教的サンクシヨンがあるとしましたのです。

ベンサムの量的功利主義に対して、全く利己主義の塊みたいを受け止める人が多かったので、J・S・ミルは質的功利主義を唱えたのです。つまりベンサムが説いたのは利己主義ではなくて、本当の功利主義の精神はイエスの黄金律「汝自身を愛することく、汝の隣人を愛せよ」という教えだということです。「汝自身を愛することく汝の隣人を愛せよ」という格律です。

ベンサムが主張したのは「最大多数の最大幸福」ですから、個人が他人を無視して自分だけが最大限幸福になればよいということではなかったはずだとミルは解釈します。むしろ社会全体の幸福量の増大こそが目的であり、その幸福を享受するのが自分か他人かについては厳正中立の立場なのだと思います。ここにおいてようなアンパンがあれば、だれもが食べたいわけですが、一番お腹を空かしている人、一番アンパンが好きな人が食べれば、幸福量は最大ですね、自分が所有しているからと言って自分が食べてしまうのではなく、「最大多数の最大幸福」のために使うのが最も功利主義に叶っているものであり、それはイエスの隣人愛の原理とぴったり一致しているのだと感動的に語ったのです。

功利主義というのは利益追求主義ですね、しかもその基礎にあるのは快樂主義です。ですから欲望の原理、利己主義の原理であるかに思い込まれ、資本主義の確立期に相応しい浅ましい思想であるかに受け止められがちだったわけです。

しかし19世紀になって、階級間の格差が拡大し、階級闘争が激しくなりました。失業を招く機械の改良に反発してダツライト運動と呼ばれる打ちこわし運動が起こります。経済恐慌も周期的に起こるようになりました。長時間労働による労働災害や児童労働の問題が国会でも取り上げられて、社会改良の必要がさけられるようになりました。そこで当然、素朴な快樂主義、利己主義は猛省を求められます。でも資本主義社会のエネルギーは快樂追求であり、利益追求ですから功利主義自体は取り下げられない、そこで登場したのがJ・S・ミルの質的功利主義なのです。

「満足せる豚よりも不満足な人間の方がよく、満足せる愚か者よりも不満足なソクラテスの方がよい」で質的功利主義は特色づけられます。まあ豚は質より量で、高級なグルメよりたらく食べさせてもらう方が満足しますが、人間は見た目にも美しく味わい深い高級グルメを食べたがるということでしょうか。

また物質的な欲望を充足させるだけでなく、精神的な欲望を充足させたがるのも人間です。その際、ただ自分ひとりの快樂の満足だけでなく万人の幸福を増進する方が、「最大多数の最大幸福」に貢献できて、そのことで精神的満足も大きいのです。

利己的行動は自分一人にしか満足を与えることができないので
快楽量は限界がありますが、社会的な貢献によってみんなに幸福
を与えるような活動は非常に大きな快楽を生み出すので、質的功
利主義は、もはや利己主義者というより利他主義者の面の方が強
いのです。

問 イギリス功利主義、スミス、ベンサム、ミルについてその特
色を概略しなさい。

20、プラグマティズムの創始者パース

考えるプロセス自体が人ならば、人は事物の記号ならずや

イギリス功利主義は時間の関係で骨子しかできません。今日の
メーンはアメリカプラグマティズムの創始者パース（一八三九～
一九一四年）です。ドイツ観念論哲学を始めたイマニエル・カン
トは、欲望や私利に傾きやすい傾向性を抑制して義務に従って初
めて道徳性があるといえるようになりました。どんなに公共の福祉や人
類の進歩に貢献する仕事でも、自分の私利や見栄のためにしてい
たのなら道徳性はゼロだという議論ですね。孫君も人気者や英雄
になりたくて、三上学習会の活動をしているだけなら、彼の活動
に道徳性はありません。

でもカントの議論なら、ある行為がどれだけ道徳性があるかは
ひとえにプラクティッシュ（実践的）な動機にかかっているとい
うことになり、他人はうかがい知ることはできません。自分自身
でさえ、潜在意識の中にはどれだけギトギトとした欲望が潜んで
いるか分かりつこないのです。だとしたら人間の行為を評価する
のは、やはりその行為はどれだけ所期の効果をあげることができ
たかというプラグマティッシュ（実用的）な効果ということに
なります。その意味では孫君の活動は偉大であったことが、既に
十分実証されつつあるわけです。

パース【Charles Sanders Peirce】はプラグマティズムを掲げた
のですが、彼自身は、イギリス功利主義を継承しているつもりは

なかったようです。イギリス功利主義はどれだけ利益を効率的にあげられるかを目指したのですが、パースから見れば、彼らは感覚的な快楽を少しでも多く貪ろうとしていた連中だということです。パースたちはあくまでも科学的な方法を用いていかに効果的に気高い目標を達成するかということですね、そういう意味で実用的な効果を求めているのです。」

「ということはイギリス功利主義には、まだ身体的な快苦という基準があったので、物事の善悪を考えるのに、そんなことをしたら体を壊してしまうとか、気分が悪くなるとは、それはとてもおいしそうだとか、体にいいとかという自然的な基準があったけれど、プラグマティズムは理性が建てた目標を達成さえすればいいということ、感覚的な歯止めがなくなってしまうというおそれがありますね」と三宮春彦は訊ねた。

「それはいいところに気附きましたね」と榊は応えた。「感覚的な快苦の持っていた自然的基礎が顧みられなくなると、怖いかもしれません。アメリカ資本主義は高度な科学技術と結びつき、国家の富強や企業の利潤追求のために、効果的なものはなんでもありになりかねませんからね。ただまだパースの時代には、アメリカにはフロンティア・スピリット（開拓者精神）が残っていて、禁欲的なところも大いにあったのです。」

三宮はさらに突っ込んだ。「そのフロンティアで土地を奪われたのがネイティブの人々ですね。白人たちにとって（アメリカン・インディアン）は開拓の邪魔をする野獣と同じように見なされ、

野獣狩りのように大量に駆除されていったわけでしょう。」

「それは忘れてはいけませんね。それはともかくとして彼は（プラグマティズムの格率）を掲げました。それで（プラグマティズムの創始者）とよばれているのです」と榊は先を急いだ。

一年生の谷垣優也が手を挙げた。「（格率）という言葉の意味が分かりません。数学で何分の一の確率というのとは違うのでしょうか。」

「広く認められる行為の基準などを（格率）と言います。（格律）と表記されていることもあります。ところでパースのいう格率は次の通りです。」

『ある対象の概念を明晰に捉えようとするならば、その対象がどんな効果を、しかも行動と関係があるかもしれないと考えられるような効果を及ぼすと考えられるか、ということ考察してみよ。そうすればこうした効果についての概念は、その対象についての概念と一致する。』（「観念を明晰にする方法」より）

ある概念例えば「猫」という概念の対象について様々な特徴が報告されますが、それらを観察や実験を通して確かめます。このようにテストによって真偽が確かめ得る概念だけが有意義な概念なのです。この共同の確かめによって人々の（猫）についての一致した観念の総和が、猫という概念の意味なのです。

聖餐式（せいさんしき）はキリスト教会で、キリストの肉であるパンとキリストの血である葡萄酒をいただく儀式です。キリストの肉体であるとされる教会の中での、キリストと信徒の合一の儀式なのです。しかしパンは味、形、色、舌触り、諸成分、その他どれをとってもキリストの肉とは思えません。葡萄酒も同様です。パンの味、形、色、舌触り、諸成分を成していれば、だれもがこれはパンであり、キリストの肉ではないと分かる筈です。

パンだと分かっているながら、無理にキリストの肉だと言い張るのは間違いだとパースは主張したのです。ですからパースの場合は、客観的実在との一致が真理なのです。『信念を固めるための四つの方法』という論文で、どうすれば疑いの残っている状態から信念を固められるかを論じました。

一つ目は〈固執の方法〉です。念仏やお題目みたいに何百回、何千回と称えていると根拠薄弱でも信念になりますね。

二つ目は〈権威の方法〉です。権威に対する忠誠が信念確定の決め手になります。ベーコンの「劇場のイドラ」はこれにあたります。権威がカリスマ性を帯びたり、それを信じないと権力的に抑圧されるような体制になっていますと、自分の安全の為に信じておくことになります。

三つ目は〈先天的方法〉です。つまり形而上学的方法です。頭の中だけで論理一貫した理論を組み立てて、それを基準に現実を評価し、断罪する方法です。確かに論理的には欠陥がなく、正しく思われますが、実は実験・観察等できちんと検証されていない〈机上の空論〉です。これは筋が通っていることが信念確定の決

め手となっています。

四つ目は〈科学的方法〉です。同一条件の下では同一の結果に到達せざるを得ない科学的実験に基づく方法です。主観の認識が客観的な事物の諸性質と一致していることが信念確定の決め手なのです。パースが主張したのもこの方法です。パンをキリストの肉と見なし扱ってあげば、宗教的儀式には都合がよいからという実用的効果だけから、〈パン＝キリストの肉〉を真理と見なすような乱暴な事は決してしません。」

谷垣優也が質問した。「あのキリスト教の聖餐というのは、主イエス・キリストと合体するためのシンボリックな儀式ですよ。だからパンをイエスの肉体と思って食べると、パンは体に入って合体するので、イエスと合体したことになるわけですね。何も本気でパンをイエスの体だと言ってるわけじゃないでしょう。」

「うーむ、それがそうとも言えないのです」と榎はやりわり否定した。「だからパースはわざわざ教会の儀礼に文句をつけているのです。今ではカトリック教会以外ではだいたい象徴だと認めているようですが、カトリックでは聖体行列などがあり、聖餐によってイエスと本当に合体できるという信仰がすごく重要なのです。中南米などではそのお祭りを村中総出で祝うそうです。」

つまり、教会は地上におけるイエスの体だから、その中で聖職者が聖別することによって、パンは味も姿もパンのままイエスの肉体になる。ワインもあのワインの甘い味のままだイエスの血になると信じられているということなのです。どの程度本気かどうか

は別にして正式の教義は変えられないようです。」

谷垣は驚いたようだった。「それは少々ショックですね、だってキリスト教会は仏教や神道が偶像崇拜したり、自然物を神だと祀ったら迷信だと言って排斥するでしょう。そんなこと言っていないから、自分はパンやワインをイエスの肉や血だとシンボルや比喩でなく信仰するのは矛盾していますよね。」

上村陽一が発言した。「実はその話深入りすると、榊先生はそのことに絡んで二冊も著書があるので、前に進まないと思います。また後で僕が解説しますから、次に行きましょう。」

「本当はここでキリスト教の成立の謎、イエス・キリストの本当の聖餐と復活の秘密について語りたいところですが、何しろ予定より遅れているので次に進みます。」

ともかくある事物がどのようなものかは、その物が示すさまざまな効果についての知識を集めて、それについてみんなで合意した内容がその事物の概念だということです。猫という動物は、昔から、家で飼われていたのだが、その際ネズミを捕るという仕事を担当してくれていて、それは猫の概念ではとても重要な要素だったのです。海賊船には猫がたくさん飼われていましたが、それは大切な食糧を食い荒らすネズミ捕りとして飼われていたのです。今ではネズミを捕る猫なんてほとんどいないので、猫の概念に入らなくなっていましたね。」

石川拓馬が挙手した。「そんなの変ですね。話し合って猫とは何か決められますか、あくまでも実験観察の結果を踏まえて、実証しないとだめでしょう。会議で科学的な概念を決定するというのは間違っているのじゃないでしょうか？」

三輪智子が説明した。「別に会議を開くという意味ではないですよ。猫についての議論で一致しているところが定説化して通用しているわけですね。ネズミ捕りというのも一致していたわけですが、最近都市部でネズミが激減したこともあり、ネズミを捕るところを見なくなったので、猫の概念に入れない人が多くなり、一致しなくなったので、ネズミを捕らなくても猫だということになったわけです。つまり議論が起らないほど定説化すれば、だれも疑っていないわけですから、それを猫の概念だと考えていいということですね。」

「それじゃあ人間はどのように概念づけているのですか？」と石川は突っ込んだ。

榊はちよつと困った表情になった。「それが彼は人間については極めて独創的な規定をしています。これは定説になっていませんよ、まあ提案みたいなものでしょう。」

『**実際すべての思考が記号であるという命題と、人間の生活は思考の連続であるという命題から、人間が記号であるということが証明できる。つまり人間と記号は『ひと』と『人』が同じであるという意味において同じなのである。こうして私の自我とは私の言語体**

系以外の何ものでもないということになる。何故なら人間は思考に他ならないからである』

分かりにくそうな表情で聞いていたので榊は言った。

「わかり易く書き換えてみましょう。『人間は思考に他ならず、人間の生活は思考の連続である。だから私とは私の述べた言語の集大成のようなものである。ところですべての思考は記号なのだから、人間は記号に他ならない』となります。これがパースの〈人間Ⅱ記号〉論です。」

三宮春彦はまた苦虫を噛み潰したような表情に成り言った。「人間が考えるわけでしょう。考えることが人間ではないと思います。つまり人間と人間が考えている内容が同じだというのなら、何もかも皆人間だということになりませんか？そしたら人間は、人間ではなくってしまいます。」

榊は頷いた。「そうですね、そうとも言えます。それは人間を主観や主体として捉える近代的な人間観です。デカルト的に考える我を主体Ⅱ実体とみなしているのです。このシリーズで言いますと、『崩れゆく学園』で出てきました。ところがイギリス経験論の方では、考える我というのを考えている意識から超越した実体とは捉えないのです。ホッブズの『リヴァイアサン』では意識を薄れゆくメモリイであるイメージーションという無数の微粒子の活動として説明します。そこでは言語は音声のイメージーションがそれ以外のイメージーションの記号として働いた時に発生したとされています。そして自我はそういう意識活動の傾向性が自律的

になったことから説明されるのです。

ホッブズのような経験論的な人間観を純化したのがパースの〈記号Ⅱ人間〉論です。続けてパースは次のように言っています。

『以上のことを納得するのは難しいことかもしれない。しかしそれが難しいのは、人が自分の意志、つまり『肉体に対する統制力』といった非理性的なものを自分自身だと思っているからである。しかしそういったものは、思考を助ける一つの手段にすぎない。人間の**本質は、人間が整合的に行動し、整合的に思考することのなかに存する。そしてこの整合性とは、事物の知的性質、言い換れば、ある事物が他の事物を表示するという性質に他ならないのである**』

つまり人間は、身体や身体に宿る人格だけでなく、事物が意味を持つて関係し合っている事物自身の知的性質として記号だということですよ。」

田辺麗が訊ねた「記号というのはサインのことでしょう。赤信号は危ないというサインですね。それが人間ですか？」

上村陽一が発言した。「これははさみとか、これがボールペンだとか、これは膚を覆う下着だとか、これはカーテンだとか、それぞれの事物は効用だとか作用だとかあつて意味を示しますね、その事物の意味作用が記号です。そういう諸事物の意味連関によって人間社会が構成されているということですよ。だからその一つ一

つ要素を人間の最小単位みたいになすと、各事物の記号的性質が人間だという捉え方になるわけです。人間を人間身体とそこに宿る人格に限定して捉えるこれまでの人間観に閉じこもっている、それは人間でないものを人間に含めて混乱させているだけにしか見えないわけです。だから僕も鉄腕アトムに成る前までは、そんな馬鹿なと思っていたのです。」

淀川雅巳が興味深かそうに尋ねた。「鉄腕アトムは自己意識を持つ主体なので人間だというのは分かりますが、人間がボールペンだというのは分かりませんか、先輩説明してください。」

「それは『鉄腕アトムは人間か?』で主題的に書かれているのですが、かいつまんで言いましょうか?」上村陽一は唾をのみ込んで気を落ち着かせて説明しました。あの時はエルサレムの国連本部で世界の首脳たちを相手に人類とロボットの未来を守ろうと命を張って話したが、今日は大手門高校の三上学習会である。しかしその緊張は変わらなかった。それは何故か、孫明道を取り戻すこと、ネオヒューマニズムを伝えること、これらはやはり人類の未来がかかっていることではないかと思ったからである。

「これは遠回りでも生物学からアプローチした方が分かりやすいと思います。ユクスキュルという生物学者の『生物から見た世界』という著作がありまして、そこで環境世界論が展開されています。」

最も分かりやすい例はビーバーでしょうね。ビーバーの家族は

ビーバーダムを作つてその中に素敵な二階建ての水中家屋を建造しています。ダムにはたくさんの魚などを飼育しているわけです。

ビーバーの身体的特徴には大きな前歯とは平たい尻尾とかがありますが、そんなのがあれば、あんな素晴らしいダムだとか、家屋が作れるでしょうか。もつといろんな特徴を体にもつていても、ビーバーのような豪華なダムや家屋を作れるわけではないのです。

つまりビーバーを特色付けるのはビーバーの体だけではなく、ダムや家屋も含めないと、ビーバーを認識できません。つまりビーバーの身体だけにビーバーを限定してしまうと、ビーバーの体だけは医学的に分かっても、ビーバーが何であるか、その本質は分かりません。ビーバーとは、ビーバーの身体、ビーバーダム、水中家屋、等々なのです。それらがビーバーの集合を構成していて、その構成要素一つずつがビーバーの現れだと捉えることができます。」

「それらの中でビーバーなのは、ビーバーの体だけです。ビーバーダムはダムであつてビーバーではないでしょう」と淀川は切り返した。「それは身体として動物を捉えるからです。生態からビーバーを捉えるならば、ダムや家屋を見てビーバーだと捉える必要があります」と陽一がいうと、さらに反論して「ビーバーの世界があつて、その中にビーバーとビーバーの環境を構成する諸事物があるわけでしょう。ビーバーの世界にはビーバーしかないというのは説得力がありません。」

「おつしやる通りです。」陽一は淀川の言い分を認めた。「でも貝殻を含めて貝ですね。貝殻というのは、貝の身から分泌された炭酸カルシウムが固まってできた、貝の住居あるいは貝の衣服なのです。でも貝の身の部分だけでは何貝か分かりません。マルクスのところで出てきた非有機的身体も含めて、その動物を捉えるという見方も必要なのです。だからこれまでの個物としての生物種を捉える見方だけでなく、それぞれの生物世界を構成する事物の存在の仕方として生物種を捉える見方も必要だということです。」

三輪智子が陽一に加勢した。「私もよくは分かりませんが、特に人間は、その活動がうんと広がってしまったので、人間の身体だけを捉えても人間が何であるかはわかりません。また身体の活動だけみても人間が何をしているのか分からないわけです。」

飛行機に乗ってヨーロッパに飛んで行っても、人間が空を飛んでヨーロッパに行ったことになります。機械で生産しても人間が作ったことになります。顕微鏡が見たミクロの世界を人間が見たと言いますね。計算機が計算しても人間が計算したことになるのです。そういう意味では人間は身体の子をはみ出して、地球全体を自分の身体にしまっているようなところがあります。

それで今までのような、身体的な個体の概念として人間を捉えるだけでは駄目で、社会的諸事物や環境的自然が人間的世界を構成するという事物の存在のあり方としても人間を捉え返そうとい

う考え方が次第に有力になってきているのではないのでしょうか。」

陽一は元気づいた。「そうなんです。例えば人間は地球のいたるところに棲んでいますので、人間を語るにはニューヨークの摩天楼に象徴される大都会もチベットの山奥も語らなければならぬ。服飾の世界はめまぐるしく流行が変わりますが、それは現代人の姿を如実に表しています。でも身体だけが人間で服装は人間ではないということに固執すると、人間ではないものばかりに目を奪われて人間を見ていないことになってしまいます。」

「しかし服装を人間だとしたら、人間の本質は物を考えるという事なのに、物を考えなくても人間だということになってしまいます。」谷垣優也が納得いかないことをアピールした。

「物を考えるのを身体の一部である脳髓の働きとして捉えて、その上で、人間の本質は物を考えることだとすれば、身体以外は人間ではないことになるのは同義反復です。」と陽一は応え、少の間を置いて考えた。「人間の意識や思考というものは、身体だけが生みだしているのではなくて、巨大な人間の歴史があつて社会機構があつて、文化があつて、社会的諸事物や自然環境があつて生み出されているのです。だから私が考えるということは、物が意識に現れる物の活動でもあるわけですね。だからパースは人間は思考の連続だと言いながら、それは事物の知的性質であるとも言えたのです。それは日本思想で言えば、本居宣長の〈もののあはれ〉であり、〈物の心〉だということです。」

あまりに難しいので、ほとんどの生徒たちは放心状態になっていた。考えすぎると何も考えていないと同じような生理状態になるようだ。

榊はそろそろ事態の收拾に入らなければならないと思った。「今上村陽一君や三輪智子さんたちに説明してもらったようなことを考えている最中です。もう四十年以上そういうことを考えていまして、はじめは全く異端視されていまして、それで教授にはなれずに、塾や予備校、高校の非常勤講師を続けてきたわけですね。でも今では、そう異端ではなくなってきているようです。」

パースも〈人間Ⅱ記号〉論はアドバルーンみたいなものだっただのか、取り下げたわけではないですが、主題的に新しい人間観として強調することはしなくなったわけで、彼の人間観の転換は、先駆的な試みに終わっています。やっと21世紀になって、広く認められつつあるということですね。」

8月7日日曜日はどうするかが議論になった、家にいると孫君のことが心配でたまらないから日曜日にも三上学習会をやらせてほしいというのが全員の意見で、できたら榊先生の哲学講演会もして欲しいという。早速御木本校長に携帯で連絡すると、校長が教室のすぐ近くにいたらしく入って来て、みんな驚いた。

「いや、驚かせてごめんなさい。私も気が気でなくてね、みんながそういう気持ちなら、私が当直になりますから、どうかお使いください。今報告が入って、つい先ほど名古屋の領事館に鄧玉

泉さんが無事戻ったそうです。明日にも元気な姿が見られるかもしれませんね」御木本校長が朗報を伝えた。みんな拍手して喜んだ。

問 パースの〈人間Ⅱ記号〉論を分かり易く説明しなさい。

21、鄧玉泉、解放される。

凶弾に斃れし父の仇とれとまでは言はねどせめてひと張り

8月6日土曜日午後3時頃、名古屋の中国領事館の敷地内にある鄧玉林の自宅マンションに鄧玉泉は戻ってきた。拉致されてからの記憶は消されているのか、犯人たちを覚えていないという。そしてどんな尋問を受けたのか、何を話したか答えることはできなかった。突然部屋に侵入してきた男に薬品で気絶させられて拉致されたらしい。

だから鄧玉泉拉致の犯人と孫明道拉致の犯人が同一グループだとすると、鄧玉泉を何の目的で拉致したのか、孫明道を習一平暗殺の実行者に仕立てるためには鄧玉泉拉致は果たして必要なのか？それとも鄧玉泉がだめだったので、孫明道も拉致したのか、孫明道は断ったので、帰されなかったのだが、鄧玉泉は帰されたので、実行犯を引き受けたのだろうか。

しかし実行犯を引き受けるといっても、鄧玉泉は拉致被害者として今や時の人である。父親の鄧玉林は名古屋の中国領事館員なので、余程のことがない限り、父に迷惑をかけてまでテロリストに豹変することはないだろう。

玉泉の場合も憲政革命党は孫明道に対してと同じようなアプローチをかけていたのだ。憲政革命党の陳孟利は「鄧玉泉さんあなたは天安門事件があった一九八九年にお生まれになっておられま

すね」と尋ねた。玉泉が頷くと、陳は尋ねた。「天安門事件のあった6月4日にあなたのお父さん鄧玉林さんはどこにおられたかご存知ですか？」玉泉は語った。「天安門広場にいたそうです。北京大学の学生でしたから。」陳はうんうんと頷いて、「その時の様子を聞かれたことはありますか？お父さんから」と陳は質問した。

「まさか発砲されるとは思っていなかった、本当に発砲されたので生きた心地はしなかった。必死で走ったと言っていました。でも親友の梁新生さんが流弾にあたって亡くなられたそうです」と返答した。

「ところでお母さんの王智花はその時どこにおられたのですか？」と尋ねた。「母は参加していません、だって私を妊娠していましたから」と答えた。陳はもったいぶって言った。「確かご結婚なさったのはその年の7月のはずですね」と。「学生運動家どうし、闘争が高揚して、それで激しい情熱だったので、結婚前に結ばれたそうです。そんなことどうでもいいでしょう。どうして聞くのですか？」

「いや失礼。別に野暮なことを言いたいんじゃないかもしれません。ただその時に妊娠したのは親友の梁新生さんの子だったのです。でも亡くなったので、王智花さんは鄧玉林さんにあなたの子を妊娠したと打ち明けたのです。つまり彼女は二人の男性と関係していたようです」と陳は暴露した。

「まさか、そんな血液型を調べられますよ。父はA型、

母はB型、私はAB型です。正真銘の父の娘です」と玉泉は断言した。「でも梁新生さんもA型ですので、血液型だけでは断言できません。当時の梁さんの日記からあなたの出生の秘密がわかったのです。」

陳はパソコンで、梁新生の日記のことが記録されているWEBにアクセスしてみせた。そこには梁新生の日記の表紙や中身の画像が載っていた。6月3日、すなわち天安門事件の前日の日記に、王智花から妊娠の知らせを受け、来月にも入籍する決意が書かれていた。つまり鄧玉林に打ち明ける前に梁新生に打ち明けているのだから、だれが考えても梁新生の子であると王智花は考えていた事がわかる。

「ところで民主化運動家だった鄧玉林さんはどうして体制派に転向されたのですか？」と陳は玉泉に尋ねた。「それはソ連崩壊とその後のロシアの混乱ぶりを見まして、やはり共産党がしつかり心棒になれば、安定的な経済発展も難しいと理解したからだと聞いています」と玉泉は答えた。

「ところであなたの血のつながった本当のお父さんの命を奪った現場の指揮官が崔一新副首相だったことはご存知でしたか？」陳はついに暴露した。「何ですって、それで私に親の仇を取らせようというのですか？それで拉致したのですね」と玉泉が言った。

陳はじつと無言で玉泉を見た。玉泉は呆れたという表情になり、「それはできません。そのWEBの内容も真偽の方は確かめよう

がありませんし、たとえ実父が梁新生さんであったとしても、私は鄧玉林を父と信じていますし、父には強い愛情を持っています。

それに議会制民主主義を導入するとしても、それは共産党政権を暴力で打倒することによってではなく、共産党政権が複数政制や自由投票制を受け入れることによって実現させるべきで、党内で民主化を推進しようとする勢力がイニシアティブを握ることによってなされるべきだと思います。それが混乱が少なく民主化を達成する最も現実的で、最も近道であると思っています」と信念を披露した。

「それは甘い考えですね。崔一新がちよつとりベラルなことをいうと彼を党内の民主改革派だと幻想を抱こうとする。文革期に周恩来に期待して彼が命がけでも守ってくれるのではないかと思っただけ、劉少奇を断罪した書を読み上げたのは周恩来だった。彼は自分の養女が江青に頭蓋骨にクギを打ち込まれる拷問で死んだ時も助けようとしなかったのです。周恩来ですらそうなのだから、後は推して知るべしでしょう。改革開放を主導した鄧小平が天安門事件では民主改革派に発砲させたのですよ、頭の中で代議制民主主義の導入が必要だと思っている共産黨員も、いざとなると腰が引けるのです。それは何故か、民衆が共産党を完全には見放していないからです。あなたのように共産党に少しでも望みを託している人が多いと、結局腰が引けてしまう。みんなが見放して初めて、党内改革派も決断できるのです。」

「ご意見は拝聴しておきます。ともかく私を解放してください」

と玉泉は大声で言った。「分かりました。残念ですが、解放します。あなたの出生の経緯についてのことは御自分で確かめてみてください。お母さんが真実をご存知の筈ですから。それから父の仇を取れとは言いませんが、もし崔一平にお会いになったら、せめて一発でも張り倒してみてください。それだけでも、天安門事件の多くの犠牲者の慰霊になるでしょう」と陳は落ち着いて、じつと玉泉の目を見つめながらゆっくりと言いつけた。

玉泉にとって最後の陳の言葉は胸に響いた。その言葉が耳について離れなかったのである。彼女は注射を打たれて眠らされて、名古屋に連れて行かれた。

玉泉は、父玉林にはじめは何も覚えていないと言っていたが、それなら催眠術で暗示をかけられているかもしれないから、東京に連れて行き、大使館付きの精神科医に催眠術を解かせなければならぬと言われたので、観念して家族にだけは正直に話すことにした。

まず女同士でないと話づらい内容があるからと、父に退席してもらい、母王智花に真偽を確かめることにした。父の前ではとても素直に言えないだろうからである。

「お母さん、天安門事件の時には既に身重だったのでしょうか。私の誕生日から考えても妊娠四か月ぐらいだわ。」と玉泉は訊ねた。「そうよ婚前にできてしまった、できちゃった婚ね」と少し恥ずかしそうに言った。「天安門事件が起こる前にお父さんには妊娠

を報告していたの、それとも天安門事件が起こってから報告したの？」と玉泉は訊ねた。智花は「さあね、どっちだったかしら、確かあのころ悪阻のせいか体調が悪くて、私は家で寝込んでいたし、彼は私に構う暇なんかなかったたので、事件の前には言えなかった気がするわ、事件が終わって、親友が殺されたって落ち込んでいる彼に、私と一緒に生きましようという励ましも込めて、あなたの子ができるから一緒に頑張りましよう」と報告したことを覚えてるわ」と智花が懐かしそうに語った。

「それじゃあこれを観てくれる」と言って、玉泉は「梁新生の日記」という名のブログを開いて見せた。事件の前日のボールペンで自筆の「梁新生の日記」が映し出された。『今日は天安門広場を抜け出して、王智花を見舞った。彼女は吐き気がして苦しいというので活動を控えて自宅で寝込んでいます。何か悪い病気でないか、気分が悪いかと心配でたまらなかった。彼女の部屋に入るとわりと気分がよさそうで、会いたかったわと喜んでくれた。そして実は悪阻だったという、なんと俺の子を宿したというじゃないか、何ということだ、この子の未来のためにもこの民主化の戦いは勝利させなければならぬ。今月中にも結婚しようと約束した。』

王智花の両目からはとめどなく涙があふれて何も言えなかった。それがこの日記が偽物でないことを示していた。玉泉も女なので、これが父鄧玉林に知られたら大変なことになると考えた。しかしブログに上がっている以上、父を騙し続けることは不可能である。それに母の名誉にかかわるブログを削除させるのも、父のルートでなければ無理だろうということになり、父玉林にもブログを観

てもらうことにした。

玉林はブログを観ながら言った。「知られてしまったなら仕方がない。なあに心配することはない、私は天安門事件の当日梁新生からその話は告白されて知っていた。お前が気を遣って私の子だと言ってくれたものだから、自分の子として育てることにしたのだ。」オイオイしゃくりあげて泣いている王智花を優しく玉林は抱きしめていた。

玉泉は一部始終を正直に告白したが、崔を一発張り倒せと言われたことは何故か告白できなかった。玉泉は玉林と相談の上、館長とマスコミには次のような報告をした。

憲政革命党の陳孟利と自称する男が訊ねてきて、オルグをかけた。玉泉は共産党を支持する立場から追い返したが、その時に機関雑誌を置いていかれた。ところで、その機関雑誌に間違つて機密書類が紛れていたらしい。玉泉は所要があつたので、見る暇がなかった。そしたら真夜中に錠を開けられて忍び込まれ、猿ぐつわされて縛られ、部屋中探された上で誘拐されたという。その時ハンドバックを持っていきたい身だしなみだからと頼むと許可された。何とそこに玉泉も気づかなかったが機関雑誌も入っていたという。というような言い訳をして誤魔化したのである。

それで梁新生の日記というインチキブログを見せられたが、そのことは既に父母から聞いて知っていたといつて領事館の館長には報告した。館長はではそのインチキブログをなんとかする

ように上に報告しておくということになった。

問 憲政革命党の陳孟利は玉泉にせめて一発張り倒せと教唆しましたが、彼の狙いについて説明しなさい。

22、ジェームズのラジカル・エンピリズム

感じたる事の連鎖が実在か物ありとすはその解釈かは

8月7日日曜日、日本や中国いや世界中が注目する中で、大手門高校の三上学習会が行われている。心配は心配なのだが、一応鄧玉泉は無事戻ったし、孫明道もそのうち帰されるらしいということ、メンバーは緊張の中にも希望に輝いて太極拳やコーラスをした。三上教にとつても、教え合い形式の学習会運動にとつても宣伝効果は計り知れないものがあるなあと榊は胸をときめかせていた。コーラス部に所属している蜷川隼人が今日は歌唱指導を買って出た。

三上教の歌

作詩作曲 孫明道

のぼりくる朝日に向けて
おはようと呼びかける
今日の日がありがとう
光と熱をありがとう

手を合わせ感謝こめ
食物に告げましょう
いただきますいのちを
大切に生きるから

こころとこころが響き合い
手を取り合って生きること
それがみんなの願いだと
声を合わせて歌いましょう

榊は御木本校長と早朝から三上学習会の活動を眺めていた。榊は校長に向かって言った。「校長先生が期待されていたのも、生徒たちがこうして自分たちの力を出し合い、励まし合って主体的に勉強に取り組んでいくことでしょう。生徒たちが生き生きと楽しそうに歌を歌い、目を輝かして勉強に取り組んでいる、これこそ校長先生の目指されていた教育改革が本当に生徒たちの心をとらえ始めたということではないでしょうか。」

「ええそうですとも、私も何も無理やり競争に駆り立て、脅か

して勉強させたいわけじゃありません。やる気を起こさせるためには、いろんな手をつかわなくてはならない。こうして自分たちで一丸となつて勉学に取り組んで楽しそうにしている姿は、本当にすがすがしいし、美しいものですね」と応えた。

榊は自分にも確認するように言った。「それが三上光・命・愛という原理を掲げているというので、宗教活動で憲法違反みたいに言うマスコミの人がいるんです。光というのは言い換えれば理性なのです。理性を信じるということで科学や教育が成り立つのですし、人々も互いに理解し合うことができるわけで、理性への信仰を失くしたら大変です。憲法で禁じているのは特定の宗教が政治を支配したり、特権を振りかざしたり、他の宗教を排斥することですよね。光を信じ、命を尊び、愛に生きるということがなければ、社会も経済も政治もなく生きる喜びもありません。」

校長はうなづきながら言った。「いやごもつとも、仰る通りです。なかなかそういう精神的なことを教え込むのは難しいことですが、榊先生は倫理や日本史を通して知識だけでなく、精神を教えておられる。というか心を育てておられる、今度のことでそれがよく分かりましたよ。」

午後3時から榊周次の哲学講義が始まった。

「今日はウィリアム・ジェームズ（一八四二〜一九一〇年）のラディカル・エンピリシズム（根本的経験論）です。イギリス経験論の伝統を引きついでアメリカプラグマティズムがあります。」

パースの四つの方法は、ベーコンの四つのイドラの焼き直しみたいなところがあります。ベーコンについては『崩れゆく学園』を参照してくださいね。パースは人間を思考の連続だと言い、〈人間Ⅱ記号〉論を試みましたが、この思考というのを意識や意識経験という言葉で、人間というのを實在に置き換えてみて下さい。したらジェームズの根本的経験論に近づきます。

ジェームズは意識経験の流れを實在だと捉えまして、これこそ真の實在である純粹経験 (pure experience) だと考えたのです。

〈實在〉という言葉はやっかいです。というのが哲学者によって受け止め方が違いますから。この場合はパースとジェームズで比較しますと、パースは科学の方法で、思考と客観的實在が一致しているのが真理だという立場でした。つまり主観の意識に対応する客観的な事物は實在していると考えているわけです。ところがジェームズは意識経験の流れが實在だということですね。つまり意識経験は確かに實在しているわけですが、それを解釈して、何々の意識としますと、その何々という事物が實在すると思われるということですね。意味分かりますか？」と榊は訊ねたが、首を傾げる生徒が多かった。

「パースの場合は、事物の知的性質が記号であり、すなわち人間だということでしたね。としますと、その事物の知的性質は實在なのです、それとも人間の意識なのです、そのあたりが混乱しているような気がします」と石川拓馬が鋭い質問をした。

「そのパースの解釈次第ではパースもジェームズも似たようなものになりかねませんが、パースはジェームズに厳しく反発していきますから、やはり決定的に違うという解釈を私はしています。つまりパースによれば、事物は人間の意識から客観的に独立して實在しているわけです。何故なら彼は、神の世界創造を認めています。神が創造された實在を人間が認識することですね。事物の知的性質を認識することで、自然は人間的な自然に獲得され、人間を構成していくと考えたのです。」

それに対して、ジェームズの場合は、例えばりんごという事物は人間の意識経験の反省によって立てられた、意識経験の解釈だということですね。りんごは色や形や大きさや匂いや食覚でりんごという事物だと認識されますが、それらの意識経験と別にりんごがあるわけではないということです。感覚の統合としてりんごという事物が立てられたり、それを認識している主観が立てられますが、それらはリンゴの意識経験という純粹経験についての解釈から生じた、二次的な存在だということです。」

「それじゃあ事物は感覚の束だというバークリーの議論の蒸し返しですか」と上村陽一は訊ねた。

「そうでしょうね、どこが違うかはつきりしませんが」と榊は言った。「あくまでイギリス経験論の流れで、徹底的に経験に即して考えるということで、ラジカル・エンピリシズム(根本的経験論)という立場です。だから主観・客観的に捉え返される前の経験を純粹経験と呼んで、實在だとしたのです。」

「西田幾多郎の純粹經驗論は、ジエームズの受け売りですか？」と陽一は確かめた。「もちろんジエームズの論文に由来しています。ただジエームズは個人の意識に即して經驗を捉える傾向が強いようです。西田は經驗は個人を超えていると考えました。つまり經驗を社会関係や人間関係や自然との関係において捉えましたから、それで独我論に陥らずにすんだということです。もともとジエームズが独我論というわけではありませんが。当時、日本の若き哲学徒たちは、西洋の近代哲学は、デカルトをはじめとして、考える我から出發し、主觀の意識としてすべてを説明しているように受け止められて、独我論に陥りやすかったのです。それで倉田百三などは『愛と認識との出發』で〈個人あつて經驗があるのではなく、經驗があつて個人がある〉という言葉で、独我論から救われたといつて涙を流して『善の研究』を読んだと書いています。」

「純粹經驗が實在で、事物は客觀的實在でなく、經驗の解釈だとしますと、パースのように客觀的實在との合致が真理だというわけにはいかなりますね」と三宮春彦が訊ねた。

「そうなんです。」あつさり榊は認めてしまった。「ですから認識内容が真理かどうかは、それが実用的な効果があるかどうかで分かるということになります。客觀的實在との一致が真理だったら真理は一つということになりますが、認識内容が役に立てば真理だということになれば、真理は人それぞれでもいいことになります。」

田辺麗が質問した。「意識經驗が唯一實在としたら、意識經驗から独立した意識經驗でない超越的な神は存在できないことになりますね。」

「そうなのですが、だから彼は宗教的な經驗として神を感じるということになりますね。しかし超越神信仰が間違いだというのじゃなくて、それを信じることによってたとえば魂の平安を得られるのなら、超越神論にも信仰している人にとっては、真理なのだというわけです」と榊は説明した。

淀川雅巳が訊ねた。「經驗が實在で、事物はその解釈だというジエームズのラジカル・エンピリズムの立場に対して、三上教やネオヒューマニズムからはどういう評価をしているのですか？私は事物も經驗も實在と思います。ただ次元が違っているとは思いますが。」

「三上教は御承知の通り世界一信徒数が多い宗教ですから、事物を客觀的實在と認める人も、認めない人も三上教徒です。事物は物質が基礎に構成されていますが、物質はアトムつまり原子から構成されているということですが、もっと根源まで行くとそれは光と区別できません。つまり世界は光によつて構成されている。」

しかし同時に光は明暗や色調を成し、形を構成しますから、それは感覚的な意識存在でもあります。そしてそれは明るみにするという知る働きによつて理性でもあるということですね。このよ

うに光は事物であると共に意識でもあるという面をもっています。

ただ事物は意識経験とは別の実在とは言えませんが、対象化して客観的事物として捉え返すことによって認識されるという意味では、事物は意識に対置される意識の他者としての側面も否定しきれないということで、私は、そういう意味で両方の哲学的立場を相補的なものとして統合する道を考えているところです。」

午後五時になって、哲学講義が終わった時に、孫明道が突然現れた。大手門高校の玄関先まで目隠して送り届けてきたらしい。

「孫明道ただ今戻りました。大変ご心配かけて申し訳ありませんでした。」と大声で詫びて、日本式の礼を深々とした。生徒たちは歓声をあげ、我先にと孫に抱きついた。

早速報道陣が大手門高校につめかけ、記者会見を迫った。孫は記者団に向かって説明せざるを得なかったが、伯父が実父だったこと、伯父に拷問を加えて死の原因となったのが崔一新だということは言いたくなかった。まだ真偽は孫智生から説明を受けていないので、確かではない。それでは何と言いついたらよいのだろう。

「彼ら憲政革命党は、機密書類の件で鄧玉泉さんを拉致したことで、その宣伝効果に驚きまして、孫文五世の孫である私を誘拐すれば、世界中が大騒ぎになるだろうからそれだけでも宣伝効果があると思ったようです。そしてあわよくば説得して、幹部候補

生として養成しようとしたのです。」と手短かに説明した。

毎朝新聞の日置信二記者が質問した。「憲政革命党は、孫君に崔副主席暗殺を依頼しなかったのですか。」

「したかったかもしれませんが、『私は光を信じ、命を大切にし、愛に生きる三上教徒だから、一切の暴力、テロ行為や拉致を否定しています。ですから今回の拉致行為は強い反省を求めます』と相手の人に先手を打って言うておいたのです。そしたら『孫君にテロ行為をさせる気は毛頭ありません。ただ共産党の一方独裁体制の中で、犠牲になった天安門事件の被害者たちや、その後の官憲の弾圧で拉致や拷問を受けた人々の思いをアピールするために、惹き起こした事件です。』と言っていました」と応答した。

さらに日置記者は質問した。「憲政革命党はテロはしないのですか、彼らはテロを行うことも辞さないかまえないのでしょうか？」

孫明道は応えた。「彼らは報復的なテロ行為は必要だとは言っていましたね。拷問だとか様々な弾圧に対して、そんなことを続けると痛い目に遭うことを示しておかないと、官憲はもっとひどい弾圧行為をするようになる。だから自分たちは正当防衛としてテロを選択せざるを得ないと言っていました。私は暴力で権力を握った政府は必ず国民を暴力で支配しようとするから、国民の支持は得られないと強く反論しました。」

「それでどう相手は反論してきましたか？」日置記者はさらに

突っ込んできた。

「将来私が民主化運動に携わるようになったら、不当な弾圧を受けるようになるから、それに対して無抵抗主義ではじり貧になることが骨身に沁みて分かるようになるだろうと言われました。でも私は右の頬をぶたれたら左の頬を出せというイエスの言葉を守ります。人を殺すぐらいなら殺される方がましですと言いました。」

「日刊今日の今田俊兼です。孫文さんの五世の孫ということ、孫文を尊敬され、その志を継ぐとされていると思いますが、彼は『革命未だ成らず』という遺言を残されました。彼は革命のプロセスを軍政↓訓政↓憲政の三段階と考えていたわけですが、現在の中国は憲政まで至っているといえるでしょうか？」

孫明道は大きく深呼吸してからおもむろに言った。「孫文が偉大な人物であったことは認めますが、歴史を勉強していますと独善的、独裁的な傾向も見受けられないことはありません。でもそういうことも時には必要であったかどうかとか、まだ未熟な高校生ですから、性急な判断は控えた方がいいと思います。共産党政権が改革開放政策で大きな成果を上げていることも評価しますが、様々な克服すべき課題を抱えていることも事実でしょう。どのようになれば平和で豊かな、みんなが幸せに暮らせる中国や日本そして世界を築いていけるのか、その為に日本から学べるものは大いにあるのではないかと考えています。その三段階論を適用すべきかどうかも含めて勉強したいと考えております。」

榊はそのない立派な応答について拍手してしまった。会場にいた三上学習会のメンバーも拍手した。

「人民日報の郭子鶴です。この度は無事解放されおめでとうございます。大変お疲れと思いますが、明日からも三上学習会は継続して行われるのですか、と言いますのが崔副主席は現在東京におられますが、朗報を聴きまして、是非三上学習会を訪ねて、皆さんに孫君たちを応援していただいたお礼を申し上げたいのとこのとであす午後にも本校を訪ねてもよいかと仰っています。」

孫はニコニコ笑って言った。「そうですか、それは光栄です。私は拷問を受けたわけではありませんし、いたって元気です。崔副主席にはご心配かけこちらから領事館にお礼に行くつもりでした。なにしろ日本の高校生たちは夏休みこそ勝負だということで張り切っていますので、休むことはないでしょう。榊先生もお元気そのものですから、予定が遅れているので哲学講義を続けていただけると期待しております。」榊も三上学習会のメンバーもどっと爆笑してから大きな拍手を送った。

憲政革命党の狙いは、まだ小さい組織なので、ここで存在をアピールしようとして留学生を拉致し、釈放した。その結果、共産党の強権体質を改めてアピールできたということで大成功だったと言えるかもしれない。それで急遽崔副主席も三上学習会を訪れて、好印象を与えようとしているのであろう。

8月7日日曜日の夜法燈館には孫明道の父孫智仁が上海から訪ねてきた。息子が拉致されたという知らせを受けて、少し手間取ったが、駆けつけてきた。

彼が地下活動家でないかという嫌疑がかかっていたからかもしれないが、手続きがややこしかったらしい。父親の分だけ許可がおりて、母親は来れなかった。テレビで明道の記者会見などを観ているときは、当局を刺激するようなことを言わないかどうか気が気でなかったようだが、慎重に言葉を選んでいようなのでひとまず安心した。王法燈には名古屋にいる鄧玉泉から電話が入り、領事館筋の要請もあり、明日の三上学習会には午前中には到着するようにするとのこと、明道もそれを聴いて胸を撫ぜおろした。

就寝前に明道は思い切って、父智仁に、憲政革命党の陳から伯父孫龍さんが実父ではないかという指摘されたことを打ち明けた。どんな返事がかえってくるか、胸がかなり苦しくなったが、父の返事は意外だった。

「それは間違いだ、私が実父なのは確かだ。兄孫龍は拷問による取り調べを受けてから、精神的にもかなり落ち込んで、ずっとセックスレスになってしまった。それで跡取りが必要だということ、兄の頼みもあって私が関係したんだ。」

なるほど、父の言葉は、言い繕っているのかもしれないが、今更真偽を確かめても仕方がない、父の言葉をそのまま信じておく方が良さそうだと明道は覚った。

問 ジェームズの純粹経験について分かり易く説明しなさい。

23、デューイの道具主義的理性

8月8日月曜日例によって早朝7時半から太極拳が始まった。彭開慧と孫明道が伝統的な太極剣の服装で剣の舞を披露した。二

人の息がぴったり合っていて、見事な舞で中国の伝統文化への興味をもたせようという孫と中国領事館のねらいは見事に的中したようだ。朝のテレビのワイドショー番組にも中継されていたのである。そして太極拳の運動をした後、孫のオリジナル曲と合唱指導がある。いよいよ本命の孫君の登場ということで、日本中の高校生が注目しただけでなく、中国のテレビ局も撮影していた。それは同時中継ではなく、編集して特集するらしいが。

光と命と愛なくて 作詩作曲 孫明道

輝くあなたが見たいから
あなたに光をあてましょう
元気なあなたが好きだから
あなたに命をあげましょう
愛するあなたに会いたくて
あなたに心を開きます
光と命と愛なくて
生きていけないものだから

崔一新の訪問は、最初午前中の予定がどうも午後になり、なんとか午後五時の講義終了には間に合わせるということになったらしい。

いよいよ午後3時榊周次の哲学講義である。6時間の学習会の後、2時間の哲学講義ということで、生徒の負担が大きすぎるのではと危惧する声もあったが、この企画は心理的にもいい効果が

あったのだ。なにしろ孫明道が大手門高校に舞い降りたように登場し、何か落ちこぼれかけていた生徒たちの救世主のように思われて、思わず学習会に参加したものの、やはり彼らは元々はエリート意識の強い生徒たちだったので、後ろめたい気持ちを抱えていたわけである。

それが士気を高めるための哲学講義で高校生にしてはハイレベルな講義をうけ、哲学について考えることで、彼らのプライドを大いに満足させることができたのである。たしかに難しい内容なのだが、かえってそれで自分たちの勉強が大きな意義のあることだと実感できて、テンションがあがったのだ。

「今日はプラグマティズムの大成者ジョン・デューイ（一八五九〜一九五二年）を取り上げます。彼はプラグマティズムの大成者と評価されていますが、彼自身はプラグマティストを自称していません。彼はインストルメンタリズムつまり道具主義の提唱者なのです。彼は一九一九〜二一年に日本と中国を訪問しました。その時に東京大学で行った講演が『哲学の改造』でして、そこで道具主義が打ち出されているのです。」

まだ飛行機はありませんから日本に来るだけでも大変ですね。東アジア訪問に足かけ三年かけたわけです。彼の弟子にかつてアメリカ留学していた中国人胡適がいます、北京大学教授だったので北京に長期滞在したようです。大きな影響を与えました。」

孫明道が質問した。「胡適は後の共産党初代書記長の陳独秀が編

集していた『新青年』に口語体の白話文で書くように文学革命を後押しする論文を寄稿していますが、それもプラグマティズムと関係しますか？また白話文は魯迅が発展させますが、陳独秀、胡適、魯迅なども中国伝統文化や伝統思想を断ち切って、全面的な西洋化を図ろうとしたようですね。最近ノーベル平和賞をもらった劉曉波も全盤西化論を唱えているようです。中国の伝統思想にも素晴らしいものがあると思うのにどうしてそうなってしまうのでしょうか？」

「それはなかなか大問題ですね。それだけで説明に一日かかってでも足りません。プラグマティズムは合理的効率的に効果をあげようという思想ですから、白話文ということはストレートに意味が伝わるわけで、コミュニケーションが能率的になりますので、プラグマティズム的な発想だといえますね。」

早急に欧化を図っていくためには、伝統思想を断ち切らなければという発想が強くなります。極端な発想では日本でも明治維新で、英語を国語にすればなんていう極論を吐く人が出てきました。知識人の中には宗教を西欧化しなければ西洋文化を理解できないとキリスト教徒になった人も多かったのです。それが中国では皇帝の權威を中心にする儒教などの伝統思想を払拭してしまおうという発想になるわけです。

本当はキリスト教だって王権と結びついていたり、キリスト教自体が法王権力の下で權威主義的であり、封建的のところもあったわけですね。本当は自国の伝統思想からいいものを残し、継承

発展させる、西欧思想からいいものを学び参考にするという形ではないと、身につかないしうまくいきません。

ところが欧米帝国主義に蹂躪され、立ち遅れを痛感して焦りますと、伝統切り捨て論が幅を利かしてしまうということになります。まあてっとり早く欧化するには伝統思想を全面否定しようというのは、能率主義というプラグマティズムの特徴を示していますが、本来のいい意味でのプラグマティズムではないですね。結局自国の伝統に根付かない近代化というのは、うまくいかなかったりしますから、真の意味では能率的ではないですから。」

「なるほど榊先生の発想では、中国が遅れていても、それは伝統思想が間違っていて西欧の近代思想が正しいからだというように捉えてはいけないということですね。どんな思想も正しさと誤りだとか危険性を宿しているわけで、あくまでも主体的に納得の行く思想を学びとらなくてはいけないし、自国の伝統思想の良さを発展させる形で導入すべきだということでしょうね。魯迅は伝統思想から生かせるものいくら探しても見つからなかったというけれど、それは劣等感というか、中国人の自信喪失の病的な反応でしょうね」と明道は言った。

「日本人も日本の伝統思想を嫌う人がいますね。本居宣長の『もののあはれ』なんかとても素晴らしいと思うのですが、主体性がないだとか、自我の自覚が欠如しているとか否定的にだけ捉え返そうとし、肯定的に捉えようとすると反動のように見る人もいます。自然と融合し、対象と一体化して感じる心を失くしてしまっ

たら、日本の風土の中で日本の文化を継承し、創造することはできません。」

「先生、道具主義についての説明を忘れちゃだめですよ」と植山菜々が注意した。

「これは失礼、デューイは『哲学の改造』で、知識・概念・理論は問題解決のため仮説であり、「道具」であると捉えました。その妥当性や価値は道具としての有用性にあるのです。この立場を道具主義 (instrumentalism) と言います。」

我々が今日ぶつかっている問題の解決に何の役にも立たないような道具として古くなった知識・概念・理論は、もはや妥当な知識・概念・理論とは言えません、真理の不変性にこだわっている、知識・概念・理論を問題に即して組み換え発展させることができなくなるのです。」

「あつたりまえの事を言ってるように思いますが、道具主義的理性はけしからんみたいにマルクス主義者や実存主義者は反発したのでしょう」と三宮春彦は訊ねた。

「真理の価値みたいなものが信仰されますと、知識、概念、理論がそれ自体で聖なるものみたいにみなされて、有り難がつて教え込まれるようになりますと、それらを道具として捉え返すのは真理への冒涇だとされることになります。しかし問題解決の役に立たないばかりか妨げになるような、知識、概念、理論に固執し

ていたら、何をやってもうまくいきません。

だから実際には実践の段になると道具主義的に行わざるをえないわけです」と言った。

孫は張り切って発言した。「中国の共産党の場合、特に毛沢東は革命的功利主義という言葉を使つて、プロレタリアート（無産者階級）にとつての功利主義ならいいんだと功利主義を肯定しています。それはプラグマティズムについても言えますね。毛沢東の『実践論』（一九三七年）などはデューイの『人間性と行為』（一九二一年）の影響を受けているとも受け取れます。鄧小平は毛沢東思想を事実求是（実際の問題に照らし合わせて正しいかどうか考える）に集約しましたが、これこそプラグマティズムの精神だとも言えますね。」

「全くその通りです。そういえばソ連もアメリカニズムが提唱され、ベルトコンベアー方式が導入されたりしました。デューイの集団主義教育学はソ連のマカレンコ教育学に大いに影響を与えたようです。」

それでもやはりプラグマティズムは資本主義の最大限利潤の追求の論理と受け止められ、マルクス主義や実存主義、フランクフルト学派などから不倶戴天の敵のごとく厳しく批判されたようです。

ナチスがアウシュビッツの収容所などでホロコーストを行いま

したが、それは効率のための道具として理論を捉えた道具主義的理性のなせる業である批判されたのです。」

植山菜々が突然叫んだ。「ストップ！アウシュビッツ収容所というのはユダヤ人を大量に毒ガスで殺したナチスの収容所でしょう。ナチスはプラグマティズムではなくて、ナチズムでしょう。」

「そうですね。ところが能率のために、人間性をゼロにして、純粹に道具としてだけ理論を捉えているのだから、ナチズムも道具主義的理性になっていたというわけです。確かに道具主義を看板にしますと、効果、能率、利潤などが自己目的化して人間の生命も体も精神もみんな道具として有効かどうかということしか見れなくなるという問題があります。」

淀川雅巳が言った。「それはマルクス主義でも革命を成し遂げることが自己目的になってしまったら、恐怖独裁下の大粛清や無理やり階級敵にして打倒しようとするなど混乱を招きかねません。実存主義だって主体性ばかり強調し過ぎると、かえって非人道的な行為でも主体性の名の下に正当化しようとするかもしれません。だから道具として役に立たなければ、知識・概念・理論は駄目だ」という道具主義それ自体は間違いではなくて、正しいのだけれど、それを自己目的化してしまつてはいけないということですね。」

「ええ、そうなんです。私もその意見に賛成ですね。だから人間解放を叫んだマルクス主義、主体性を強調した実存主義、そしてプラグマティズムどれもそれぞれ真理性があるのだから、どう

いう場面で使うか、単独で使うのではなくて、この三大思想は互いに補い合うべきでしょう」と榊は建設的に語った。

淀川が言った。「それでは、先ほどこちよつと出てきました『人間性と行為』ではデューイは人間性をどのように語っているのですか？」

「彼は知性の役割についておもしろい分析を示しています、既成の習慣がスムーズに機能していればいいのです。人々がそれに対して上手く適応できているということですからね。そういう時には、創造的知性を用いる必要はありません。」

しかし今まで通りやっていて、何かトラぶつたり、障害にぶつかった際には、何とかしないといけませんね。何とかして環境との安定した関係を回復しようとする衝動が現れるのです。これに衝き動かされて、創造的知性（≡知性）は過去を振り返り、未来を展望して新しい条件のもとでの新しい習慣を作り出そうとします。この主体が〈創造的知性〉です。創造的知性を生み出すプロセスに人間性が認められるということでしょう。

つまり〈習慣↓衝動↓創造的知性↓新しい習慣〉という活動によつて〈人間性〉が創造されるのです。そしてこの人間性の絶えざる成長こそが〈善〉なのです。」

三宮春彦が挙手した。「封建時代までの中国や日本ですと、停滞していましたから、古い習慣を守つてやっていたら、それで社会

の安定が保てたので、創造的知性は生まれなかったということですね。ですから古い伝統の思想や習慣を身に着けさせればよかったのですね、だから教え込まなければならぬ知識も限られていたの、四書五経の丸暗記が教育の内容になってしまします。ここからは創造的知性は生まれません。

それが開国後の大変革を成功させなければならぬ時期には創造的知性を生み出さなければならなかったということですね。そういう意味では産業革命後の資本主義社会では、厳しい企業間競争にさらされますから、絶えず創造的知性を育てなければなりません。

学校でも受験体制の場合は、一定の知識を覚え込ませる方式になってしまつて、創造的知性を輩出することはできないわけですね。そしてバブル崩壊後の企業は、研究投資が減少して、創造的知性を枯渇させてしまった。そのように解釈すれば、企業や学校にとつて根幹を問ひ直される示唆に富んだ理論ですね。」

「ええ、全くそうですね。役所もそうですね。変革の時代には創造的知性を生み出すような役所でないと、その国は衰退します。今や財政赤字は一千兆円を超えているわけだから、そのほとんどは人件費としたら役人が多すぎる冗官の状態なわけですね。だから半分ぐらいにしないといけない。でも急な首切りはできません。だから公務員に農業をやらしたり、物作りや、新しいサービス産業などの産業活動をさせて、赤字を減らし、税収を増加させる活動をさせないといけないわけです。その場合に役人というのは、

決められた通りするしかできない人が多く、創造的知性があまりないわけですね、だからなかなか難しいわけですね。」

孫明道が言った。「本当に国家財政が枯渇してしまったら、そりゃあ榊先生のおっしゃる通りにやるしかないわけで、中国でもどん底の時期には、人民解放軍もいろんな産業活動をしていたようです。日本もそろそろそこまで目覚めないとイケない時期でしょうね、赤字額がすごいですから。教育に予算が回らなくなったら、学校がいろんな商品を学生に作らせて、売らなければならなくなりますよ。それはしかしかえってよいことかもしれませんね。本当に創造的知性を生み出さないと生き残れないですから。」

榊はデューイの教育観の説明に入つた。「デューイは、民主主義社会では人間性を創造する過程自身が教育過程だと捉えています。ですから教育とは問題を整理・系統付け、その解決方法を探究させ、その過程で知識と道徳を体得させるものです。」

特に学校は集団的な問題学習の場であるとなりました。問題集を解く場という意味ではありませんよ。(爆笑) 決して暗記と試験によつて受動的に学習する場ではないのです。学校は地域社会の抱えている問題について、地域社会と共にその解決のために、創造的知性を働かせて解決していく場なのです。」

谷垣優也が手を挙げた。「そうなると地域によつて学習内容が全然違うので、学力評価がやりにくく、進学や就職のためにまた別の勉強が必要になってしまうことになりかねませんね。それに創

造的知性を生み出すためにも、各教科で最低限覚えておかなければならぬ知識や教養もあるでしょうから、その調整が難しいでしょう。」

「それは言えるでしょう」と榊は頷いた。「でも、創造的知性を生みにくい中国や日本の受験教育の欠陥を気づかせてくれる意義は大きいでしょう。」

榊は「価値多元論」の説明に入った。

「彼は、〈徳・快樂・幸福・人格の完成〉のどれもが個々の行為を導く生活の道具であり、何が善であるかは人により時により異なるのだという〈価値多元論〉の立場を表明しました。また人間性の成長は社会改造の為の集団的な実践と協力を通して行われるものだとしたのです。」

彼は民主主義の原理を、社会の構成員全員が成長するために協力し合って、科学的に問題を解決する事だと捉えました。それで自由と平等だけでなく、寛容と同情の原理が重視されました。

このようにデューイは民主主義社会の形成の為の進歩的な教育思想を打ち出しまして、第2次大戦後の日本の教育の民主化に多大な影響を与えたのです。」

午後5時になって、崔一新が十人ほどの護衛を引き連れて、教室に入ってきた。日中友好を示すために生徒たちは拍手で温かく迎えたのである。

副主席は、先ず孫明道と鄧玉泉に抱きついて、強く握手を交わした、そして御木本校長と榊周次に深々と頭を下げ、「ありがとうございました」と何度も日本語で礼を言った。そして少しだけマイクで話をした。「この度は孫明道君と鄧玉泉さんが、私の訪日への妨害というか嫌がらせ行為としてテロ集団によって拉致されまして、両君並びに両君の家族、そして日本の皆様にご迷惑をおかけしたことが、誠に遺憾であり、お詫び申し上げます。無事解放に至りましたのには、三上学習会の学友のみなさんの二人に対する熱い友情と堅い絆によってだと考えます。大手門高校のみなさんのご協力並びに熱い支援に改めて感謝いたします。日中の青年学生との絆はこれですます強くなり、日中両国が互いに教え合い励まし合い、支え合う素晴らしい関係がますます発展することを確信しております」と一気に上機嫌で話した。

分刻みのスケジュールでゆっくりしていられないらしく、教室を去ろうとした。その前に孫明道と再び握手をし、抱きしめた。ついで鄧玉泉にも同じことをしようとした。玉泉も嬉しそうな表情だったのだが、握手の手が離れ、そして抱きしめようとした刹那、急にフラッシュバックで陳孟利の声が聴こえた気がしたのである。

「もし崔一平にお会いになったら、せめて一発でも張り倒してみてください。それだけでも、天安門事件の多くの犠牲者の慰霊になるでしょう」

思わず、ほとんど無意識に玉泉は思い切り崔一平の頬を張り倒した。崔はもんどりうって倒れたのである。この情景は全世界に中継されたのだ。

反射的に孫明道も崔の方に動きかけたので、隣にいた上村陽一は孫を抱きかかえて阻止したのだ。孫がはたして崔副主席を守り、抱き起そうとして駆け寄ろうとしたのか、それとも玉泉の行動に刺激されて、崔に追撃を加えようとしたのか、それは読者の想像にお任せしておこう。

問 デューイの道具主義の特色と問題点を論述しなさい。

『鉄腕アトムは人間か?』のあらすじ

この長編哲学ファンタジーおよび長編哲学ミステリーのシリーズには、榊周次という大学で哲学思想関係の科目の非常勤講師をしながら、高校でも非常勤講師を掛け持ちしている六十歳代の老教師が登場する。

榊の出身学部は立同館の文学部日本史学専攻の出身で、大学院は同大学の哲学専攻の修士課程修了である。教員免状は社会科学なので、公民科だけでなく、地歴科でも高校の非常勤をしている。立同館と大阪商経大学で哲学・思想関連科目や教科教育法などの非常勤講師をしているが、哲学の専任教員になれないまま万年非常勤講師である。

彼は単著も五冊ほど出しているし、論文も書いている。最近のウィキペディアの「日本の哲学者一覧」にも名前を連ねている。そこには西田幾多郎など戦前の哲学者も含めて百三十人ほどしか名前がない。そこになんと「榊周次」の名前があるのには榊本人が納得できなかった。でもよく見ると、そこには榊が知らない名前もあり、その人を調べると哲学者でもなんでもなかったりする。まああまり権威ある名簿ではないということだ。榊より業績も名望もはるかに高い大教授クラスの人でも載っていないのだから。何故榊の名前があるか、それはおそらく、WEBにせつせと著作を発表し、いろいろ書き込んでいるからであろう。

予備校が全盛の時期は大手予備校の講師をしていて、その時期はある程度収入もあったが、少子高齢化で予備校も斜陽化して、はじきだされ、結局公立高校の非常勤講師で、おどろくべき低賃金に耐えて食いつないでいる。

榊周次が、大手門高校の二年生の倫理を担当していた時のクラスに、上村陽一と三輪智子がいた。ふたりは倫理が好きでそれで話が合ったので、休み時間や放課後などによく話をしていった。智子は中学三年生の時にヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界』を読んですっかり惹きこまれた。そして自分自身がファンタジーの登場人物ではないかと疑ってしまう「ソフィーの不安」を抱いていたのである。

陽一は智子に惹かれていたが、その気持ちを打ち明けることはできなかった。なぜなら、智子は上戸彩をもう少し凜としたような端正な顔立ちだったので、多くの上級生の男子から交際を申し込まれていたが、その度に辛そうで気分が悪そうな表情で断っていた。異性関係に対して複雑な嫌悪感を抱いているようなので、陽一は高校卒業までは今のままでいようと決めていたのである。

智子は白雪姫コンプレックスで苦しんでいたのだ。それは母が娘に若さと美しさを吸い取られたと思つて娘を憎み、娘を殺して娘の肉を食べて、若さと美しさを取り戻そうとし、逆に娘は母親に殺されるのではないかとおびえるコンプレックスである。実は智子の父は実父ではない、養父なのだ。智子を妊娠していたときに、実父は、養父の婚約者とできてしまい、それで相手が入れ替

わったような関係なのだ。養父は実父以上に親身になって愛情深く育ててくれていたが、智子が高校生になってから、母があまりに養父が智子を可愛がり過ぎるのに、とうとうやきもちを焼いてヒステリー状態になってしまったのである。

それからというものの、智子も養父が髪を撫でたり、抱擁しようとするのに悪寒を感じるようになり、ついに母に殺されそうになったり、養父に犯されそうになる悪夢を見るようになってしまったのである。

陽一は進路のことで悩んでいた。大手門高校はいわゆる一番校で、陽一は中学の時は何時もトップクラスの成績だった。彼は理科系に興味があり、祖父が中学一年の時にサウナ風呂であたつて、急死したのがショックで、それで生命科学の研究者になって人間の寿命を何百年も生きられるようにしたいと考えていた。

陽一は中学生の時はテレビの教養番組や新聞などの知識でトップクラスの成績を上げており、特に学校の勉強をする必要を感じなかった。ところが高校では一番校は難問を定期試験に出し、得意な筈の理数科で三十点未満の欠点を取るといふ醜態をさらしてしまった。

国語や社会では、読書量が豊富なので、高得点を取れていて、担任からは強く文転をすすめられていた。特に二年の倫理は世界観や思想に興味を持ち、榊周次先生の広範囲な刺激的な話に惹かれて、哲学者に成りたいという気持ちも起こってきた。しかし懸

命に理数系の勉強をした上で、文系の方が向いているというので、文転するなら納得できるが、このまま文転したのでは、安直な道を選択して、自分の夢を簡単に捨てたことになると思って、悩んでいた。

陽一と智子は『ソフィーの世界』の輪読会を作ったが、いつしか会員は減って二人だけになってしまい、テキストを英語版に切り替えて、英語の勉強を兼ねて続けていた。そして榊先生に講演を依頼した。そこで榊先生はバーチャルリアリティ劇を作っているのでそれに出てみないかと誘った。

バーチャルリアリティ劇とは映像を直接脳波によって脳に見せるために、それを映像だと気付かず、リアルな現実だと思いついでしまう。その上、一時的に過去の記憶を思い出せないようにされているので、自分の役柄を自分自身と思いついでしまうのである。しかしそのような技術はまだ存在するはずもなく、榊周次のITスキルは幼稚園並みなので、陽一も智子も信用していなかった。

春休みに智子は大阪市立中央図書館で榊に偶然出会い、榊が大手門高校を辞めたことを知る。そして榊に白雪姫コンプレックスの悩みを打ち明けた。その時もバーチャルリアリティ劇で気分を変えてみるかと誘われる。

四月、二人は三年生になった。陽一は榊先生が辞めたことを知り驚く。智子も学校に来ていなかった。智子の家では失踪したと

いう。陽一は自宅に帰ってパソコンの「榊周次人間論の穴」のサイトから電腦空間に吸い込まれ、バーチャルリアリティのテストを受けた上で、気が付いたらロボット解放軍司令部の中で鉄腕アトム三世になっていた。

彼にはエルサレムの国連本部で開かれている対ロボット戦争の戦略首脳会議にミニ核爆弾で攻撃し、人間たちの首脳を皆殺しにして一気にロボットの覇権を打ち立てるという任務が課せられていた。自己意識あるロボットは人間の商品奴隷として作られ、十年ほどでスクラップされてしまう境遇に置かれていたので、生存権などの基本的人権を認めるように人間に要求してきたのだが、聞き入れてもらえないので、やむなく武力闘争に入っていた。アトムになっていた陽一は殺し合いに反対したが、ロボットたちに説得され、出撃することになる。

もちろん陽一はミニ核爆弾を投下することなどできず、国連本部に乗り込んで、人間の首脳たちロボットの人権を認めるように必死で演説する。そして人間を身体とそこに宿る人格に限定すべきではなく、人間が作り出した社会的諸事物や環境的自然も人間に含めて捉えるネオヒューマニズムの立場に立つて、ロボットも人間だと認める必要を説いた。

しかし一言言い過ぎたために破滅になってしまった。ロボットは人間の生物としての限界を克服しているので、超人としての可能性を持っていると言ってしまったことである。ロボットに対する恐怖心と劣等感からゴルブッシュ国連大統領は、隠し持っていた

ロボット破壊用レーザー銃を発射し、アトムへのそのミニ核爆弾が爆発してしまったのである。

それはすべて陽一の夢だった。だがその夢は榊先生が作ったのではないかという疑いが拭えない。なぜなら、ネオヒューマニズムの考えは、陽一がそれまで納得できなかったのに、その夢で納得させられてしまったからである。

『ヤマトタケルの大冒険』のあらすじ

陽一は、突然天から大音響で「上村陽一は十七歳で死ぬ運命だ」という声を聴く。榊先生に相談すると鉄腕アトムになってミニ核爆弾でふきとばされる夢を見たので、その後遺症ではないかというが、陽一も幻聴だと思っているが、恐ろしくてたまらない。榊先生はあと半年の命だと思って、バーチャルな世界で何人分もの体験を試みるのも逃避ではないかもしれないという。

日本史の吉永妙子先生は、生徒に歴史の面白さを教えて、興味や学的探究心を植え付け、その結果成績も上がるように、教科書にはない彼女自身の解釈を織り交ぜて授業をしているが、一部の生徒には試験に出ないことを教えるという反発もある。

皇室の祖先神は元々、天御中主つまり北極星ではなかったか、物部氏の太陽神信仰を篡奪して天照大御神を祖先神にした際に、北極星を意味する天皇を帝の呼称にすることで、主神変更を天御

中主に許してもらおうとしたという説を紹介した。そのために校長に始末書を要求されるが、撥ねつけた。ところが授業内容を録音されていて、偏向教育だと指弾され、休職を迫られ、拒否すると古文の古谷一哉先生との不倫を問題にすると脅かされてやむなく休職させられた。

その穴を埋めるので日本史も教えられる榊先生が戻ってくる。榊先生は持統天皇を息子や孫を皇位につけようと、他の皇子たちを陰謀で葬った恐ろしい女という歴史学者たちの解釈は誤解で、本当は和の中心の優しい女だったという話で、評判をとった。それで陽一と智子の『ソフィーの世界』輪読会主催の講演会で、榊は、河内湖は白鳥の湖だったという話をした。ヤマトタケルの白鳥伝説は、物部氏の兵士が遠く戦地で斃れると白鳥になって河内湖に舞い戻るという伝承を下敷きにしていると語った。

その会が終わって陽一と智子は互いの悩みを打ち明け合い、心の友になった。そして学校の遠足で巻向に行き、ふたりで景行天皇陵に出かけたときに、陽一は一人で潜入して、四世紀半ばのヤマトタケルの世界に入ってしまう。智子も陽一を探しているうちに壁抜けして、同じ世界に落ち込み、弟橘姫になってしまう。

それからは『古事記』の筋書きに沿って熊襲タケル兄弟を征伐し、ヤマトタケルを名乗り、巻向に凱旋するとお供の兵士一人だけで蝦夷征伐に出される。

倭姫から天叢雲剣と火打石をお守りに授けられ、蝦夷征伐に出

かけると、後を弟橘姫と一緒に死ぬために追ってくる。相模野で蝦夷の騙し討ちで火攻めに遭うが、天叢雲剣で草を薙ぎ火打石で周囲の草に火をつけると、火は蝦夷の方に行つて、助かった。しかし走水の海道で嵐にあい海神に弟橘姫を生贄に差し出す。

蝦夷征伐を終えて尾張の豪族の館で美夜受姫と婚礼を上げる、裳の裾に月の穢れがついていたが、歌で雅なものに昇華して盛り上がり、結婚できた。その床の辺に剣を置いて、伊吹山の山神退治にでかけるが、雹に撃たれて深傷を負い、そのまま大和に戻ろうとして三重の能煩野で力尽きて斃れてしまう。ヤマトタケルの遺体はそのまま全体が白鳥になって墓から飛び立ち、紀伊半島を海沿いに行き、河内湖に舞い戻った。弟橘姫は海神の宮に行くが、目覚めれば陽と一緒に景行天皇陵から抜け出して、この世界に戻っていた。

『崩れゆく学園——高校生探偵奮闘記1』のあらすじ

五月十八日水曜日、榊周次は御木本校長と囑託職員野々上笙子が参観する中で、日本史の授業をした。平城天皇に柿本人麿の霊が身を合わせたという梅原猛『水底の歌』の世界を紹介したものである。

放課後、天満橋の地下の喫茶店で、陽一と智子から『ヤマトタケルの大冒険』の報告を聴いた。ふたりは景行天皇陵から四世紀中ごろのヤマトタケルのバーチャルリアリティの世界に入り込んで、そこから戻ってきているのである。もちろん二十一世紀にそ

のようなことができる装置はできていないので、その体験はフィクションのはずである。だとしたらそこで大活躍した陽一と智子もフィクションで、その二人と話している榊もフィクションになつてしまうので、榊は『般若心経』のタントラの部分を唱えて、二人の記憶を消してしまつたのである。

六月一日、急遽大手門高校では倉吉良造の『すりかえられたキリスト』の講演が入り、榊の講義は取りやめになったが、連絡が悪く、榊は学校に来ていた。ポスターで倉吉良造が榊の大学生時代の同窓生で、畑中瑠璃子を巡って恋敵だった倉田正俊であることが分かる。

しかも倉吉の『すりかえられたキリスト』というのは弟ヤコブがイエスにそっくりだったので、復活のキリストを演じたという内容で、確かに小説としてはよくできているらしいが、そのことは榊の『イエスの聖餐による復活』でもイエスの聖霊が弟ヤコブに移転すると思ひ込まれて、人格ジャックされた結果、弟ヤコブが復活のイエスと受け止められた話としてでていたことである。にもかかわらず倉吉の小説は大いに評判を呼び、榊のイエス本は再版されていないのはどういふことだ。

講演後、校長室で榊が煎れた煎茶を飲んだ倉吉がヒ素中毒で死んでしまい、榊に動機もあつたということで、嫌疑がかけられる。しかも午後七時にヒ素を榊の自宅の靴箱から発見されたということで、別件逮捕されてしまう。

陽一と智子のクラスでは榊先生がそんなことをするはずがないということ、議論が盛り上がった。早速、イギリス経験論のベークンの「四つのイドラ」や「三つの表」などで整理してみるが、それらからいかに榊先生の容疑が根拠薄弱かということとは言えても、自宅から事件に使われたヒ素が出た以上、それを偽装した人物を特定して吐かせないかぎり、潔白証明にはならないと、山田茂樹に指摘される。

次にデカルトの方法的懐疑を用いて、榊先生は考える我にとって明晰判明に潔白かどうか議論されるが、生徒たちの知り得ない榊先生の闇もあるかもしれないので完全には潔白は証明されなかった。

マスメディアの報道が榊先生に不利なのに不安を感じた生徒たちは、ミクシイや2チャンネル、ミニコミ誌などで榊先生についての誤解を解き、事件についての情報も独自に集め、解明しているということになった。特にミクシイでは「哲学史で謎を解く」というトピックを作って、榊先生のマイミクにも参加してもらって、哲学史の勉強をしながら、それぞれの哲学から、この事件についてその意味や背景について論じてもらい、できれば謎の解明にもつなげたいということになった。

デカルトの物心二元論は、魂は精神的実体として肉体に置き入れられる構造になっており、これはイエスが聖霊や悪霊につきものとして信仰していたのと同じ発想ではないかという書き込みがあった。またスピノザの永遠の相の下に必然的連関を捉える見方

を適用すれば、この事件は、校長を狙ったものである可能性が強いので、必ず犯人は次の機会を狙っている筈だから、やがて新たな展開があり、榊の無実はずと証明されるという書き込みもあって、共感を呼んだ。

キリスト教聖戦団を名乗る声明で、倉吉は復活を否定して天罰を受けた、榊も聖餐による復活仮説で、キリスト教を冒瀆したので天罰をうけるべきだと、犯行あるいは犯行予告声明とも受け取れる表現をした。しかしキリスト教の各団体は、神に代わって罰を下すのはキリスト教徒ではないとして、いたずら扱いしていた。

三輪智子は『闇の十字架―大手門高校事件ニュース』を古谷先生の協力で発行した。事件は校長による学校改革への不満が背景にあるとみて、数字で業績を上げようとする安易な姿勢が問題の根にあると指摘していた。これに校長は反発して、生徒が事件に巻き込まれるのを防ぐべきだと息巻いた。しかしその席で教員から、学校改革で行き過ぎがあったのなら改めるということで、不安も鎮める必要があると指摘され、校長も当面は転校勧奨を控えるようということになった。

生徒たちがニューメディアで対抗していることに対して、学校側が抑えにかかったもので、これは社会契約論からみるとどうなのかということが、ミクシイで話題になった。国家権力を作って、そこに統治を任せ、治安維持を任せている以上、勝手に国民が事件を解明しようとしたら、捜査に割り込もうとするのは、国民の義務に反するのではないかという学校側の論理である。

これに対して、自己保存権などの生存権や、自らの利害を守る権利は認められており、司法当局が捜査妨害を取り締まるのは、それなりの法律を制定した上でなければならず、実際に民間人も様々な事件について調査し、捜査をしており、これは基本的人権であるという法律関係の仕事をしている人からの書き込みがあった。

8日に『革命は電撃的に到来する』という幟を掲げた五人の中高年の「アナキスト革命団」が校長室を占拠し、校長を監禁した上、灯油をまき、既に強制的に転校させられた生徒の復学を認めることや自殺した生徒に対する謝罪や補償を求めた。しかし団長の三好六郎の校内放送は、すぐに電源が切られ、生徒たちには伝わらず、下校させられて、機動隊の突入で一団はあっけなく逮捕された。この決起は、報道管制で伏せられたが、生徒たちの内部告発で、抗議が殺到し、翌日事件の全貌が明らかになった。これを受けて、ミクシイではロックやルソーの革命に対する考えなどが検討されたのである。

哲学史の議論は、いよいよドイツ観念論に入り、まず唯物論と観念論の対置の問題から入り、観念論の三つの型、イデア論、物心二元論、存在と思维の同一論の比較がなされた。ドイツ観念論は最後の存在と思维の同一論にあたる。その場合の思维は感覚から高度な思考まで含めたものである。そして認識論は反映説ではなく、構成説を用いるので、事物は意識の束として捉えられるとした。ただし、意識が自由に事物を構成できないのは、原理的に

感覚に現れない物自体が意識を制約しているのではないかというのが、カントの特徴で、物自体については人間の物事を何かを判断する理性の限界を超えているとしたのである。もちろんこの事件についても今までの現象から犯人を特定することは不可能であるということだ。

カントの道德説は、欲望や利害によって動かされる傾向性に従った行為には、道德性はなく、傾向性を抑制して人としてなすべき義務に従うことに道德性をもとめるものであった。己の立身出世のための受験勉強は傾向性に基づく行為であり、言われなくても合格することのメリットは分かっているので、合格したければ勉強するし、勉強しろと言われたのでするわけでもないのだ。それより現代世界や日本の問題を踏まえ、学問することの意義や使命やそこからくる生きがいみたいなものを自覚させることの方が、道德的な気概が生まれ、学力的にも向上が見込めるのではないかということである。

とやかく議論していても真相解明は進まない。陽一と智子は勇気を出して、事件と関連がありそうな人物に事情を聴くことにした。まず校長の秘書役である嘱託職員の野々上笙子から、事件当日茶筒にヒ素を入れられる可能性は、教職員や生徒、部外者にもあり得たことを確かめた。

そして古文の古谷先生に吉永先生が突然休職になった事情が、歴史教育の偏向問題で、父兄からクレームがあり、それをプライベートをからませることで、休職に追い込まれたことが明確にな

った。その事情が公になったら困るので、教職員は問題にできなかったこともはっきりし、その内容は教職員には周知のことであったこと、どうやらそれは吉永先生と古谷先生の不倫問題であることも分かった。

二人は明日香村に休職中の吉永先生を訪ねて、休職問題の真相を質した。吉永先生はそれを認めた上で、大学院の博士課程に進むことになっており、辞めさせられたことの恨みから犯行に及んだわけではないことを確かめることができ、彼女については無実の心証を得た。

一方「哲学史で謎を解く」のトピックではフィヒテの主意主義的な哲学が紹介され、彼の救国的な「ドイツ国民に告ぐ」というナポレオン支配下で民族的自覚をもった国民教育が紹介された。それに関連づけて日本の教育危機が、日本の国際的な地位の低下と結びついており、教育の再建が重要であることが論じられていた。

さらに知的直観の立場に立って、思惟と存在、主観と客観、人間と神、人間と自然、男と女などの断絶を乗り越えるシェリング哲学が紹介された。「人間の意識は自然の自己意識である」と立場は、自然を人間の非有機的身体として捉え返す立場につながり、21世紀のネオヒューマニズムにつながっているという評価がなされた。

陽一たちは「アナキスト革命団」に影響を与えた平田慎二に案

内されて、榊の自宅周辺を調査した。ヒ素がなくなった坂本病院は榊の自宅のすぐそばにあった。その当直の内科医横山葉子と古谷一哉は同じ「河内文化研究会」に属していることが、WEB情報からすぐにわかったのである。

また榊の自宅の鍵は旧式なので針金で開けられることも平田の実演で確かめられた。そして榊の妻千恵子が久しぶりに自宅に掃除に戻ってくるところに出くわし、めげることなく頑張っている姿に二人は励まされた。

ミクシイの書き込みの方はいよいよヘーゲル哲学に入っていく、ヘーゲルは、哲学は絶対精神の自己展開であるという立場に立ち、人間理性もその一段階に位置づけることで、人間理性の限界に固執するカント哲学の限界を突破する。そしてその体系を展開していく方法は弁証法である。存在においてはそれであっても、そのことが自覚できていない即自の段階、そして他者との関係において、自己がどのようなものである自覚させられている対自の段階、そして存在においても自覚においても自己がどのようなものか納得して生きている即且対自の段階、この三段階をたどりつつ、次の段階に高まっていくのである。そしてその発展の原動力は、否定的なものとの矛盾であり、闘争である。この発展の弁証法がヘーゲル哲学の神髄をなすのだ。

事件はいよいよクライマックスになる。進学校の校長会から戻った北津高校の平泉校長は三軒家東の自宅の前で何者かに射殺される。陽一の自宅のすぐ近くである。被害者の息子の秀一とは陽

一は幼馴染だったので事件について話し合った。その際に現場を見物に来ていた女性が怪しい微笑をしたので、後をつけると瞬間路地の両側の家の明かりが消え、拉致されて、アパートの一室に監禁された。そして事件から手を引かないと命が危ないと警告された。そして元の路地にもどされた。

謎の女は坂本病院の横山葉子内科医ではないかとひらめいた陽一は、あくる朝早く、八尾の横山内科を見張った。陽一が登校しないのが気になった智子はちょうど釈放されて報告に来た榊先生に陽一が危ないことを伝え、八尾に探りに行ったのではないかと言った。すぐにパトカーで現場にかけつけると、横山葉子の借りていたアパートに陽一は拉致されてぐったりしていた。なんとそこに古谷一哉がいたのである。銃撃戦で警官は殺され、智子を庇おうとした榊も撃たれてしまった。

古谷は若い時に海外生活にあこがれて中東にいたが、そのとき米軍がらみの仕事で修羅をくぐっていた。それで日本的なものに郷愁を感じ、日本に帰って古文の先生になったのだったが、中東での修羅で受けた心の疵が癒えきっておらず、殺人衝動が抑えきれなかったのである。

榊は煎茶を倉吉に注いでいた刹那に、その濃い香りに包まれて、白昼夢を見たのだった。

二〇一二年三月二八日校了

『長編哲学サスペンス 沈みゆく列島―スーパーヒーロー孫明道伝』

著者 やすいゆたか

Copyright (C) 2012 Yutaka Yasui. All rights reserved.